

特攻観音年次法要

平成17年 9月23日
世田谷山観音寺

参列者 遺族 54名
会員等 186名



会長 山本 卓真

式次第

- 梵鐘点打
- 大衆着座
- 式衆入場
- 国家斉唱
- 山主願文
- 読 經



祭 文

- 追悼の辞
- 遺族代表
- 戦友代表



世田谷コールエーデ合唱団

ふるさと、夜の歌、
みかんの花咲く丘
はるかな友

世田谷区長挨拶

献 歌

献 吟

- 奉納献奏
- 全員合唱



トランペット 海ゆかば
全員合唱



吟 石橋 一歌
笛 逢坂 竜信

ラッパ献奏



海軍軍装会ラッパ隊
陸軍軍装会

報 会

特 攻

平成17年11月

第65号

〒105-0001 東京都港区
虎ノ門3-6-8 第6森ビル
財団法人 特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
電 話 03(3432)1090
F A X 03(3432)5567

編集人 田 中 賢 一
発行人 栗 原 宏

目 次

特攻観音年次法要	1
八月十五日の靖国神社	3
ポツダム宣言と国体護持	4
宮城事件の一日	5
田中静老大将の終戦処理	8
終戦時の騒擾事件	8
敗戦時集団自決した民間人	9
終戦時の伏竜特攻隊	12

終戦時自決した人々	13
終戦秘話三題	14
条約破りは共産国の常套手段	16
「大和」の沖縄特攻	17
神風特攻山田大尉の体当り	21
特攻を知らない世代の人達へ	22
天皇陛下のサイパン御訪問	27
特攻に散った友	28
万物流転と不変のもの	30
撃墜した相手の遺族と会見	31
第六〇一航空隊戦記抄	33
世田谷山観音寺の文化財	36
東京上空B29体当たり	37
提言	40
◎育ての親斎藤義雄さんほか	41
香取航空基地慰霊祭	42
特攻の元祖鳥居強右衛門	43
憲法改正について	43
特攻絵葉書の説明	44
空挺墓前祭	45
航空特幹と特攻隊員	46
大西中将の特攻決意まで	48
特攻会報に寄せて	50
靖国慰霊祭のビデオを観て	51
事務局よりお報告数件	51



焼 香

祭文

二年越しの改修工事が成った特攻平和観音堂の御前に、御遺族・戦友相集い、本日茲に第五十四回特攻平和観音年次法要を執り行うに当り、特攻烈士のみ霊に申し上げます。

終戦六十年節目の今年、財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会が正式に発足し、三笠宮崇仁親王殿下を名誉総裁に戴いて、去る八月十日靖国神社で慰霊祭を挙行、活動を開始致しました。

次世代への慰霊顕彰の実を淀みなく継承して行く上で、本財団が設立されたことは誠に時宜を得たことで慶びに堪えません。

財団の認可が予定より遅れましたが、それは財団が大東亜戦争を名称に用いたことに、関係省庁の中で疑義を唱えた役人がいた為と聞き及んでおります。

この事は、我が国には今尚自虐史観から脱却し得ていない人々が、社会の枢要な地位を少なからず占めていることを示していると言えましょう。それが諸外国に対して言うべきとも言わずして、叩頭・謝罪を繰り返してその場を凌ぐという情無い態度を続けていることに結果している、と思わざるを得ません。

今、我が国に求められていることは、毅然とした態度を以て独立国家としての尊厳を、対外的に示して行くことに全力を傾注することでありませぬ。

一方、今年の八月十五日に、靖国神社には嘗てない大勢の方々が参拝されました。この事は、最近の傍若無人な

中国の反日デモに対する我が国の弱腰の対応を目の当りにした国民の間に、これでは駄目だという素朴な感情が、一気に沸き上った証左でありませぬ。

更に第四十四回衆議院総選挙で、為政者が党利党略にとらわれることの無い態度で臨めば、民意は圧倒的に支持することが示されました。

之を機に遅々として進まない憲法・教育基本法の改正を初めとした諸施策の改善が積極的に進められ、我が国が矜持と自信に満ちた真の独立国家として、国際社会に貢献出来る様になる日の到来が、一日も早いことを切望するものであります。

私共は、皆様方の慰霊顕彰と共に、我が国の伝統と文化・歴史を改めて見直し尊重することが、愛国心の礎となることを声高に世の中に訴えて来なかった憾み無しと致しませぬ。

本日この様に特攻烈士の御前に立つて追悼の誠を捧げ、諸霊の崇高な行為とその基にあった精神に対して深甚の敬意と謝意を表します。そしてその精神が堅持されてこそ、自虐史観からの脱却が可能になると考えております。

私共は、残された人生全力を以てこの目標達成に邁進致します。在天の英霊、何卒私共を御照覧賜り、一層の御加護を下さいます様に伏してお願ひ申し上げます。

どうか安らかに眠りください。平成十七年九月二十三日

財団法人 特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会

会長 山本 卓真

献吟 吟 石橋 一歌

笛 逢坂 竜信

富嶽隊 幸保 栄治

昭和三十九年十一月十五日 ミングナオ島北東洋上にて戦死

出で立てば 還らざりしと知りつつも 巳むにやまれぬ 大和魂

第3金剛隊 鈴木 孝一

昭和十九年十二月十四日 バコロト島南西洋上にて戦死

皇国の為 散ってかひある大丈夫と

為りてぞ生ける 験ありける

世田谷の杜に鎮まる観音堂 友を送りしあの日より

特攻烈士のみ霊宿るこの堂宇 鳥兎匆々の六十年

梵鐘の余韻嫋々として 杖を頼りに罷り越し

香煙は静かに流れ 観音様に手を合はせ

読経の声堂より漏る 験にうかぶ若き武者

老兵の合わすたなごころ 同期の桜肩組みて

験に浮かぶ在りし姿 うたいし所雲はるか

観音さまの台に在るか 後に続くを信ずると

特攻烈士の大慈悲心 遣せし言葉忘れめや

観音さまと並び立つ 我ら老耄ながらえて

君が勲を後の世に

語り伝うる責め負はん

8月15日の靖国神社



この日の参拝者は20万5千（神社発表）という。暑さ酷しいのに老若男女踵を接している。正午の黙祷を神前での思い、11時半に地下鉄九段下で下りたが、靖国神社に向かう人で駅は大混雑、人の流れに従って境内に入ったが流れは遅い、やがて神門の所

まで辿り着いたが、そこからは全々進まない。暑さは老いの身にこたえ、深々と頭を下げてここから引き返した。その晩のテレビで偏向NHKはこの事は全く放送しない。翌朝の産経新聞は第一面の半分を使って靖国神社を掲載している。同じ日本人か。

終戦六十周年

これが庶民の姿だ。小泉首相は四年前に八月十五日に参拝すると約束しておきながら、未だ約束を果たしていない。郵政民営化について国民に信を問うのは正論だが、靖国参拝とは別次元。中共が何と言おうと所信断行の気力がなければ、諸政改革はできない。内政干渉される度に「二度と戦争を繰り返してはならない」という、不戦の誓いから参拝している」というが、なぜ英霊に感謝の気持ちで参拝していると言えないのか。この暑いのにここに足を運んでいる庶民は、不戦の誓いなどの洗脳され、靖国神社に背を向けている。中共に河野洋平ら反日政治家共よ、ここに参拝している純正日本人の爪の垢でも煎じて飲んだらどうだ。それが嫌なら日本人やめたらいい。

英霊は戦死したら靖国神社に祀られ天皇陛下の御親拝を戴けると信じていた。

昭和天皇の昭和六十一年にお詠みになった御製

この年のこの日にもまた靖国の
みやしろのことにうれひはふかし
御親拝の露払いもできぬとは、不忠
このうえもない。

偃武還曆之賦

逝くものは斯くの如きか昼夜を捨てず (論語子罕篇)

戦熄みて六十年 曆は還りぬ 一億一心聖戦完遂に邁進せし往時 物豊にして心貧しき現世 正に雲壤の感あり 国敗れ山河残れど 失いしは心ならずや 拳国一体戦いし頃 隣国の侮りを受けしこと無かりしに 鼎の軽くなりしこと 今日より甚しきは嘗てなし 靖国の英霊如何に見ぞなわせ給うや 国の根底 一にかかりて教育に在り 占領軍の政策に拘る戦後の教育に 洗脳せられし者の要路を占むるに至る 国の大事弁えざる指導者 仮初めの平和に酔いし大衆 大は国家の経綸より小は諸々の社会事象に至るまで 頽廢地を払い 亡国の深淵見るが如し 離騒の念絶ゆるなし

嘗て東海の君子国 正大の気天下に満ち 道義高揚 滅私奉公 隣国に尊崇の念抱かせり 固より 是れ一刻の懐古 一片の感傷に非ず 民族永遠の繁栄を求めんとするにあり 時恰も日露戦捷百周年に当たる 祖先の血潮我らが体内に存するに非ずや

熟々思うに 諸悪の根源は 憲法と教育基本法に在り 被占領下の呪縛破棄こそ喫緊事なるに政治の何ぞ怠慢なる 在野の人士 挙げてこれを求め 社稷を磐石の安きに置かんとす

人生は限りあるも 民族は尽きるなし 偃武還曆の年にあたり 吾人奮起し 次代と相携え 民族の未来を莊嚴にせんとす

(注) 偃武＝武器をかたづけ、武装解除の意

離騷＝屈原の楚辞に出ていた言葉で、離はかかる意、騷は愁いの意である。ここでは憂国と解すればよい。

ポツダム宣言と国体護持

一九四五（昭和二〇）年七月十七日ベルリン郊外のポツダムに米英蘇の首脳が会談し、米英華三国の名で日本に対し降伏勧告文が発表された。先ずその全文を掲げる。

一、米国大統領、中華民国国民政府主席、英帝国首相は数億の国民を代表して協議を重ね、日本国に対しこの戦争を終結する機会を与えることに合意した。

二、欧州方面の陸海空軍によって数倍にも増加された米英中の驚くべき兵力は、日本本土に対し最後の打撃を加えようとしている。この軍事力は、日本国が抵抗をやめるまで日本国に對して戦争を遂行しようとする全連合国の決意によって、鼓舞され持続されている。

三、自由を希求して奮起する世界の諸国民の力に対し、ドイツが重ねてきた無益で無意義な抵抗の結末は、日本国の国民にとって極めて分かりやすいひとつの見せしめとなるだろう。現在、日本国に向かって集結しつつある力は、抵抗を続けるナチスに對して発動され、全ドイツ国民の国土

と産業、生活様式を荒廃させた軍事力よりも強大なものである。われわれの決議によって支持されたわが軍事力の全面的な発動は、日本国軍の不可避にして完全な破壊と、日本本土の、同じく不可避にして完全な焦土化を意味する。

四、日本国は、無分別な算段で日本帝國を滅亡の淵に陥れている強情な軍事助言者たちに支配されたままこの戦争を続けるか、あるいは道理に従うか、決断する時がきた。

五、以下は、われわれの条項である。われわれは譲歩しない。ほかに選択の余地はない。いかなる遅延も受け入れない。

六、われわれは、無責任な軍国主義者が世界から駆逐されるまで、平和、安全、公正の新秩序を形成することは不可能であると確信するものである。日本国の国民を欺き世界征服の誤った道へ導いてきた者の権力と影響力は、永久に除去されなければならない。

七、右のような新秩序が形成され、日本国の戦争遂行勢力が破砕されたという確証が得られるまで、連合国が指定する日本国内の諸地点は、連合國進駐の根本目的の達成のために占領下におかれるべきである。

八、カイロ宣言の条項は履行されるべきであり、日本国の主権は本州と北海道、九州、四国、われわれが規定する諸離島に限る。

九、日本国の軍隊は、完全に武装解除されたあと、それぞれの故郷に戻って平和で生産的な生活を営む機会を得ることを許される。

十、我々日本人を民族として奴隸化したり、國家を滅亡させることは意図していないが、われわれの捕虜に對して虐待行為をしたものを含む、全ての戦争犯罪者は厳正な裁判が加えられるべきである。日本国政府は、日本国民の間にある民主的な傾向を再生し強化するために、あらゆる障害を除去しなくてはならない。言論、

信教、信条の自由とともに、基本的人権の尊重を確立すべきである。

十一、日本国はその經濟を持続し、物による正常な賠償可能程度の産業を維持することは許されるが、日本國を戦争への再軍備に向かわせる産業は許されない。この目的のために、管理は別として、原料の入手は許される。日本国は将来、世界貿易関係に従事することも許される。

十二、以上の目的が達成され、日本国民の自由に表現された意思に従って平和的性向の責任ある政府が樹立さ

れると同時に、連合國占領軍は速やかに日本から撤収する。

十三、われわれは、日本国政府がすべての日本軍隊の無条件降伏を直ちに宣言し、そのために適性かつ十分な保障を心からの誠意を持って準備するよう要求する。これ以上の日本國の選択は、迅速かつ完全な破壊あるのみである。

日本政府はその前にソ連に對し講和の中介を依頼してあったので、回答を留保していたが「ノーコメント」という姿勢は「黙殺」と伝わり、やがて「拒否」と理解され、原爆投下の口実となった。

ここで注目すべきは第十二項である我が方では「日本国民の意志に従って天皇制を選択できる」と解釈されるがまた一方では「主権在民を意味し國體の変更を要求している」ともとれた。

そこで八月十日になって「天皇の國家統治の大権を変更するの要求を包含しあらざるこの了解の下に帝國政府はポツダム宣言を受諾す」と回答した。

これに對し十二日先方からの回答は「天皇及び日本國政府の國家統治の權限は連合軍最高司令官の Subject to」とあった。正確に訳せば「従属す」となるところだが、外務省は軍部の意向

を顧慮し「制限下に置かれる」と意識した。

国体護持の確証は得られず、議論は沸騰した。米側の放送は盛んに日本の最終回答の遅延を責め立て、十三日になるとB-29で日本語のビラを撒いたそれには「日本皇帝及び日本政府の統治権は降伏条件実施に相当と思惟する措置を採る所の連合軍最高指揮官の下におかれる」と書かれていた。

かくして前号で紹介した十四日のご前会議における天皇の御諚、そして終戦の詔勅となる。

(追記)

ポツダムにおける会議は対日降伏勧告のことだけではなく、ドイツ降伏後の欧州における諸問題も協議された。

米国はこの会議に対日降伏勧告の案文を持参し、チャーチルに示し若干修正し、蒋介石に回送した。蔣からは七月二十六日同意の回答が来たので、この日付で公表した。蘇連はまだ対日戦を開始していないので、米英華の名前で出したが、対日戦開始後これに加った。

ポツダム宣言は日本に課すべきことを述べているが、よく読むと連合国の為すべきこともふくまれている。第九項を見ると日本軍は武装解除後、それ

ぞれの故郷に戻って平和で生産的な生活を送る機会を得ることをゆるさる。

とあるが、裏を返せば外地にある部隊を故郷に帰す義務を連合国が負っているということにはかならない。

蘇連はあとになってこの宣言に加はったが、この宣言を守らなかったこと著しいものだった。

皇居前で土下座する人々



「宮城事件」の一日

田中 賢一

長い一日

戦後何年だったか上映された「日本の長い一日」という映画があった。この題名は、日本では「史上最大の作戦」という題名で紹介されたノルマンジー上陸作戦映画の正式の題名が「長い一日」だったので、それからヒントを得て命名されたものと思う。

ノルマンジー上陸作戦の第一日にしろ、昭和20年8月14日の午後から翌日の正午までの事件にしろ、とても一日二十四時間では、さばききれない重大事だった。事件を起こした人々の念頭にあったのは、国体護持の一念だけだった。

国体護持

国体護持という一語について、私の体験したことを先に述べさせてもらう。

挺進戦車隊(滑空機搭載の戦車隊)の隊長だった私は、本土決戦にあたり第五十七軍の指揮下に入り、都城郊外の三股村に駐屯していた。八月十五日財部にある五十七軍司令部に召集があった。隷下各師団からは参謀長かその代理者が集まっていた。軍司令官西

原貫治中将は停戦命令を伝え、軍は目下戦闘中ではないが、米軍機が現れたり空挺部隊が降下してきても戦闘行動をとるな、というような説明があった。

その時二二師団の高級参謀戸次中佐は突如立ち上がり「そのようなことで国体が護持できませんか」と強い口調で発言した。私共はそれまで敵を迎え打つ準備に忙殺され、中央でどのようなことが起きていたのか、知る由もなかったが、軍司令官ともなればある程度知らされていたと思う。

西原軍司令官は、そのことをここで議論しても始まらぬ。とにかく方面軍司令官の命令を伝えておく、というようなことを述べて、とり合はなかった。戸次中佐は「我が師団は師団長が天皇陛下の所に直接命令を受領に行っているので、師団長が帰るまで今の命令には従えません」と言った。軍司令官は何とも答えず、解散となった。

二二師団長は有名な桜井徳太郎少将で、戦後なにかと御愛顧を被むったので、当時のことは直接承っている。

師団司令部は宮崎県都農町にあったがポツダム宣言受諾と聞くや、隣の川南村にあった第一挺進団司令部に乗り込み、司令部飛行班の軍偵を出させ、それに乗り立川に向かった。

当時中央では師団長級で何か一騒動



ありし日の阿南大将(上)と自刃の血にまみれた「大罪を謝す」の遺書

を起こしそうな人物として、二〇二師両所をマークしていたというのも、この件に入る。

宮城事件

話を横道に入るが、その時皇太子殿下(今の天皇陛下)は那須御用邸に滞在しておられた。近衛師団の一個大隊が警護に任じていたが、不穩の噂があるので、師団参謀の溝口少佐を終戦直前に派遣した。溝口さん(故人)

から聞いた話であるが、高崎にあった片倉師団長が兵力を動かし、皇太子を頂いて中央と別の行動を執りはしないかと心配したという。片倉、桜井の御
 首相の印綬を受ける前だったのか、偶々大本営にいらっしゃったのか、そのへんのことにはわからない、兎に角桜井さんはそのように私に話された。
 だいが前置きが長くなつたが、標題
 「国体護持」の確約を得られるまではと戦争継続の意志を捨てなかつた阿南陸相は、最後の御前会議を機に「承認必謹」を心に期し、十四日正午過ぎ陸軍省に戻つた。御前会議の結果は如何にと待つていた中堅幹部に対し、大御心を伝え承認必謹の決心を述べ、私の決心に従えない者は小官の首を刎ねて

行動せよと言つた。

軍事課員の畑中健二少佐はこの席を飛び出し、近衛師団司令部に赴き、師団参謀の石原貞吉少佐と古賀秀正少佐に会い、師団の決起を呼びかけた。

同じく軍事課の椎崎中佐も同志として行を共にすることになった。この人たちの考えはポツダム宣言を受諾し国体がどうなるか、再度問い合はせることを天皇に直訴しようとするもので、満足する回答が得られなければ、なお戦争を継続し、一時的勝利を得たとき講和に持ち込もうとするものだった。

森起近衛師団長を説得し、師団を動かす宮城と外部を遮断し、陛下に直訴しようとしたが、森師団長が応じなかつたので、午前二時四十五分師団長を殺害した。このとき航空士官学校の区隊長上原重太郎大尉も森師団長殺害に加わつた。師団長亡きあと、古賀参謀は師団命令を作成し下達した。それは宮城を警護し外部と遮断し且つ放送局を占拠するといふものであった。

この命令で師団の各聯隊は行動を起したが、間もなく偽命令であることが判明した。その後畑中少佐は玉音放送の録音盤を奪取しようとしたが、果たさなかった。

正午天皇陛下の玉音放送は行はれた。椎崎中佐と畑中少佐は、午前十一時過ぎ宮城前の芝生で自決し、古賀少佐も十二時師団長室に安置された森師団長の遺体の前で自決した。

上原大尉は航空士官学校に帰り、十九日校内において割腹、同期生が介錯した。

この人々の行動は毀誉褒貶半ばしているが、私心は微塵もなく、国体護持の一念に発したことだけは間違いない。首謀者の一人と目された近衛師団石原参謀は、その後上野の山を占拠していた水戸航空通進学校の一群の説得に赴き、そこで射殺された。



国体護持孤忠留魂之碑 芝青松寺

私の知る二人の人物像

田中 賢一

(近衛師団参謀古賀秀正)

この人とは士官学校本科同中隊だったが、兵科も教授班も違うので、話し合った記憶はない。鼻筋のとおりた色の理知的な顔だけは覚えてる。

私の同期生会の出した戦死者追悼文集から要点を抜すいしてみる。

彼は東条大将の女婿だが、結婚したのは父が17期で東条大将と同期という縁だった。それでも彼は迷って予科当時の区隊長に相談して決めたという。

彼は正義感が強く、国事を論じ悲憤憤慨することがあった。

19年10月陸大を卒業し近衛師団の参謀となったが、第一の任務は一号演習と呼ばれた皇居の防空壕補強工事の指導だった。森師団長が各聯隊を指揮して行ったが、彼は先輩聯隊長相手に任務を遂行し、師団長の信頼厚かったという。その工事が完成して半月後終戦の事件となり、信頼された師団長を殺害する羽目となった。

(航空士官学校区隊長上原重太郎)

18年7月頃私は陸軍挺進練習部の本部にあって、教育担当の幕僚をしてい

た。他部隊から志願して集まった将校練習員に対する落下傘降下の教育は、教育部が担当して終了した。今度は挺進作戦の戦術や戦史の教育を行なうことになり、私は戦術を担当した。

教育期間は一週間くらいだったろうか、その時航空総監部から通達が来て、優秀者一名に恩賜品を与えるにつき上申せよと来た。それまで将校練習員教育は何回も行ったが、恩賜は貰えなかった。従って成績の記録も出来ていないし、今度の学科教育も試験などやる考えはなかった。どのように選考したらよいか、我々の方が迷った。やむを得ず教育部教官も交え協議した。衆目のみるところ上原ということになった。

彼は士官学校55期、まだ上の期の者もいたが上原が銀時計を頂いた。私が彼と接したのは戦術教育の場だけだったが、理路整然と開陳し頭脳明晰という印象は残っているが、あのような行動の兆しは感じなかった。

彼は挺進第三聯隊に所属し、いつか士の区隊長に取られたか記憶はない。この聯隊に残っていたら、翌年レイテ作戦で戦死したであろう。



上原重太郎大尉



古賀秀正少佐



畑中健二少佐



椎崎二郎中佐

田中静老大将の終戦処理

田中大将は第十二方面軍司令官として帝都防衛の重責を担っていた。十五日午前二時古賀参謀が発した偽師団命令に、不審を抱いた近衛歩兵第七聯隊長が報告に来たことにより、事態を知った田中大将は、直ちに出向き森師団長が殺害されたことも知り、出動準備していた各聯隊長を掌握した。宮中に赴き陛下の御無事なのを確かめ、ご安心を乞う旨言上した。

大将は八月二十四日二十三時十分、軍司令官室で自決されたが、その日の昼朝霞の予科士官学校生徒の川口送信所占拠事件現場に赴き、区隊長以下に懇々と諭し解散させた。



兵庫龍野市の白鷺山に建つ田中大将記功碑

大将の郷里兵庫龍野市には顕彰碑が建っておりその碑文は次のとおり刻まれている。

正三位勲一等故田中静壹陸軍大将ハ明治二十年十月一日龍野市揖西町小神ニ生ル兵庫県立龍野中学校ヲ経テ陸軍士官学校ニ入校明治四十年十二月歩兵少尉ニ任官歩兵第十連隊付トナリ後陸軍大学校ヲ優秀ナル成績ヲ以テ卒業シ恩賜ノ軍刀ヲ賜ル 爾來軍ヲ要職ヲ歴任シ大東亞戰爭ニハ昭和十七年八月比島方面軍最高司令官ヲ拜命ス 昭和十八年九月七日陸軍大将ニ任ゼラレ昭和二十年三月東部軍管区司令官兼第十二方面軍司令官トシテ大東亞戰爭末期ノ最モ困難ナル時期ニ帝都ヲ中心ニ関東及ビソノ周辺一帯防衛ノ要職ニ就ク 昭和二十年八月十五日終戦ノ詔勅渙発サレントスルヤ陸軍省及ビ参謀本部ノ一部少壮將校ハ天皇陛下ノ終戦ノ玉音放送盤ヲ奪取シテ本土決戦ヲ行ハント企図シ既ニ偽近衛師団命令ニヨリ皇居ヲ占拠セントス ソノ報告ヲ受クルヤ大将ハ決然立ツテ反乱將兵鎮圧ノタメ皇居ニ赴キ諄々ト承認必謹ノ大義ヲ説キ血氣ニハヤキ反乱將校ヲ説諭ス 大将ノコノ勇猛果敢沈着敏達ナル行動ト死ヲ決シタル説諭ニヨリ内乱ヲ未然ニ防ギ日本ノ焦土化ヲ避ケ得タルニ對シ陛下ヨリ優渥ナル御言葉ヲ賜フナド田中大将ノ功績ハ美ニ偉大ト言フベキナリ 大将ハ昭和二十年八月二十四日夜半部下六十萬將兵ニ代リ皇國ノ復興ヲ祈念シツツ闕下ニオ詫ビ申シ上ゲ從容トシテ自刃ス 田中大将コソ眞ニ誠忠無比皇軍最後ノ偉大ナル軍人ト言フベキナリ昭和四十九年六月ニハ昇位ト銀杯下賜ノ御沙汰アリ 宜ナル哉 茲ニソノ功績ノ一端ヲ録シ平和ノ礎トナリシ大将ノ偉徳ヲ後世ニ遺サントス

元東部軍管区司令部副官
第十二方面軍司令部副官
陸軍少佐 塚本素山
昭和五十年八月二十四日
田中大将顕彰会建立

終戦時の騒擾事件

終戦に反対する人々の起した事件で最大なのは、前述の宮城事件であるが、それに次ぐものとしては厚木海軍航空隊事件だった。

厚木にあった第三〇二航空隊は東京地区を防衛する戦闘機隊で、司令小園安名大佐を中心に戦意旺盛だった。終戦の詔勅は君側の重臣が聖明を蔽って出されたものやがて継戦の大号令が出されるものと信じ、小園司令を中心に飽く迄戦う決心に燃えていた。

飛行機を飛ばし檄文を散布し、他の部隊に決起をよびかけ、上司からの訓諭には一切応じなかった。

連合軍最高司令官の着陸は厚木と指定されていたので、海軍当局は大いに当惑していた。

かくするうちに、小園司令はマラリアの再発で高熱を出し、精神に異常を生じ、部下隊員も全般状況を知り冷静を取り戻し、八月二十一日以降武装解除が行はれ、二十六日まで流血を見ることなく事件は解決した。それはマッカーサーが到着する二日前だった。

敗戦に伴い皇位の天壤無窮を

祈り集団自決した民間の人々

妻静子も、翌日その場所の後を追って自決した。

この人たちが靖国神社に祀られるわけでもなく、遺族年金が貰えることもない。現下の混濁の世、これほど純粹な人がいてくれればと思う。

遺詠

敗戦の山河に空し蟬時雨

飯島与志雄

(その一) 尊攘義軍

東方同志会、皇道翼賛青年連盟、勤王まことむすび等の各団体の急進的な青年達が、尊攘義軍と称える団体を結成し、かねて亡国の元凶と目していた木戸内大臣邸を襲撃したが、不在だった。そこでかねてからの集合場所としていた愛宕山に立て籠もった。警視庁の説得に応じず、皇居を遙拝し、次の十名が手榴弾で自決した。

飯島 与志雄 (35才)

稲垣 弘太郎 (30)

和栗 和英 (19)

川口 善一 (33)

谷川 仁 (32)

絹村 浩 (18)

皆川 貞二郎 (22)

茂呂 宣八 (32)

関本 貞次郎 (35)

摺建 富士夫 (29)

茂呂宣八の妻かよ子、摺建富士夫の

神州の不屈を示すこの正気

飯島与志雄

継ぐ人あらば思い残さじ

茂呂 宣八

生きかはり死にかはりつつ国まもる

生命つたへよ山のそよ風



山上に遺る「殉皇十二烈士女之碑」



愛宕山

(その二) 大東塾の十四烈士

大東塾は国学院大学神道科出身の影山正治が、昭和十四年創立したもので渋谷区代々木西原町にあって、尊皇教育と維新運動に専念していた。維新とは本来の姿にたち帰るという意味で政治の腐敗と財閥の跋扈、一部軍閥の横暴を打倒し、日本本来の姿を取戻そうとするものであった。

影山は十九年十一月一兵士として召集され戦地に出してしまったので、父庄平が塾長代行となった。この時までに塾中からの出征者は二十余名あり、塾生となっていた学徒出征者は百四十名もあったという。終戦時には野村、藤原、鬼山の三幹部が庄平翁を補佐し十数名の塾生で塾を守っていた。

十五日正午玉音放送があり、庄平翁は「この上は死か決起二途あるのみだが、今となっては決起の道は殆どないだろう」と、決起の道を探る幹部を説得し、自分ひとり一切を背負い自決する決心を固めた。

十六日午後幹部ら九人が召集され、塾の態度を決することを協議した。一連の敗戦責任者を斬ってから自決するという意見もあったが、もはや義挙の機はすぎたと判断し、一同自決するに決した。塾生の中から参加希望者が加

わり、十四人が自決することになった。そこで自決の場所を何処にするかというところで、皇居前や明治神宮を血で汚すのは申し訳ないと、代々木練兵場の西端、通称十九本櫓のほとりと決めた。そして決行は二十五日早朝とし、身辺の整理や塾内の清掃などを行った。

二十四日、一同最後の準備に入り、午後十時塾長室に集合、共同遺書に署名した。庄平翁が最初に筆を執って、清く捧ぐる吾等十四柱の皇魂誓って無窮に皇城を守らむと書き、年月日と自署を入ると、野村辰夫以下次々と祈りを籠めて静かに署名した。事態を知って警視庁と代々木警察署から幹部が来て、自尽を思いとどまるよう説得したが、庄平翁は拒否した。

二十五日午前一時庄平翁以下十四名は入念にみそぎを行い、白鉢巻きと刀を持って集合した。同志一同は神前で夜食をとった。終わると大事の無事遂行を祈念し、次の祝詞を奏上した。

大神の御前に白さく、御前の大東塾同志十四名、うつそみの命をかぎりて無窮に国体皇道を護持拡充の念願を籠め、最後の大きき祭りを明治神宮の御側なる代々木練兵場に於て仕へ奉るを、つばらに聞し召し受け給ひて、大事恙なく取り

果たさしめ給ひ、同志のみたま洩るることなく速やけく高天原の神のみ門に引き取り給ひて、みたま著く永久の御仕へ仕へまつらしめ給へと畏み畏みも申す

二十五日午前一時、十四夜の月が皓々と輝いている。白足袋をはき白鉢巻を締め、鼻緒に白紙を巻いた草履を履いた一同は、玄關を出る時塾に向かって一礼、東方の皇居に向かって一礼し、更に郷里、父母、家族に向かって一礼した。そして見送る影山塾長の子息正明や夫人らに最後の別れをした後野村辰嗣の掲げる塾旗を先頭に肅々と出発した。途中までもと、あとについて来た塾の関係者は、翁の一喝で戻らされた。自尽に立ち会った者は一人もいない。自尽は「自尽予定書」に従い、十九本櫓の一番端の前で次の通り行はれたことは、現場の状況で明らかである。

- 一、ひもろぎを立てる。
- 二、一同着座
- 三、先生着座のまま祝詞奏上。引き続いて一同最後の復奏奏上。
- 四、用意、諸肌ぬぎ、刀に白布を巻く。
- 五、一同同時に割腹自刃。野村、東山が順次介錯。
- 六、野村、東山は全部を見届けて最後をとげる。

介錯役はあらかじめこの二人に決めた。東山の介錯は野村が当たり野村は割腹後自ら胸を刺して斃れたという。

検屍をおこなった検事はのちに、「かく多数の人々が純日本式に糸乱れず見事におこなった集団自決は戦前に於ても、また今後にも、おそらく初めてで、また終りであろう」同じく検屍した井上病院長は、「あれだけ大勢の人が、一度に同じ場所ですべて自決したことは、先ず最近にはない事であった。毒薬を使用するか、手榴弾によるのかはあっても、今回の如く純日本式に割腹自刃するなどという事はなかった」と直後に語っている。

- 自決者氏名(年齢)は次のとおり。
- 影山 庄平(60) 牧野 晴雄(31)
 - 野村 辰夫(30) 藤原 仁(33)
 - 鬼山 保(28) 芦田 林弘(30)
 - 東山 利一(26) 棚谷 寛(24)
 - 野村 辰嗣(18) 福本美代治(40)
 - 吉野 康夫(23) 津村 満好(22)
 - 村田 朝夫(29) 野崎 欽一(22)
- 集団自決を行った代々木練兵場の現地(現在の都立代々木公園)には、「十四烈士自刃の處」の碑が建っている。当時を偲んで碑の廻りには、十四本の櫓が取り囲むように植ええられ、大きく育っている。





「十四烈士自刃之處」碑と建碑由来の副碑は自刃現場の代々木公園の一隅に建立

(その3) 明朝会の十二烈士

明朝会とは日本郵船会社の機関士達が結成した組織で、法華経を教典として、神儒仏三教融合によって国体を鮮明にする思想信仰団体であった。支那事変下他の海運会社にも働きかけ、同調者が増加し組織は拡大していった。大東亜戦争前には八百名前後の会員を擁したが、次々に戦場に出て終戦時には日比和一會長以下三百五十名となっていた。

八月二十三日朝、日比は今から皇居前に行つて、皇室の安泰を祈願しようと呼びかけ、同志十二名と皇居前に向かった。馬場先門から皇居前広場に入り、楠公銅像近くに着くと、一同皇居を押し、なんのためらいも見せず順次自決し、最後に日比會長と副會長格の鈴木忠一が全員の最後を見届け、拳銃で自ら頭を撃ち最期を遂げた。その前に日比は一人の会員に「君は死なないで同志の自決の様子を残った者に伝えてくれ」と遺言し、葬儀料三千円を手渡した。日比らの辞世はつぎの通りだった。

日比和一
「仁愛ナル
陛下冀ハクハ臣民一億ヲシテ再ヒ国
體護持ノ征戦ニ立タシメ給ヘ

日比和一
御教示ヲ給ハリタル同志等ト共ニ
死以ツテ天壤無窮ヲ祈願ス

八月二十三日朝
井上清純閣下
註、井上清純は貴族院議員で明朝会の
庇護者

渡辺裕四郎
「すめろぎのしろしめす国したひつ
つあやめもわかぬ闇路をぞゆく」
「踏み迷ふ死出の旅路をかへりきて
守らでやまむすめらみ国を」

伊地知三郎
「すめろぎのしらすみ国を慕ひてぞ
不束な吾は今ぞ往くなり」
この人は陸士53期の少佐で、第一航
空軍司令部付として勤務していたが、
明朝会の志士と国體護持について肝胆
相照らす仲だったので、自決の行を共
にした。

明朝会自決者氏名と年令

日比和一	46	渡辺裕四郎	36
鈴木忠一	35	酒井忠弘	36
水田太郎	34	小林五郎	36
前島弥太郎	33	水谷保	35
伊地知三郎	26	宮下昌衛	33
白井幸夫	36	鬼頭静子	27



府中大長寺



明朝会十二烈士忠魂之碑

府中市若松大長寺にある

終戦六十周年に因む

「特攻伏龍隊」

海老澤 善佐雄

終戦時のことだけ記述しても、我が隊の生い立ちや特性を知らない、終戦時の真情を理解してもらえないと思

い、少し前の時点から述べる。
第一回伏龍の要員として配置されたのは20年2月1日10名と記録されてい

る。海軍工学校全属科出身者で構成されて、潜水に限って超ベテン組の加藤光明、田中、山本、外七名の特別指揮下任務についた。簡易潜水衣の改良

と、機能向上を計るため、数日後防備戦隊命令にて簡易潜水衣を使用し、特

攻兵器又は舟艇襲撃隊等より発進、碇泊中の敵艦船を水中より攻撃する「簡易潜水衣」を伏龍と初めて報ぜられた。

3月1日第二陣として伏龍実験隊として二〇名入隊、その中の武内孟は、通信学校より特攻を希望して隊員にな

る。他の者は前線で活躍中船の沈没に合い陸上勤務者も多く総体的に年輩者が多かった。

5月1日一般兵科より歴戦の勇士を含む蜂谷京平、江波戸陣外一〇〇名が工学校教員予定者として伏龍講習員を命ぜられた。科目により潜水班と整

備班組に分れ従事するようになった。特殊重装備のため事故で殉職者が出たのは事実であるが、新聞や文書で伏龍の悲劇を伝へたことはなかったと思う。

六十年の歳月の重みにて誇大に報ぜられた感がある。何事も重極秘の時代で、数も氏名も記録もメモも無く、死に連なる率が年輩者に多く見られた。

当局は直ちに航空隊の解散に目を付けて、予科練出身者の採用を考え隊員の募集に踏切った。

5月23日副官海軍大尉藤木篤信着任。第二十八号掃海艇先任下士官上曹飯島健五着任、機雷掃海権威者である。

6月1日五〇〇名、7月15日五〇〇名、予科練甲乙出身者共に四〇〇〇名が動員された。工学校、海軍水雷学校久里浜分校各二千名の隊員が伏龍の講習待ちとなった。多くの殉職者や行方不明者を出したのは潜水指導員の初期の頃で、責任感智識は充分あったが、技能不足が事故に連なる原因と結びつく思いがする。

6月1日入隊者の内二名程不合格者が出て、軍医から報告を受けた。隊員は熱烈に伏龍特攻を希望するので、軍医が合格扱いに変更手続きしたと司令に報告した。此のクラスは呉鎮佐鎮主力で甲種乙種予科練だった。河津武、久保善人、講習期間一ヶ月、七月上旬

講習を終へた隊員は瀬戸内海に浮かぶ情島に、特攻長平山少佐、中隊長三宅中尉が隊員を出迎えた。情島基地には潜水服の数が極少のため事故者も不明者も皆無であった。

6月下旬隊長笹野大行大尉が指揮し特別訓練進行中の出来ごとで、当日は総仕上げの成果を見るため、長距離歩行訓練実施日に当り緊張のうちに順調に進行していた。時間のたつうち波風の影響を受け突然犠牲者数名と不明者が出た。翌日海軍水雷学校久里浜分校(對潜学校)の各科倉庫に於て、西浦賀東福寺住職山田勝剛(伏龍隊菩提寺)により、岡本勝治外七柱の通夜が営まれた。多数の殉職者が出た事に疑問に思い即刻調査に及んだ。酸素瓶関係の整備運搬兵に問いたる処、工場の係員より隊の希望通りの酸素の供給されずとのこと、早速馬堀海岸横須賀酸素工場に出向き、事情を質したところ、相手方曰く身体の自由が効かない兵曹が支給して下さいと申しあり、直ちに酒保係員に交渉して三〇〇〇本程都合して工場に届けた。翌日からの支給数倍増となり、荷車に積み込み作業も手順通り八杆の山道を軽快に運搬し、補給出来た喜びが印象的に思へた。担当

者に聞いたところ数字の零に近い瓶を支給したとのこと、数日後の訓練からは事故の報告はなかった。

7月15日待機していた潜水講習隊員名簿が届いた。北は樺太の羽沢登、主力は関東、東北三〇〇名、広島四国九州二〇〇名、神奈川出身飛行兵長安藤昇、中華民國門奈鷹一郎、出撃できることが喜びと語った場面順一郎、長野の降旗勝一も講習員に含まれていた。

潜水講習員の大半は飛行兵長若干、上等飛行兵の多数、講習員を受付たのは第二回に当たる5月31日、水中攻撃法講習開催は6月16日、伏龍隊用酸素瓶成る可く多数製作と通報された(期日八月未迄)7月18日伏龍隊急速整備展開命令あり、10月末日迄整備せよとされた。

7月26日伏龍隊編制標準表提出のため、海軍省へ新谷司令共々従兵として出向した。訓練は先行し、書類手続は主計科の関係で後れていたようだ。海軍省に司令と同道したのは7月の初旬ではないかと思う。

8月1日 夜光虫の見誤りで全員干駄ヶ崎トンネルに退避、二、三時間程で解除となる。戦闘配置についても肝心な捧機雷未完のためトンネル内待機となった。

8月1日 夜光虫の見誤りで全員干駄ヶ崎トンネルに退避、二、三時間程で解除となる。戦闘配置についても肝心な捧機雷未完のためトンネル内待機となった。

終戦時のこと

8月15日玉音放送を聞いた後内容はガーガー音で不明の状態だった。間を於て伝令が本土決戦に備えて待機せよと解散、部屋に引きあげた。

明日から訓練続行と士官の間には徹底抗戦を唱える雰囲気があったが、それ程強く感ぜられなかった。翌日から厚木航空隊の飛行ビラをまき、我が伏龍隊も訓練続行の日々が続いた。8月20日迄続いた。新谷司令が訓練やめよの一声で特攻訓練は終わった。

危急存亡の時に立案された特攻伏龍は、国を護る責任感の強い優れた若者の集団であった。指導者と教員共々士気高揚融和団結した期日は六ヶ月の短い期間であった。特攻で本当に幻の特攻隊で終わった。出撃の機会もなく水漬く屍の覚悟も残念でならない。

司令の言葉に「国家の最も有力な資産は、実際に防衛に開発した兵器よりも、快よく国に殉ずる兵士であった」と今も耳に遺る。

卒業間近の五〇〇名(野比訓練中)の戦闘配置は熱海海岸「錦浦基地」と司令は最後に洩らした。

海軍特攻伏龍隊名称左の如し
第一特攻隊第七一突撃隊

二〇・七・二五

第一楠木部隊第七一嵐部隊

司令 海軍大佐 新谷 喜一

副 長 海軍中佐 前田 實穂

特攻長 海軍少佐 島田喜興三

分隊長兼
特攻長教官 海軍大尉 入野 光夫

同 海軍大尉 宇野 保

教 官 海軍大尉 笹尾惣太郎

同 海軍大尉 橋本 正熙

同 海軍大尉 草野 家康

主計長 海軍主計大尉 足立順太郎

司令附 海軍大尉 藤木 篤信

海軍中尉 笹野 大行

海軍中尉 陶山 正人

海軍中尉 藤居 徹男

分隊長 海軍中尉 榊原 悟郎

海軍医中尉 栗原 毅一

海軍医少尉 岩田 淳治

海軍主計大尉 安藤 寿郎

海軍主計少尉 三井 脩

司令附 海軍上等兵曹 飯島 健五

先任教員 海軍上等兵曹 海老澤善佐雄

終戦に伴い自決した人々

前号に産経新聞発行の「あの戦争」に掲載された記事を抜すい転載したが、大分洩れがあるので、各期各会に提出をもとめ、前号に名前が出ていても更に詳しい事情を紹介したいことがあれば、提出されたいと依頼した。その結果九月末までに回答を寄せたものを左に記載する。

冒頭の「」内は回答を寄せた者の所属氏名で、太字は自決者を示す。この調査は継続中なので、まだ提出のない期や会は至急調査して提出されたい。

彼は、8月19日隊長室で拳銃で自決した遺書に言う「小官の至らざるにより敗戦の辱しめを受け 陛下に対し申訳なく死してお詫びす 靖章 汝もし生ありせば五十年後に鬼畜米英を倒し必ず父の仇を討て」靖章は生れて間もない嗣子で、妻子は郷里庄島に帰してあったが、原爆でこの時まで生死不明。終戦時上野で航空通信学校一味の騒乱事件があったが、これと彼の自決との関係は明かでない。

後藤 達美 工兵第二十二聯隊にあつた彼は、泰国の北部山嶽地帯に復廓陣地を構築中だった。終戦の詔勅を伝達した後、祖国日本の将来を憂い、既に心中期するものがあり、それが言動に現れていたのであろう。聯隊長はじめまわりの人が案じていたが、22日夜自室で母の写真を机上に飾り、拳銃でコマカミを撃ち自決した。辞世の歌は「山桜散らん間際のうれしさよ やまとをのこをかくとこそ知れ」

「土52期田中賢一」
古賀 秀正 前掲の「宮城事件」参照
大石猪太郎 20年8月17日、浜名湖畔館山寺の裏山で自決。兵器行政本部に所属し④の研究に没頭していた。④は敵艦船の出ず熱線に誘導されて命中する爆弾である。浜名湖に筏を浮かべその上で石炭を焚き、投下試験を実施している時終戦となった。研究が決戦に間に合わなかった責任を感じ、腹を切り拳銃で前頭部から頭を撃ち抜いて自決していた。

「土55期竹田五郎」
上原重太郎 前掲の宮城事件参照。
鎌田 正邦 前号竹田恒徳殿の終戦秘話参照。

この他五人から投稿があったが紙面の都合で次号に譲る。未提出の期や会は調査して早く提出して欲しい。

堀江 正章 東京上野憲兵隊長だった

終戦秘話三題

元挺進戦車隊長

田中 賢一

〈第一話〉

挺進戦車隊は滑空機搭載の戦車隊で、二式軽戦車搭載のクー7滑空機の実用化を見越して、18年秋に編成されていたが、滑空機は航空機製造の主流外のため、試作は済んでいたが量産に入れ

なかった。私は19年12月二代目の隊長となった。その時挺進集団の滑空機搭乗部隊は比島に移動したが、戦車隊だけ大本営の指示で内地に残された。

沖縄に敗れ本土決戦準備が本格化した時、我が隊は鹿児島県財部に司令部を置く第57軍の指揮下に入れられ、都城郊外に移駐した。

終戦に関する命令は57軍から受けたが、何を混乱したのか、元来の本属で

る航空総軍から電報が入った。それは本州出身の下士官兵のうち、定員の1割を何んとかを持って復員させろ、というものであって、何とかの個所が解けないと通信係将校が持ってきた。私は咄嗟に国内で遊撃戦をやるのだと判断し、三人の中隊長を集め人選させた。

16日のことだったと記憶する。中隊長は渡辺浩仲、木水典夫（両者共54期）

原田良夫（55期）で、弾薬を分配し、九州ならば遊撃拠点を何処にするとか

大変な意気込みだった。

私共が元いた宮崎県の川南には、第1挺進団司令部と挺進第2聯隊がいたので、原田大尉を連絡に出した。原田が帰ってきた報告では、兵器ではなく農具を持って帰せということが解

た。敵が上陸し軍隊は強制労働させられるかもしれない、その時の食糧危期に備え、定員の1割ぐらいの人員を先ず帰郷させようとするものだった。

武装して帰したのは問題だ、司令部の軍偵を都城に差向けるから小月まで飛んで、関門海峡で止めろという。その前の晩私は都城の駅で、小銃や拳銃と多量の弾薬を持った帰郷者を激励して帰したばかりだ、今さら止められるかと動かなかった。しかし帰郷者に迷惑をかけてはならないと、同じ町村や

郡出身の隊員を名簿で拾い出し、帰郷させ命令の訂正を伝えさせた。

それで一件落着くと思っていたら、翌年の春ころ、私は宮崎の米軍CICに捕らえられた。武装して帰した者のリストを出せという。中隊長が人選した

から知らぬという、中隊長の住所氏名を言えという。名簿は持っていたが、その前に米軍が貴方を探していると警察が教えてくれたので、名簿は茶筒に入れて地中に隠しておいた。復員する

とき名簿類は一切焼けて上司から言はれたので、知らぬ存ぜぬの一点張り

で

押通した。一晚泊置かれただけで放免された。通訳に聞くと拳銃を朝鮮人に売り、その朝鮮人が悪事を働き捕らえられたらしい。あとで拳銃を売った隊員のことを検察局から問合せがあったので、私は一部始終を話し、最も優秀な隊員を帰したのだと述べ、この隊員は不起訴となった。往時の中隊長全員故人となつてしまい、思い出を語り合う者はいない。

〈第二話〉

義烈空挺隊の敵の沖縄航空基地に対する特攻作戦は、5月24に行はれたが、4機が途中で不時着し、奥山隊に4名の生存者があった。その中で軍曹以下は原隊である挺進第1聯隊に戻されたが、曹長以上は第一挺進団内の他の部隊に転属となった。私の挺進戦車隊には山田満寿雄中尉（少候23期）が所属

となつてきた。山田中尉は歩兵だが我が隊には歩兵中隊があったので、中隊付として活躍してくれた。

終戦に伴い隊員の大半を復員させた後、若干の将校下士官を残して残務整理を行った。その中に山田中尉もいたが、彼は義烈空挺隊で死んだ部下達（山田小隊の人員は不時着機以外にも

乗っていた）や奥山隊長の事などが頭から離れず、仕事もろくに手につか

なかった。

その頃延岡の南の門川という所に牧山さんという占い師がいて、死んだ人と話が出来るといふ評判だった。そこで私は山田中尉を誘って、牧山さんに行ってみた。注連縄を張ったその家には先客がいて、何れも戦地にいる息子や夫の消息を尋ねる人達だった。

やがて番が回ってきて奥の部屋に招じ入れられた。神棚があり、お燈明の灯った薄暗い部屋で、占い師は老婆

だった。山田中尉が要件を話すと、老婆は神棚に向かい呪文をとなえ始めた。だんだん聲が高ぶり鬼気迫るものがあった。一声発すると、座ったままで一尺

ほど跳び上がり、畳の上に倒れて暫らく気絶したようにみえた。私共は呆気にとられてみると、やおろ起き上がり向き直って、貴方の部下は皆立派に戦

い戦死なさいました、と告げた。山田が「それでは奥山隊長は」の問いに対し、「隊長さんはああ残念なりと一声

申されて消えて行かれました」山田はいたたまれずワッと泣き伏してしま

った。私が「これから日本のお国はどうなるでせうか」と尋ねたが、それには答えてくれなかった。

奥山隊長のああ残念なりとは、隊長機は途中で撃墜されてしまったのか、身を投出して戦ったのに、国が敗れてしまったのをお国のか、帰りの道すがら語り合った。

〈第三話〉

陸軍挺進練習部では18年に宮内に挺進神社と呼ぶ神社を建て、それまでの挺進部隊全戦死者をお祀りした。本部に向かって右側の森林を背景に南向きに建て、本部に勤務している者は毎朝出勤にあたり、先ず右向きして拝礼するのが例となっていた。

19年11月挺進練習部が廃止、挺進集団が編成され、ついで集団司令部が比島に出陣したので、その後には第一挺進司令部が入った。戦争末期には一万に及ぶ戦死者があったが、氏名を挙げて合祀することは不可能で、とにかく全戦死者の御霊が鎮まっているものと心得ていた。

終戦にあたり私は都城郊外の三股村で事務処理を終了し、第六航空軍司令部付となったが、宮崎県川南村にある第一挺進司令部に詰めていた。そこには挺進団長中村大佐のほか部隊長では挺進第二聯隊長大崎中佐、挺進整備隊長伊佐見少佐、それと私がいた。私共は追而ここを去らねばならないが、挺進神社をどうするか、宮崎市にある護国神社に御霊を移し、社屋は取壊すことを考えていた。

折りしもその時宮崎市内で戦災のため校舎を失った師範学校の男子部が、司令部の裏にある空き兵舎を使うことになった。学校の男子部長、氏名は失

念したが、たいそう気骨のある人で、神社は我々がお護りします、生徒の精神教育に活用しますと申し出たので、師範学校がいつまで居住するかも考えずに、お任せしてしまっただけだ。

我々は南方から復員してくる戦友を受け入れる道義的責任があると思いい、10月30日付で復員した後も、降下場を開墾したり、浜で塩炊きをしたりしてこの地に残っていた。翌年の春頃村人が、挺進神社が焼き払われたと教えてくれたので、駆け付けてみると、無残にも完全に焼け落ちていて、中村大佐は既に来ており、泣きながら焼跡から金属類を拾い集めていた。学校の先生の言うのには、アメリカ兵が村役場の吏員を案内に立ててやってきて、学校に神社があるのは怪しからんと言うので、これは中村大佐から預かっていると言ったが、有無を言わせず焼き払ってしまったとのこと。

それから暫くたって、日向日日新聞に師範学校に幽霊が出て寄宿舎の生徒が悩まされていると、大きく出た。寄宿舎の周囲を夜体操衣袴を着た一群が走り回るとか、軍歌が聞こえるとか、挺進神社の御祭神が化けて出るという噂は忽ち広まった。中村大佐は焼け跡から拾い集めた釘などを御祭神と心得て神棚に供えたが、その家は廃材をあ

つめて建てた開拓小屋で、辛うじて雨

露を凌ぐものだった。地元の旧家で村の遺族会長でもある石川富士之助翁という篤学の士が、見るに見兼ねて自宅の仏壇を大改築し、御祭神を祀り懇ろに供養したところ、幽霊騒ぎはいっしか納まった。

この記事は終戦秘話の一つとして起稿したもので、話はここまでで打ち切るが、24年になって村の中央に戦死者を祀る霊堂が出来、我が国が独立を回復した後、霊堂を本殿とし拝殿と鳥居を建て川南護国神社とし、毎年町長が祭主となり例祭が行われていることを付言する。



焼き払われた挺進神社

〈追録〉

川南護国神社では毎年11月23日に例祭が行はれ、私はいつも祭主に続いて一文を奏上しているが、平成10年の奏上文がその間の事情を述べているので、引用してみる。……終戦後米軍に焼き払はれてしまいました。その後昭和24年にこの地に霊堂が建てられ、町内出身の英霊八二四柱と共に合祀され、我々は安堵いたしました。

霊堂は後に護国神社となり、このように町当局により手厚く守護され、祭祀が永久に絶えないことは、御祭神も御心泰く思召し召しておられることと存じております……



条約破りは共産国の常套手段

(その1)

先ず中共からいこう。「日中平和友好条約」の第一条には次のとおり謳っている。

1、両締約国は、主権及び領土保全の相互尊重、相互不可侵、内政に対する相互不干渉、平等及び互恵並びに平和共存の諸原則の基礎の上に、両国間の恒久的な平和友好関係を発展させるものとする。

2、両締約国は、前記の諸原則及び国際連合憲章の原則に基づき、日本国及び中国が、相互の関係において、すべての紛争を平和的手段により解決し及び武力又は武力による威嚇に訴えないことを確認する。

また第三条には、
両締結国は、善隣友好の精神に基づき、かつ、平等及び互恵並びに内政に対する相互不干渉の原則に従い、両国間経済関係及び文化関係の一層の発展並びに両国民の交流の促進のために努力する。となつてゐる。

にも拘らず、日本の首相の靖国神社参拝に対する執拗な抗議、世界の誰が見ても内政干渉である。

また度重なる領海侵犯、しかも潜水

艦まで繰り出して我が領海を侵犯している。放置しておくに益々昂じる。条約など一片の空事に過ぎない。

(その2)

ソ連が日ソ中立条約を一方的に破棄して、我が国に宣戦布告したのは、六十年も前のことになるが、いまだにその傷跡は現存している。

この条約は一九四一（昭和十六）年に締結されたもので、両国は互いに締約国の領土の保全ならびに不可侵を尊重する。又締約国の一方が第三国の軍事行動の対象となる場合には、他方は紛争の全期間中立を守るものとする。となつてゐた。ところが一九四五（昭和二十）年四月五日ソ連のモロトフ外相は佐藤大使を招き、ソ連は来年四月二十五日期限が満了する日ソ中立条約を更新する意志のないことを通告した。

この条約は一年前に更新の意志がないことを通告しなければ、更に五年間延長されることになつてゐた。継続しないことを通告するのは条約違反にはあたらぬ。

ところがまだ有効期限内の八月八日ソ連は日本に対し宣戦を布告した。そして満州、樺太で一斉に侵攻を開始した。これが条約破りの第一である。

次はポツダム宣言であるが、ソ連はまだ参戦していないので、この降伏勧誘宣言には名を連ねていない。しかし参戦と同時にこの宣言に加担した。加担するしないにかかわらず、我が国が受諾したのはポツダム宣言である。それに拠れば、その時から連合国は戦闘行動を停止しなければならない。にも拘らずソ連は侵攻を続け千島を奪い、

いまだに占領し続けている。

さらにも、ポツダム宣言の第九項には「日本軍は武装解除後、それぞれの故郷に戻つて平和で生産的な生活を営む」とあるのに、六十万もの将兵をシベリヤに連行し、六万も死なせたのは何たることぞ。ソ連がロシアに替わろうと所詮は一つ穴の貉、この恨み忘るべけんや。

友好親善に名を借りて卑屈になる勿れ。忘るべからず我が先人の意気。

多々良浜辺の戎夷
そは何蒙古勢
傲慢無礼もの
俱に天を戴かず

約束破りの呉儀副首相

これは条約ではないが同根である。中国の呉儀副首相は、愛知万博の中国ナショナルデー開幕式典出席の為五月十七日来日し、二十四日帰国の予定で、二十三日小泉首相に会談を申し込んであった。ところがその日突然帰国してしまつた。

はじめは急用ができたと言つたが、あとで小泉首相が靖国神社参拝をやめると言わないから、会談をする雰囲気にないと言つてゐる。そもそも国際的慣例では、同格の者が接渉するのが当たり前で、大臣なら大臣同士、局長なら局長同士という具合である。日本には現在副首相はいないから、首相に会談を申し込んだとて、非とすることはない。政治的要件で来日したのではないから、表敬訪問ということにならう、それを直前になつてすっぱかすとは、無礼というか非常識というか世界的に見ても通用する話ではない。

所詮呉儀は猿まわしの猿で、猿使は北京にいることは明瞭である。支那は昔から「礼」を重んずる国だった。それがこのようになったのは、共産主義の唯物史観が根底にあるのだ。条約破りも根底は同じである。心して付き合はねばならぬ。

「大和」の沖繩特攻

この記事は、外山三郎著「図説太平洋開戦史」の一部を抜粋したものである。著者は海兵66期、海軍少佐。原書は図面や写真が多く入っているが、紙面の都合上それを割愛せざるを得なかった。

これに対する日本軍の兵力は現地陸軍第三二軍（約六万七〇〇〇名）、海軍沖繩方面根拠地隊（約九〇〇〇名）、および現地編成部隊（約二万四〇〇〇名）と九州および台湾に展開した陸海軍航空部隊（合計約三二七五機、うち特攻は一二三〇機にのぼったが、性能は劣り、教育未済の搭乗員も多く、質的内容は悲観すべき状態にあった）が主力で、三月二十六日「天一号」作戦（沖繩方面決戦）が発動された。

〔序説〕米軍の沖繩進攻は、三月三十一日の神山島（那覇西方約一〇キロ）に始まり、翌四月一日朝、沖繩本島西岸に大挙上陸した。わが沖繩防衛の牛島兵団が水際配備を撤していたうえに九州方面からの航空攻撃が遅れたこともあって、昼頃には早くも北および中飛行場は占領され、夕刻までに約五万の米軍がほとんど無傷で上陸し、橋頭堡を確立してしまった。

飛行場を占領されたことはすでに作戦の死命を制せられたと同然で、海軍はしきりにその奪回を第三二軍に求めたが、らちがあかず、ついに基地航空の全力をあげ、残存艦艇もこれを特攻隊として沖繩に突撃させることを決定した。

進攻連合軍の兵力はスプルーアンス大将の指揮する米第五艦隊を基幹とする大兵力で、その内訳は戦闘艦艇三一八隻、陸軍約六万、海兵隊約六万、艦上機約一〇〇〇機であった。すでに比島戦を終え（三月三日、マニラ占領）、

ところで、レイテ海戦以後のわが水上部隊はほとんど壊滅に瀕し、昭和二十年（一九四五）三月末、柱島に在泊したのは、わずかに「大和」「矢矧」のほか駆逐艦八隻に過ぎなかったが、連合艦隊司令長官は、五日、これら兵力をもって、海上特攻隊を編成し沖繩突入作戦を命じた。その命令原文はつぎのとおりである。

ついで硫黄島を占領し（三月十七日）、その勢いに乗じて沖繩に攻めたのである。

連合艦隊電令作第六一一号（〇五一五〇〇番電）

一、帝国海軍部隊及六航軍はX日

（六日以降）全力を挙げて沖繩周

辺艦船を攻撃撃滅せんとす。
二、陸軍第八飛行師団は右に協力攻撃を実施す。
第三二軍は七日より総攻撃を開始、敵陸上部隊の掃滅を企図す。
三、海上特攻隊はY日黎明時豊後水道突撃Y日黎明時沖繩西方海面に突入、敵水上艦艇並に輸送船団を攻撃撃滅すべし。
Y日を八日とする。

特攻隊とはいえ、日本海軍最後の壮挙がかかる結末に終わったことは惜しまれてならないが、その一半の原因は、特攻命令そのものの不備にあったことを筆者は指摘したい。それは一言を添えていえば、可能性の追求のないただ特攻のための特攻に仕立てたことにある。

「大和」特攻の実施にいたる経緯

当時の関係者の戦後談はいろいろあるが、確実な命令あるいは報告として記録に残されていることよって「大和」特攻の経緯を追ってみよう。

昭和十九年十一月十五日、艦隊の編成がえで、機動艦隊、第三艦隊の廃止、第一戦隊の解散などがあり、「大和」は第二艦隊旗艦となり、一六日ブルネイを出港、二十四日呉に入港した。

一方、第二水雷戦隊はリンガ方面で待機して訓練を行っていたが、二月五日、第五艦隊の改編により、二水戦は第一〇方面艦隊司令長官の作戦指揮下に入った。

その後、二月十日、二水戦はさらに第四航空戦隊司令官の作戦指揮下に入れられ、南方重要物資の緊急内地還送作戦のため北号作戦部隊に編入された。

二月十日、ジョホールバルを出撃、第四航空戦隊とともに二月二十日、呉

一般投稿

に入港した。そこで二水戦は二艦隊の麾下にもどり、旗艦を「霞」から「矢矧」に変更した。

二十年三月一日現在の第二艦隊の海上部隊に対する命令はつぎのとおり。

一、第一遊撃部隊は警戒を厳にし内海西部に在りて待機し特令により出撃準備を完成す。

二、航空作戦有利なる場合第一遊撃部隊は特令により出撃し敵攻略部隊を撃滅す。

三月二十六日、連合艦隊「北号作戦発動」(航空兵力の徹底集中と局地防衛の強化により南西諸島で敵主力の撃滅を期する作戦)に引き続き第一遊撃部隊に対し、連合艦隊電令作第五八三号(二十年三月二十八日)を以てつぎのように命じた。

第一遊撃部隊は二十八日一二〇〇

以降、指揮官所定により速に出撃、主力は豊後水道を一部は下関海峡を通過し、佐世保に前進待機すべし。これはこの行動により、敵機動部隊をわが基地航空機の威力圏内に誘致し、これらに痛撃を与えるにあった。

ところが同日午後五時頃から米艦上機が九州南部および奄美大島に來襲し、米機動隊の九州接近の兆しが認められたので第一遊撃部隊をもって牽制、誘致す必要はなくなり、第一遊撃部隊

の佐世保回航は延期された。

このように当初、連合艦隊では航空作戦が有利に進展した場合、第一遊撃部隊は米攻略部隊の撃滅に使用する予定であった。つぎには南西諸島の制圧を繰り返している米機動部隊にたいし、これをわが基地航空機の攻撃圏内に誘致する企図で佐世保に回航、待機させることに発令した。

しかし、これは米軍の積極的來襲によって不要になった。

ここでさらに三転して沖繩突入作戦が企図されるようになった。これは沖繩の第三軍が飛行場奪回のため四月七日を期して行なう総攻撃に呼応し、連合艦隊は四月六日、航空総攻撃を決定して策応しようとするものであり、序説でのべた第二艦隊に対する出撃命令はそのことを明らかにしている。

これについては、連合艦隊首席参謀 神重徳大佐が一人で立案して軍令部へ持参し、富岡一部長の反対にあって小沢次長の了解を求め、豊田長官の決裁をとってから、鹿屋に出張中の草鹿参謀長の同意を求めるといふ強引な手段で発令されたものという。

草鹿参謀長が第二艦隊司令部に説明に行ったときも、伊藤長官は「無謀無策な作戦」であると納得しなかったが、最後に「一億総特攻のさきがけになっ

てもらいたい」という説明で即時に了承した。

以上のように、「大和」の特攻実施にいたるまでには不明確なものが感じられるとしても、それらは過程の問題であり、歴史事実としての「大和」特攻については、『最後の帝国海軍』に述べた豊田長官の心境で、特攻隊出撃にあたっての連合艦隊司令長官の訓示、とくに「ここに特に海上特攻隊を編成し、壮烈無比の突入作戦を命じたるは

帝国海軍力を此の一戦に結集し、光輝ある帝国海軍海上部隊の伝統を發揚すると共にその栄光を後世に伝えんとするに外ならず」そしてまた「皇国無窮の礎を確立すべし」ということに大きな意味があり、豊田長官が他の何物にも拘束されず、長官自身で決断したものと解すべきであろう。

ただし筆者は、これではただ特攻のための特攻たれと謳い上げたものでしかないことも重ねて指摘しておきたい。

【序説】第一遊撃部隊は、四月五日日出撃準備命令、一時間後に出撃命令が下

命されたことは既述のとおりである。伊藤長官は命令受領と同時に順次信号によって、燃料、魚雷、弾薬などの移載および搭載を令した。第二水雷戦隊では午後八時、旗艦軽巡「矢矧」で作戦打ち合わせを行なった。

第一遊撃隊の大部は、翌四月六日午前六時、徳山港外に仮泊し、不要物件、機密書類などの陸揚げ、艦務実習中の各科少尉候補生、病人などの退艦を行なった。

以後の作戦において第一遊撃部隊が準拠した作戦計画の要点はつぎのとおりである。

一、四月八日黎明時、沖繩西方海面に突入し、敵水上艦艇ならびに輸送船団を攻撃撃滅することを目的とする。

二、軍隊区分(表参照)特命あるま

でこの軍隊区分が使用される。

三、四月六日午後六時、豊後水道を

第一遊撃部隊		区分	指揮官	兵力	主要任務
前路掃海隊	警戒隊				
三一戦隊司令官	二水戦指揮官	二艦隊長官	大和		敵水上艦艇並輸送船団撃滅
三一戦隊(駆三)	二水戦(矢矧、駆八)				
					艦隊の対潜防空警戒

出撃し、同夜間大隅海峡を通過、南西諸島列島線西方を迂回進撃して、八日午前四時、沖繩西方海面に突入する。

六日午後三時二十分、徳山沖を出撃した第一遊撃部隊は、第二水雷戦隊の対「大和」襲撃運動などの訓練を実施して土気の高揚を図り、七日午前六時頃、大隅海峡を通過、針路を二八〇度とした。この時点において、同部隊では「敵の本格的空襲の算は大ではない」と判断した。

しかし同隊は、すでに前日午後四時四十五分頃、敵B-29に発見され、ついで都井岬沖で米潜水艦に接触され、さらに七日午前八時四十分、米艦上戦闘機によって捕捉された。

直衛にあたってはわが戦闘機が午前十時頃に去ると入れ代わりに米飛行艇(PBM)二機が「大和」の二三〇度四五キロにあって接触を開始した。十時十七分「大和」は主砲射撃でこれ

を追い払おうとしたが、米機は射程外に出て接触を持続した。十一時七分、「大和」のリーダーは一八〇度方向に敵の大編隊を探知した。ついで「大和」は十二時三十二分、方位二三〇度五〇キロに艦爆、戦闘機、艦攻など約一五〇機を発見し、十二時三十四分、対空戦闘を開始した。敵の第一波攻撃は十

二時四十分から午後一時まで続いたが、これによる「大和」の被害は魚雷一本命中、被弾二発で戦闘航海に支障はなかった。

しかし「浜風」は、魚雷の命中によって船体が切断されて沈没した(午後十二時四十七分)ほか、「冬月」にロケット弾二発命中(不発)、「涼月」は被弾により火災、「矢矧」は魚雷と爆弾で航行不能に陥るといふ損害を生じた。

敵の第二波は約五〇機、午後一時二十五分から二時二十分まで、「大和」を主目標に攻撃してきた。

午後一時三十七分、左舷中部に三本の魚雷が命中したのをはじめとして、午後二時十二分、後部に二本命中したのを最後に累計九本の魚雷が命中、午後二時二十分、左へ二〇度傾斜、午後二時二十三分、ついに沈没した。

第二艦隊司令長官伊藤整一中将、艦長有賀幸作大佐以下乗員二四九八名は艦と運命を共にした。

また「矢矧」は累計七本の魚雷と爆弾三発を受けて午後二時五分、沈没した。

「大和」「矢矧」の被害に伴い、第四一駆逐隊司令吉田正義大佐が当面の指揮をとったが、同司令はこれでは目的地に達することは不可能と判断し、当面の生存者を救助したうえで、再起を

図りたいとの電報を連合艦隊司令長官、海軍大臣、軍令部総長あて発信した。

午後四時三十九分、連合艦隊司令長官は、電令作第六一六号をもって突入作戦の中止を命じた。かくして、三七二一名がその生命を絶って沖繩突入作戦は幕を下ろしたのであった。

〔考察〕

「大和」特攻の意義を考えるこの作戦は、突入の目的を達成できなかったばかりか、多数の犠牲者を出し、惨憺たる敗北に終わった。しかも彼らの死が一億特攻のさきがけとしての感激を呼んだかといえ、必ずしもそうでなかったように筆者は記憶している。

それは本来海戦は人目のつかないところで行なわれるので、よほどの素晴らしい戦果を挙げないかぎり、国民の反響を呼ぶものでない。しかもすでに沖繩本島に敵が上陸して沖繩県民の安否が気遣われ、また日本内地は日々焦土と化しつつあり、特攻という言葉に国民はなれ切ってしまうのであるから、海上でいかに激戦を交えた後の沈没であっても大した関心を寄せないのはむしろ当然である。

現に海軍内部ですら大した反響は呼ばなかったことは、当の第二水雷戦隊司令官古村啓蔵少将の回想に、「残存部隊が佐世保帰着後、連合艦隊参謀副長矢野少将(別に一名随行)が来訪し、『矢矧』のリーダーを整備しなかったことを陳謝していた。その他中央からの来訪者もなかったし、作戦に対する事後の研究なども行なわれた記憶はない」と述べていることにみられるところである。

したがって一億特攻のさきがけとしての役目を果たすためにも、少なくとも「大和」だけでも突入に成功し、沖繩県民の眼前で獅子奮迅の戦闘ぶりをくりひろげさせるべきであった。

しからば果たしてその可能性があったであろうか。冒頭にも述べたこと、戦例から導き出される一般論は敵にそれを否定するが、果たして当時はいかにみていたであろう。再び古村第二水雷戦隊司令官の言葉を借りることにする。古村少将は、「出撃時機と到着時機を固定してただ走れば、途中の壊滅は必至である」と断ずる。筆者もまったく同意見である。

このことはすでにマリアナ沖海戦、レイテ海戦が疑う余地を残さず教えている。しかも当時のわが基地航空部隊に全航程を護衛する能力のないことも極めて明らかである。

ところで筆者は沖繩本島に敵の本

格的な上陸が始まった段階で、「大和」を突入させることには同意であり、それは内地で浮き砲台とするよりもはるかに有意義でかつ効果的であると考えられる。しかしそれはその特攻を成功させることが絶対必要条件である。そしてこの条件は周到な準備のもと、天象現象を最大限に活用することによって得られるとみるのである。このことは古村少将の所見にもみられるところである。念のため重ねて引用する。

沖繩海域への進撃も、十分に迂回して天象現象を利用すれば必ずしも不可能なものではない、と当時考えていた。あらかじめこのような計画があるならば、一カ月くらい余裕をもって研究し、戦備を整え、訓練しておき、中央と現地の意志疎通を図る必要があった。

「佐世保回航も突然なら、特攻の指令も突然であり、その間に関連した方策の指示など聞いていない。これでは、作戦が成立するはずもなく……」

これに対し、豊田連合艦隊司令長官は、その著『最後の帝国海軍』において先に引用した一節の後につづいてつぎのように述べてこれを否定する。

「この敗戦の主な原因は、やはり航空兵力の不足と、つぎには今まで度々述べた、基地航空部隊と水上部隊との協同動作が、充分しっくり行かなかつた

点に帰しよう」

しかし、これについては先に指摘したごとく、それまでの海戦の推移によりみて、また日々日本内地が空襲を受けている現実からして、わが航空部隊に「大和」部隊の満足できるほどの護衛能力のないことは分り切っていたはずである。同長官は、さらにつぎのとおり述べている。

「あの計画も、もし天候が悪くて飛行機が十分活動できなかったら、特攻部隊は（中略）大隅海峡を抜けて一昼夜後には、沖繩に突っ込み得たわけだ」

まさにそのとおりである。然らばなぜそのとおり実施しなかったのだろうか、同長官はつぎのように自答する。

「しかし現実には、そんな飛行機の行動を阻害するような天候でもなかったし、また天候が悪くなるまで待てというわけにも行かぬほど戦況は危急で、一日も早くという心持が大勢を支配していたからだ」

しかし筆者は、これは数千の将士を死地に投ずる理由にはならないように思う。

もちろん一日も早くという長官の気持を理解できないわけではないが、それはあくまでも気持であって、絶対的な要求があったわけではない。天皇が水上特攻を示唆されたとの記録も見ら

れるが、当時の小沢軍令部次長は戦後の回想において、その信憑性に疑問を投じている。また沖繩現地の第三二軍に対し「積極攻勢により、北、中飛行場の再確保を要望」した義理立てとして、「大和」特攻を余儀なくされたという見方もないではないが、それらは本質的な連合艦隊司令長官の指揮権に介入すべきものではない。したがって先に掲げた豊田長官の訓示にみられる決意こそが、この特攻作戦に全責任を負うべきものである。

とすれば、同長官はそのかねての持論である「フリート・イン・ビーイング」忌避の念にかられ、もし万一敗戦後までこれらの艦が生き永らえ敵に捕獲される恥を未然に防止したいとの念から、一〇〇パーセント成算のないことを知りながら、あえてこの作戦を認めたとみる以外に考えられない。しかしそれはひたすら意義のある死を念じた将士の望むところでは決してなかったのである。

四月といえば、大陸からあるいは台湾から間断なく低気圧が列島線に沿って北上する時季である。実施の時機を部隊に一任して必成を期して出撃させるだけの心の余裕が連合艦隊司令長官になかったものかと惜しまれてならない。ちなみに天気図にみるごとく四月九

日および十日は、同地域は全面的に低気圧圏内に入り、しかも九日降り出した雨は十一日朝まで降り続き「大和」の特攻に絶好の天候となっている。



昭和16年10月30日、宿毛湾沖で全力公試運転中の「大和」。史上最大の艦砲を持つ戦艦であった。

神風特攻「忠勇隊長山田恭司大尉」の

「レイテ」体当たりを目撃

零戦会 笠井 智一

十分索敵した
が何も発見で
きず、特攻機
は南下をはじ
めた。レイテ

昭和19年10月27日一五三〇頃、フィ
リピン第一「ニコルス」特攻基地、
高床式指揮所の二階、七〇八名の参謀
肩章の高官の前で、特攻命令が下され
た。七〇一空K5忠勇隊長山田大尉
(海69) 以下彗星艦爆四機八名は「ラ
モン湾東方洋上の敵機動艦隊を索敵攻
撃せよ。万一発見できない時はレイテ
湾の艦船を「体当たり攻撃せよ。第一目
標航空母艦、第二目標戦艦、成功を祈
る」掛け!!(この命令で「体当たり攻
撃せよ」との言葉が今も鮮明に残って
いる。

この日の直掩戦果確認隊は、二〇一
空、三〇六飛行隊長菅野直大尉(海70)
以下零戦八機。隊員は夫々無言のまま
機上の人となった。

忠勇隊の編成と戦果は左記の通り。
一番機 隊長山田恭司大尉(海69)
操縦茂木利夫飛曹長(乙6)
戦艦に体当たり黒煙大火災
発生

直掩隊を先頭に離陸し一路ラモン湾
に向う。この時特攻機が三機しかいな
いのに気が付いた。エンジン不調で出
発できなかったのか、残念。途中敵戦
闘機の邀撃をうけることもなく進撃が
続いた。特攻機が緩旋回をはじめた。
スワ!!敵発見か全身が氷のように固く
なったが、海上には何も見えない。数

二番機 竹尾要一飛曹(乙16)
玉森武次二飛曹(丙15)
戦果 巡洋艦に体当たり大火災発
生

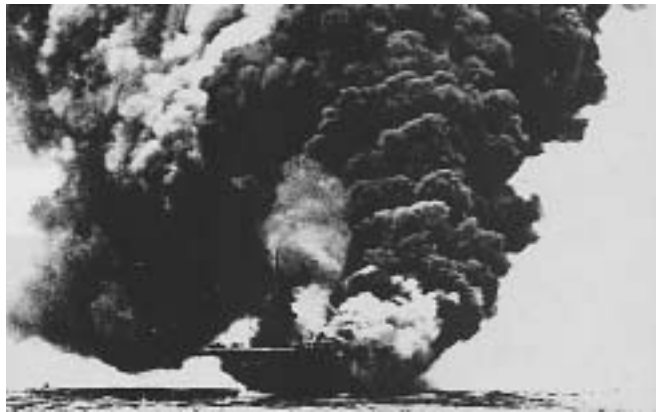
急上昇。「体当たり」のやり直し、再
度の突入で大型艦に「体当たり」同時
に黒煙と大火災発生。死を直前にして
の「体当たり」のやり直しとは!!。指
揮官と操縦員の心技一体。これぞ艦爆
魂か。想像に絶する強靱な精神力何人
も成し得ない行為であろう。二番機三
番機も隊長に勝るとも劣らぬ「体当た
り」、以心伝心。この隊長ありてこの
列機あり。この偉勲は日本人の心とし
て他の特攻と同様に永く後世に語り伝
えなければならぬであろう。

三番機 山下栄太郎二飛曹(丙10)
山野登一飛曹(乙16)
戦果 輸送船に体当たり大破炎上
の。

追記
出撃前指揮所の参謀肩章の高官が誰
であったのか、又特攻命令を下命され
たのは誰であったのか全く知らないが、
この席に大西長官、門司副官も居られ
たであろう。

筆者は八機の直掩戦果確認隊の一員
として出撃したが、薄暮の為と物凄
い対空砲火の弾丸を避けるのに必死と、
一番機を見失わない事に精一杯で充分
な戦果確認ができなかった事を残念に

思っています。又特攻「体当たり」を
目撃して「明日は吾が身」と死に対す
る恐怖心は全くなかった。直掩隊長菅
野大尉以下八機は奇跡的にも全員内地
に帰還、その後の空戦で隊長以下七名
が戦死私一人が生き残った。



「特攻」を知らない世代の人たちへ

二階堂 清風

一、私は震洋特攻隊員だった

戦争を知らない世代の方々に、伝えおきたいことは山ほどあるが、紙面の都合もあり、「特攻」やそれにまつわることに絞って稿を進めてみたい。

今から60年前、我が国は17、8歳から22、3歳の青少年に対し、祖国の急を救うためにはこの方法以外にはないと絶体絶命の「特攻」という名の「必死の任務」が命じられたのである。私もその任務を課せられた一人で、17歳であった。

「特攻」といえば空の特攻を思い起こされる方が多いであろうが、私の時代になると操縦訓練をする練習機も燃料も不足して、航空機以外の様々な特攻兵器の要員に転科させられる破目に陥った。私に与えられたものは、「震洋艇」という敵めしい名の爆装モーターボート、すなわち水上特攻であった。

従って、私は水上特攻の「震洋艇」に関連したことを書くのが最も相応しい立場にある。昨年12月「喜寿」の記

念に『海の墓標』と題し「水上攻撃《震洋艇》の記録」の副題のもとに鳥影社(チョウエイシヤ)から出版したので、我が国が「特別攻撃」を実施するに至るまでの道程から稿を起し、思いつくままにその全般を述べてみた。

まずこの「震洋艇」は、初め南は北ボルネオ(現インドネシア領)やフィリピン、台湾や沖縄の各地に配備されたが、戦争末期になって来ると「基地回天隊」(人間魚雷《回天》)同様、本土水際防衛の迎撃専用となり、私は高知県土佐清水町で待機。その2ヵ月の間に「出撃待機命令」を受けて生と死の間を3度も往復し、4度目は終戦翌日の8月16日。その都度「人生今宵限り」と覚悟させられたものの、何れも「誤報」ということで出撃には至らず、生き残った。そして、今、この命がある。

私は戦争の敗色が濃くなりつつあった昭和19年4月、「10年後の100名より現在の1名が要求されている」と、親の反対を押し切って海軍第14期甲種飛行予科練習生(予科練)を志願し、土浦海軍航空隊に入隊した。時に16歳。そして、1年間の予科練の教育(所謂、航空機の搭乗員となるための基礎訓練)

が終了して、飛行訓練に移ろうという心逸る時期になってきて現実はずべてがないない尽くしでその上、「予科練の教育は当分の間中止」の憂き目に会う。飛ぶ前に翼をものがれてはどうしようもなく、結局は訳の分からぬまま、命ぜられるままに「特攻」への途を歩むことになった。

そして、任務も行く先も告げられず汽車に乗せられ、長旅の末に辿り着いたところは、長崎県の大村湾に面した川棚町の一角、「小串郷」(オグシゴウ)という寒村であった。そこで目にしたものは、航空機とは似ても似つかぬ急造かつ粗末なベニア板製のモーターボートで、名前だけは勇ましい「震洋艇」。今だから言えるが、これで本当に戦えるのか、体当たりが出来るのか、と17歳の幼い頭にも疑問と落胆が交錯した。しかし命令には逆らえない。

だが、こんな粗末なボートでも、大村湾の鏡のような水面上では、時速50キロくらいの速さで快適に走ってくれたが、これに50キロの爆薬を載せ、実戦場の高知県土佐清水沖の太平洋の土用波の上では、掌の上で玉を転がすように弄ばれ、海水を被らないよう、転覆しないよう操縦(操舵)するのが精一杯であった。134馬力(67馬力×2)のエンジンを積んでいるというのに、

速度は20キロ程度。いや、土用波のうねりに負けて出たくても出せない、出ないのである。

川棚での訓練を終って高知県土佐清水町に配置されて終戦までの2ヵ月の「特攻待機」という死の時刻待ちの心境たるや、心は鉛を抱いたように重く、たとえは悪いが恰かも死刑囚が今日か明日かと、その執行されるのを待たされる辛い心境と似ていたように思う。「特攻」と決まったら考え悩む猶予もなく、即出撃した方が遥かに気が楽で、「死」と葛藤することも「生」への執着も少なかったであろう。「特攻」に死の恐怖がなかったと言えば嘘になる。

ところで、17歳の少年兵が、実際に何人特攻戦死したか定かではないが、恐らく何千人という20歳以下の少年兵が、私のように「明日の死」を待たされていたのである。

17歳の特攻兵でよく知られているものに「小犬を抱いた荒木幸雄伍長」がある。彼は第七十二振武隊員として昭和20年5月27日、沖縄で特攻戦死。その写真は、本紙第61号にも掲載されており、経歴も詳しく述べられている。海軍では、17歳の航空特攻戦死の例はなく、水上特攻の「震洋艇」が唯一

であったと思う。すなわち、第十二震洋特別攻撃隊松枝部隊に、大和昭吾一等飛行兵曹がその名を留めている。彼はフィリピン・コレヒドール島において、昭和20年2月16日未明、水上特攻出撃戦死。この松枝部隊は、海軍乙種飛行予科練習生の第20期生で編成されていたので、その50余名のすべてが17〜18歳であつたろう。ほぼ全員が特攻戦死、または戦死している。

17歳といえば現在の高校2年生。赤穂浪士最少年の大石主悦は16歳、会津藩の白虎隊（一八六八年〓慶應4年〓戊辰戦争で会津藩が組織した藩士の子弟の隊の一つ）も、16〜17歳で獅子奮迅の活躍の末、自決しているが、明治以降になってからは、かかる悲惨な戦いやそれに関わつた幼い死はなかった。

いや、明治10年の西南戦争の「抜刀隊」が、これに近いものかも知れないが、すべて成人である。明治以前は、刀をかざし銃を構えて白兵で戦つたので、武士（足軽）の戦いも、後の陸軍の方歳突撃も抜刀隊的な白兵戦で、後述する「決死隊」か、それ以上の身を挺しての戦いであつたであらう。

昭和18年10月21日、約二万五千名の出陣学徒が、雨の明治神宮外苑競技場で分列行進をした時に、この抜刀隊の曲が使われた。当時、大学・高等専門

学校への進学率は5%位で、彼等は社会の指導的立場に立つということ、徴兵予の特典があつたのが、戦局急を告げるに至り特典廃止となつて、全国で約五万名の学徒が兵役に服し、その多くは下級将校として戦地に赴き、一部は特攻隊員として出撃している。

特攻隊員の選抜には志願から指名まで色々と語られているが私の場合はどの様であつたかを述べてみよう。昭和20年3月のある夜、突然総員集合が下令された。所は土浦海軍航空隊である。「只今から特攻要員を募る。しかし、多言無用。どういう任務に就くのか、何に乗るのか、いまは言えない。ただ生還は期し難い。九死に一生もない。よくよく考えて態度を決定せよ」。

これは訓示なのか、状況説明なのか、希望者を募っているのか、よく分からない。そして、よくよく考えろ、と云つておきながら、実際に考えたり、戦友と理性的に話し合う時間は数分もない。その言葉の舌の根も乾かないうちに、追い打ちを掛けるような「希望する者は一歩前に出よ」の威圧的な口調、いや命令。建て前は「募る」と言っているが、その言動や周囲の状況から察するに、実質は全員指名のようなものである。

それでも、誰一人不平や不満を漏らさず黙々と国のために死ぬことの訓練に励み、出撃の日を待っていた。そのあたりの状況や、「出撃待機命令」という死の予告を受けたときの心境などについては、先の『海の墓標』で詳述した。

これは三部構成とし、第一部は「太平洋の白虎隊」とし、大村湾での死ぬための訓練を受けたことや、墳墓の地土佐清水で死と向き合つて暮らした身も心も凍る二カ月間の心の葛藤や出来事。そして四回の出撃待機命令を受けたものの、何れも「誤報」に終わり命拾いをしたことなど。第二部は、その拾つた命を「命着替えて」と表現し、大村湾の川棚震洋艇訓練所跡地に建つ「特攻殉国の碑」の慰霊参拝。土佐清水の特攻基地跡の回想訪問など戦後生き抜いた今日までの人生記録。第三部は「特攻を語る」。かの戦争・特攻を体験した一語り部の思いのたけを記述した。

特攻は志願か命令かと良く言われるが、本来軍の命令は問答無用のに下されるものである。私の場合も形式的には志願である。特攻第一号の関大尉（敷島隊長として昭和19年10月25日、ルソン島東マバラカット飛行場から発進）も、上司から志望の意志を問われ

て、暫時沈思黙考して、志望する旨意志表示をしたと伝えられている。

然し乍ら初期特攻の段階では自ら熱烈に志願した例も見受けられたが、次に事実上命令と変らない雰囲気の下で、志望の形式を取りながら、全員特攻へと突き進んだのが実態であらう。

二、真珠湾の特殊潜航艇から特攻へ

さてひところ、「明治は遠くなりにけり」という言葉が囁かれた時期があつた。日露戦争の日本海海戦から今年100年。一世紀も経過すれば、遠くもなろう。霞んでも来よう。もう当時を知る人、語れる人はいなくなつた。そして、昭和も遠くなりつつあり、特に、今年のはかの大東亜戦争の終結から一つの節目、60年還暦である。「人生僅か50年」の時代を思うと、60年という期間は確かに長くて遠い。

最近、それを象徴するかのような話を耳にした。またインターネットでもした。ある人がある若者に尋ねた。「君たちは真珠湾が何処にあるか知っているかね」と。その答えは「三重県です」。

このことを耳にしたある父親が、我が娘は如何にと同じことを尋ねたら「伊勢やる」の答え。思わず噴き出し

た父親の態度に気付いた娘は「あ、パールハーバーのことか」と慌てて訂正したという。またある人は「近鉄の鳥羽」と答えたともいう。これは笑って済まされることではない。

その真珠湾は、大東亜戦争開戦当日の日米両軍の多数の戦死者が、そのまま眠っている聖地である。そのオアフ島をはじめハワイ諸島が、「憧れのハワイ航路」の歌声と共に、新婚旅行・観光旅行のスポットとして脚光を浴びたのは、終戦から僅か3年後の昭和23年である。

しかし、かの大東亜戦争がここから始まったことを知る人は少なくなった。先の落語・漫才めいたやり取りが、その事実を如実に証明している。ましてや真珠湾が「特攻」発祥の地、といっても通じないであろう。

昭和16年12月8日の真珠湾攻撃は、空からの活躍が華々しく語られる中で、暗黒の水中、即ち、潜水艦から発進した5隻の甲標的(2人乗り用の特殊潜航艇)の、見えざる「特攻」があったことを、今、何人の方がご存じであろうか。その当時は、戦争末期のような「特攻」とはいわなかったけれども、出撃していかれた方々は「決死」を超えて「必死的覚悟」の特別挺進攻撃であったろう。戦死した乗組員は軍神と

崇められた。

特殊潜航艇とは、昭和9年から開発研究が試みられていたもので、大型の潜水艦により発進地点まで運ばれた後、自力推進で目標の敵艦船に近付き、左右両舷側に抱えている魚雷2本を発射して、敵艦を攻撃するものであった。

これと並行してこの特殊潜航艇を搭載する大型潜水艦も建造され、昭和16年の春には発進実験訓練が完了していた。しかし、時の連合艦隊司令長官海軍大将 山本五十六は、攻撃終了後の乗組員の救出収容に目途が付くまでは、この「特殊潜航艇」の実戦参加を許可しなかった。

それは乗組員の「決死的行為」はやむを得ないとしても、大戦末期のような「必死」の攻撃を全く認めていなかった(考えられなかった)からであろう。攻撃後の帰還収容の道が開かれたことによって攻撃は実行されたが、攻撃に参加した5隻(10名)のうち4隻は不幸にして撃沈され、他の1隻は座礁沈没し、帰還収容には至らなかった。

この「特殊潜航艇」は、その後、同17年5月31日〜6月1日にかけて、オーストラリアのシドニー港に3隻、アフリカ沖のマダカスカル島ディエゴ・スワラス港に2隻の計5隻(10名)が攻撃を敢行。まずまずの戦果を収めたが、

この作戦においても1人も生還出来なかったため、山本五十六長官は、以後の攻撃作戦の中止を命じた、と伝えられる。ということは、これらの攻撃が本来「必死の攻撃」ではなかったことを示している。しかしながら、結果的には不幸にして「必死」の「特攻」と同じ運命を辿ったことになる。

戦争に参加すること自体が「決死的覚悟」であつたろうが、それは不幸にして敵弾に当たって死傷する可能性はあるとしても、初めから「必死」を要求されてはいなかったのである。

一方、空中戦や対空砲火で、不幸にして被弾し生還不能と判断した操縦者などが、その道連れの体当たりして自爆するケースは多々あったが、これは「決死」とか「必死」などと論ずる以前の、個人の自発的崇高な行為であり、航空機がなかった時代には考えられなかったことである。

これまで、縷々述べて来た戦術の一端は、いわば「九死に一生」のたとえのように、一縷の「生」の望みがあった戦いであった。しかし「特攻」は「10死零生」で、所謂「必死必殺」の作戦である。いや、もう作戦とか戦術とかいえるものではなく、初めから「死ぬ」ということで「統率の外道」と発案者・実行命令者自らが自嘲して

いた。

何故にこの様な結果に至ったのであろうか。それは日露戦争以降になって、陸海軍では捕虜になることは絶対的な恥であるという考え方が定着し、当然の帰結として「降伏」ということは、日本軍にとっては有り得ないことになっていたのである。

大東亜戦争末期になって、降伏は思考外の我が陸海軍にとっては、唯一残された選択肢は「特攻」であった。

我が国では、かつて戦死する公算が極めて大きい戦闘に、計画的かつ自発的に参加する将兵または部隊を「決死隊」と名付けていた。言葉を変えるなら、「決死隊」は死を覚悟して戦闘任務に参加(遂行)することを前提としていたが、初めから生命を犠牲にすることは要求されていなかったし、強いられることもなかった。要するに「九死に一生」の見込みが立った上での作戦行動であった。言い換えるなら、「決死隊」の背後には必ず「救助」が準備(用意)されていた。

従って「決死隊員」は、任務が終了した後、生還することが前提で、当然、「決死隊員」を収容する手段や、帰還する時間の余裕が計算されていた。言い換えれば、「決死隊員」が無事帰還する手立てやその時間が見込まれない

場合、「決死隊」を編成したり募るよ
うなことはなかった、と歴史が物語っ
ている。

第1章で触れた西南戦争の抜刀隊を
嚆矢とする決死隊は。武士道精神と西
欧列強に追い付き追い越せという国民
の至情に支えられて、日露戦争では海
軍の旅順港閉塞作戦、陸軍では203高地
の反覆肉弾攻撃の様な必死的決死作戦
に結晶したと言えるであろう。

明治37年2月18日、時の連合艦隊司
令長官 海軍大将 東郷平八郎は、第
1次閉塞作戦を発令し、閉塞決死隊員
を募集したところ、志願者は二千余名
を超え、中には血書嘆願書を提出した
者もあったという。この中から、品行
方正・技量が優秀で家族の係累が少な
い、などの選考基準をクリアした77名
が選抜された。

かくして、5隻の貨物船と各閉塞隊
員（決死隊員）を救出収容するための
水雷艇・カッター（ボート）が随伴し
たが、当日は荒天の上、敵の砲撃が凄
まじく目的を達した閉塞船は少なく、
かつ、「決死隊員」の収容もままなら
なかった。

そこで3月18日、第2次閉塞隊員の
募集が行われた。第一回作戦参加の隊
員の大半が再度志願したが、前回の経
験を活かすために士官（指揮官）は第

1回の中から4名（第1回は5名）を
選び、下士官・兵は同じ者を2度も死
の恐怖に曝すのは忍びない、という東
郷司令長官の意向により、新志願者数
千名の中から60名が充てられた。

この時、
轟く砲音（ツツオト）飛び来る弾丸
荒波洗うデッキの上で
闇を貫く中佐の叫び
杉野は何処 杉野は居ずや

と名を馳せた広瀬中佐と杉野兵曹長
が決死の作戦に従事中、敵弾を受けて
戦死。軍神と崇められた。

遺憾ながらこの閉塞作戦は第3次ま
で行われたが、結局は不首尾に終わり、
その上多数の戦死傷者を出す結果となっ
たが、かかる「必死的」な決死作戦が
実行された、ということと、その際、
数千名の志願者があったという驚異的
な日本の歴史的事実を忘れてはならな
い。

これは血気に逸るというより、日本
独特の葉隠武士道の精神の一端。殉国
精神の発露であろう。そして、この
「決死作戦」が火付け役となり、時を
経て「必死必中・必殺」の肉弾戦へと
発展していく端緒となった、と私は洞
察している。

世界中が敗けると思っていた日清・
日露の戦役に勝った我が国は、勝って
兜の緒を締めることを忘れ、大東亜戦
争開戦時の小銃の主力が、38式（明治
38年制式化）であったことが象徴する
様に精神力（肉弾攻撃）重視に偏り過
ぎた、偏頗な軍備力増強の途を歩んで
しまった。

右の様な構造的欠陥を抱えてはいた
が、大東亜戦争に突入して陸海軍将兵
の志気は益々旺盛になり、多くの特攻
的攻撃が行われ、或は新たに出現した
敵大型機を必墜するには、体当り以外
は手は無いとする意見具申が、第一線
パイロットから挙げられもした。

この様なことが積重なって、特攻作
戦発動の気運が醸成されたことは間違
いないことであろう。

その一つを示すと、昭和17年5月8
日、珊瑚海海戦2日目に空母翔鶴を飛
び立った、菅野飛曹長後藤、岸田両一
飛曹長搭乗の索敵機は、敵艦船を発見
してその位置を打電して帰艦の途中、
報告を受けて飛立った味方の69機の攻
撃機と遭遇した。3勇士は自ら誘導
することに勝ることは無いと、燃料切
れすることを承知の上で、敢然と機首
を回らして、攻撃機の編隊を敵艦船上
空に誘導し、自らは海没した。
生還し得ぬことを承知して基地を進

発した特攻隊戦士と全く同じ自己犠牲
の崇高な行為である。然し乍ら一撃、
講和の機を掴むという思惑が外れて、
全軍特攻へと奈落を辿るに至ったこと
は、如何に「降伏」と言う戦択肢が無
かったとは言え、弁明の余地の無い行
為であり、二度と繰返されてはならな
いことである。

三、若い方々へ言い遺すこと

前章で述べたが、日露戦争に勝って
国民は、薄氷を踏む思いで勝ったその
実情を知らされない俛に益々意気軒高、
国内には押せ押せムードが高められて
行った。

昭和12年の初め、ある新聞に作家野
上弥生子が次の様な年頭所感を寄せて
いる。

「たった一つお願いごとをしたい。
今年には豊作でございましょうか。凶作
でございませうか。いいえ、どちら
でもよろしゅうございませう。洪水があっ
ても、大地震があっても、暴風雨があっ
ても……コレラやペストと一緒にやっ
てもよろしゅうございませう。どうか戦
争だけはございませんように……」。

遺憾ながらこの様に平和を願う切実
な気持ちは、勇ましい世の雰囲気の中
では掻き消されてしまい、支那事変か

ら大東亜戦争へと敗戦の途を転がり始めた。

勝って兜の緒を締め忘れ、情報を軽視してその上外交下手と来て、他国の巧妙な外交政略に乗せられて国際的に孤立するに至った。

国内的には、不甲斐ない政党が国民の信を失って軍部の胎頭を許し、軍部も基本的には政治に疎く、而も軍部の充実も精神力依存に偏重し（白兵戦重視）、偏頗な軍備（大艦巨砲主義に固執）充実に遅れを取った。

国家経略の基本を誤まり、且つ軌道修正を行う柔軟な国家組織でなかったことは、敗戦の最大の教訓として噛み締めなければならない。

二度とこの様な誤りを繰り返さない為には、有権者が高い見識に基く一票を行使して、間接的にはあるが積極的に国政に関与して行くことが必要であるのに、最近の投票率は概ね30%台が主になっている。

之を以て国民の意思が示されたと判断し得るのであるか。自利を求めない真の憂国の士が、議員として選ばれていると言い得るのであるか。

而も敗戦の貴重な教訓、情報軽視に基く拙劣な外交、硬直した縦割行政（攻め来る敵を前にして、昭和20年に入って漸く陸海軍が共同するようになって

た）、等々のことが、戦後も体質的に改まったと思えない。民族性の試せる業なのであるか。

若い方々は己が持つ一票をどう考えておられるのか、成る程、我が国は現在日常生活、衣食住、如何に恵まれていることか。海外生活を経験すれば痛感させられることである。

自分一人ぐらゐ棄権しても差し支えはなからう、と考えている人はとんでもない心得違いをしているのだと、声を大にして訴えたい。

今世紀は、もう世界規模での戦争は起こらないと云われているが、これからは、民族、部族、宗教等の問題が絡んで、国際情勢はより混迷の度を深めていくに違いない。我が国として何時までも現在の状態を維持出来ると云う保証は何もない。皆さん胸に手を当てて考えて下さい。

「我が国の軍隊は世々天皇の統率し給うところにぞある」に始まる軍人勅諭には「上官の命令は朕（天皇）の命令と心得よ」とあった。従って、上官の命令は、内容の如何を問わず、すべて天皇の命令、ということになり絶対服従であった。

現在の自衛隊は、「適法の命令に従え」とあるから、法を無視し、旧軍の

ようなゴリ押しするようなことや体罰（暴行や私的制裁）などは絶対ないが、兄弟子を「ムリ偏にゲンコツ」と呼ぶ大相撲の世界では戦前も戦中も戦後もなく、厳しい指導が続いている。言い換えれば、そのくらい厳しい指導・訓練（練習）・環境でなければ強い力士（人間）が育たないのである。ハングリースポーツに共通する原理原則である。

それを嫌ってか日本の国技であるというのに、日本人の力士がさっぱり育たない。平成17年1月場所の番付をみると、幕内力士42名中、外人力士が11名（26%）を数えるまでに至り、その頂点である横綱までが外人に占められて久しい。

元来、人間という動物は怠惰である。楽をしたいという願望（本能）がある。資本主義の国家では、「働き蜂」になって稼いだ分が自分のものになるから、その意欲が湧いてよく働き、出世もしていく。地位が上がればそれにつれて待遇も上がる。「アメとムチ」は車の両輪のようなものである。

従ってある意味においては、相当程度厳しく躰け、鍛えなければ、強い人間、真面目なよい人間は育たない、ともいえよう。要は程度問題である。軍人も同様である。旧軍においては、事

ある毎に怒鳴られ、殴られ、特に海軍ではバッターという野球のバットで尻を叩くような制裁があったし、一時間にも及ぶ体罰（前に支え〓腕立て伏せの腕を伸ばした状態）もあった。

善意に解釈して、「鉄は赤いうちに打て」同様、人間、若いとき殴られ叩かれると反発して強くなる。軍隊（軍人）は強くなってはならない。そのために平素から鍛えておかなければならない。

そういう意味では、旧軍の厳しさ、殺人的な訓練は理解出来るが、私的制裁や理由なき総員罰直（この「罰直」は海軍用語のようで、一般的には「懲罰」の意であろう）や「修正」という名の理由なき体罰は、人道に反してはいたが、そのために人間が強くなるようになっていったのは事実である。また、要領もよくなり、ヘマも犯さなくなる。清く正しく美しい人間を育成するには、ある程度の厳しい教育・訓練は必要である。

先の真珠湾攻撃に際して、機動部隊指揮官 海軍中將 南雲忠一は、「……顧ミレバ諸子多年ノ演練ニ依リ 必勝ノ実力ハ既ニ練成セラレタリ 今ヤ君国ノ大事ニ際会ス 諸子十年兵ヲ養フハ只一日之ヲ用ヒンガ為ナルヲ想起シ以テ此ノ重任ニ応ヘザルベカラズ……」

と訓示している。この訓示を聞いて泣く者がいた、と伝えられるが、確かに血の滲む「月月火水木金金」の10年の訓練より、1日の実戦の方が楽であつたろう。

さて、かつて日本という国の少年が、死と向き合つて戦つた筆舌に尽くせぬ暗い時代があつたことを、是非伝えておきたい。遺しておきたい。その主な対象は高校生であり、私の孫に当たる年代の人々である。当然、私の3人の孫に、それぞれの名前を添えて「お爺ちゃんの遺言だよ」と言つて先の『海の墓標』を手渡した。

更にその思いが昂じて、私が住む神奈川県下の公立高校156校に、「是非、読んで頂きたい」の願いを籠めて、この本を1冊ずつ贈つた。

この種の本は、自腹では読まないであろうが、図書室にでもあつたら読んでくれるかもしれない。そして昭和の時代を回想してくれるかもしれない。

「百聞は一見に如かず」というが、もう「一見」は出来ないものであるから、せめて「一読」してくれて「昭和の戦争歴史」の一端を学び、340万人の犠牲の上に、現在の平和と繁栄があることを認識して欲しいと思う。

「特攻」は戦争、いや人間の極限で

あつた。そして色々な批判もある。当時の世界情勢から推して戦争はやむを得ない点もあつたろうが、「特攻」を

全員特攻に組織化したことは暴戾の最たるものであつた。もう決死隊も必死の特攻隊も要らない世の中が続いて貰いたい。「特攻」という尊い犠牲の上に築かれた平和な社会を維持するため、最小限の自衛組織は必要であらう。しかしこれを戦争の具に用いてはならない。

一方、人類の歴史を辿ると戦争の歴史でもあり、現在でも世界の何処かで、小競り合ひ的な戦争が続いていることは周知の通りであり、そこでは、結果的には「特攻」にも似た「自爆テロ」が続いている。

「特攻」は純然たる戦闘行為であり、その根底には己を育んだ国土、同胞に対する愛があるのに対して、「自爆テロ」は平然として無事の市民を巻添えにする。而もその根底にあるものは、怨・恨であり、両者は全く異質なものであるとして理解されなければならない。

先の大戦のような大規模な争ひは、核兵器を筆頭とする科(化)学兵器が互いに牽制する形となり抑止力になっているが、この地球上から、局地的な小さな戦争がなくなることはないであ

らう。

しかし、過去の幾多の戦争がもたらした「戦争の愚」を、日本が再び「前車の轍」を踏むようなことがあつてはならない。それは「特攻」の悲劇が最大の教訓である。そして、「特攻」は時空を超えて語り継がなければならない。

明治から尾を曳いた昭和という時代は「魔性の歴史」であつた。そして、この文章の一言一句を次世代に伝えたい。これは私の切言でもある。

いま、つくづくに思う。「誰か昭和を想わざる」と……。



天皇皇后両陛下の

サイパン御訪問

両陛下は、六月二十七、八日に戦死者慰霊の為サイパン島に行幸啓された。そして、日本政府が建てた「中部太平洋戦没者の碑」に供花、御拝礼なされ、バンザイ・クリフで黙祷を捧げられ、更に「第二次大戦慰霊碑」(米兵の慰霊碑)、「マリアナ記念碑」(現地人の慰霊碑)、「おきなわの塔」「韓国平和記念塔」にも御参拝なされた。

サイパンに対する特攻で、既にこの機関紙で何度か紹介したのは、海軍の第一御楯隊の特攻攻撃である。同隊は零戦十二機をもって十九年十一月二十七日硫黄島を発ち、サイパン島アスリート飛行場のB-29銃撃に向かい、全機未帰還となった。

特攻隊に登録されていないが、陸軍の第二、第三、第四独立飛行隊のサイパン攻撃がある。なかでも成果を上げたのは、新海希典少佐を隊長とする第二独立飛行隊である。十九年十一月二日、六日、二十六日と三回に亘り夜間爆撃を行っている。

また飛行第百十戦隊は十二月六日一〇機をもって爆撃を行っている。各隊とも少なからぬ戦死者を出しているがこの人達の御霊も陛下の御親拝に感泣していることであらう。

特攻に散った友

特攻二期 吉原 利徳

昭和36年8月10日、鹿児島県知覧町役場発信の次の案内状を受け取った。

「前略、来る八月十六日(火)午後八時三十分から約一時間NHKからテレビドラマ『遺族』が放映されますが、これがため今月五、六日の両日にわたり、元知覧特攻基地や特攻平和観音堂の撮影がNHKにより行われました。

このドラマは昭和20年5月11日沖繩攻撃のため知覧基地から出撃戦死した第六航空軍第五十五振武特別攻撃隊員鷲尾克巳少尉(兵庫県出身)を主題としたもので、ドラマの終りに、現在の元知覧特攻基地や特攻隊員のご遺徳を顕彰するために昭和33年9月建立しました特攻平和観音堂が演出されるものと思われまますので御覧下さい。

右取急ぎお知らせいたします。

昭和36年8月9日 (原文のまま)

この一遍の案内状の中に、鷲尾克巳という忘れることのできない人名が記載されているではないか。彼は第一高等学校に在学中、学徒出陣で特別操縦見習士官第二期生となり、この知覧の教育隊を卒えた若き学徒ではなかったか。一瞬ハッと、案内状を何回とな

く読み返した。その彼が出撃前夜、三角兵舎のところで私に一片の紙片をくれた。それには、

今更に我が受けて来し数々の

人の情を思い思ふかな

陸軍少尉鷲尾克巳

と書かれていた。今御遺族の方は如何なされているやら。

想えば遠き青春の日々を「陸軍航空」

で、祖国存亡の責任を双肩に、命の極限で毎日を闘った友である。

昭和17年末、開戦一周年を記念した

映画「ハワイ・マレー沖海戦」が上映

された。それは劇映画であったが、海軍航空部隊の訓練のすさまじさが私の

度胆を抜いた。飛行機搭乗員は勇敢であり、特別な世界の人間に見えた。

昭和18年中頃、「この戦争は航空戦

によって決せられる。海軍は大学高等専門学校出身並びに在学者に対し大きな期待をかけている——」旨の報道部

長平出海軍大佐の談話が新聞に掲載された。何度も読み返しているうちに血肉のわく思いがし、私は飛行機に乗って戦争に参加する事が日本を救う道だ

と思うようになった。私は私の犠牲によって、「東洋平和」「民族の救済」に

寄与する覚悟でいた。間もなく、在学

していた専門学校を中退し、陸軍特別

操縦見習士官の採用試験を受け、二期生として教育隊を卒業し、本土防空戦隊付を命ぜられたのは、昭和20年3月であった。

私の戦隊は、昭和20年4月2日、米

軍の沖繩攻撃に備えて、特攻五隊と共に

第一攻撃集団に属し、制空隊として

芦屋基地から鹿児島県知覧基地に威風堂々と前進した。

前進当日は訓練第一、特攻機直掩が

第二の主任務であった。その後直掩隊

として同基地に滞在し、一部は徳之島

基地に前進したが、空襲で破壊され直

掩どころではなかったと聞く。

昭和20年3月29日、明野飛行学校で

は特攻二隊が編成された。その一隊は、

第五十一振武特別攻撃隊と呼称され、

他の一隊は、第六十五振武特別攻撃隊

であった。第五十一振武隊は一式戦の特攻隊で、隊長は陸士五十七期荒木春

雄少尉、第六十五振武隊は九七戦装備

の特攻隊で隊長は同じく五十七期の桂

正少尉であった。

杉木立の陰であった。荒木隊は、下士官機が先着し、隊長以下の将校は一日遅れで知覧に到着した。

荒木少尉、桂少尉は共に部下思いの

人で、一緒に出撃する隊員に深い愛情

を持っていて人であった。長身の荒木

と、背の低い小柄な桂の両特攻隊長は大変に親しげであった。荒木少尉は私

に、「悠久隊(第五十一振武隊の愛称)

は、みなそろって靖国神社に行くんだ。渡辺(私の旧姓)貴様も来いよ、俺が

先に行って座席を取っているからな」

と真面目な顔をして云った。私は、

「先任が行かれても座席の心配はいり

ませんよ。桜の小枝にとまります」と

本気とも、冗談ともつかぬ返事をした。

また、美人が写っている写真を一枚

見せてくれた。彼はそれを飛行服のポケットに丁寧に納めながら、「我々は

軍人を志してきたが、特操は本来それぞれが好きな学問を志す者であり、将

来、日本の政治、経済、外交を背負って行かなければならない身で、戦場に行くのでは日本はもう終りだ」と私語

してくれた。

まら、「大分県出身の飛行兵安藤伍

荒木隊、桂隊等が出撃したのは、昭和20年5月11日午後6時半であった。出撃の時は雲が低く小雨模様であったが、陸空は、まず直掩機、続いて特攻機の順序で一機また、一機と離陸し、列島線西側を共に進撃した。美しい開聞岳に名残りを惜しみつつ海上に出る。なつかしい日本もこれで見納めかと、何度も尾翼を通して振り返り、しだいに小さくなってゆく若葉の山々を見つめた。特攻隊員の心情は如何であったろうか。屋久島上空を過ぎれば、いつ敵機が現れるかわからない。

索敵、奄美西方上空を過ると、雲が若干高くなったので、特攻機、直掩機共機首を上げた。その後、グラマンF6Fが雲の中から現われた。敵機は少数で約三〇機ぐらい。私は無茶苦茶に機首を上げ、目の前の敵機めがけて我武者羅に胴砲、翼砲を撃ち込む。敵機は器用に反転する。レバーを全開して負けずに突っ込む。翼が折れんばかりの全速をかけて星のマークを追撃、旋回指示器のボールを横目に、操縦桿レバーのボタンを押した。赤い火をふく私の機銃は当らない。機の修正が大き過ぎた。敵機は機首を上げた。私も追いつく。次の瞬間後上方から別のグラマンが私を撃ちまくっているのに気がついた。私は失速反転で錐揉みを

とった。海面は大きく回る。手足は正確に作動している。海面までもう少しのところで桿を引き起し、錐揉み状態から脱して急上昇する。照準機一杯にグラマンが広がってくる。反射的に桿のボタンを押すと十三ミリは火をふいたが二〇ミリは「ダン」と一発で故障した。——上空四千米、特攻機の影は遠くに在った。私は四囲を見ながら他の味方機と編隊を追った。海面を見下ろせば、先程の空戦で十数条の煙が海面より上っているが、彼我何れの機なのか不明。特攻機にも大分被害があったようである。

誘導地点上空に達するや、各特攻機は翼を振り、風防を開いて手を振って、我々直掩機に引き返すように合図をしている。我々がこれに答えると、手やマフラーを振り、拳手の礼をして一路沖繩の敵艦船を求めて突撃していった。再び還ることのないこれらの特攻機の一機一機に私は、目的達成を祈り、永遠の別離を惜しみつつ拳手の答礼をし、強烈な印象に哭いた。

わが方の突入は思わしくなかった。第六航空軍は、第一次航空総攻撃開始以来、沖繩周辺の敵艦船に対する攻撃はあらゆる方策を出して継続していたが、すでに飛行機も整備員も疲れ果て、器材の不足が目立っていた。特攻隊員も腕を磨く機会がなく、そして特攻出撃のできない隊員も逐次表面化していった。一方、沖繩地上軍の戦勢は5月31日に、米軍が那覇、首里に突入して大勢は決し、6月22日、第六航空の第十一次航空総攻撃は、遺憾ながら中止の悲運に見舞われた。翌23日朝、牛島満第三十三軍司令官は長勇参謀長と共に摩文仁の岡で従容として自決されたという。その間戦隊の中堅操縦者は基地防空戦と直掩に散った。戦隊の戦力の消耗ははなはだしく、操縦者、器材の補充を開始し、五月末、戦力回復のため芦屋基地に帰り、倉幡地区の防空任務を附与された。

第五十一振武隊長の荒木春雄が出撃の前日、5月10日に見せてくれた恋人の写真は、実は新妻であった。戦後知覧の富屋旅館で彼女に会うことができた。その時、彼女は、少尉が出撃された後に出産されて間もなく亡くなったお子さんの位牌を、少尉が最後の寝をとられた三角兵舎跡の茶晶に持参し、そこに埋め合掌されたのを私は悲しい涙でみた。それは故人の三十三回忌に当たる年の5月3日、少尉が出撃された日の天候と同じく、小雨模様の夕刻であった。

第五十六振武隊員上原良司少尉(特操二期)は、当時、長野県出身と聞いていた。彼は出撃の前日愛機の翼の下で、「俺の家は兄二人が南方で戦死し、俺も明日は死ぬが、貴様は生き残った俺の後を頼むぞ」と話していた。その彼も、「生を享けてより二十数年間何不自由なく育てられた私は幸福でした。——さらば永遠に。良司」の遺書を残して、二十二歳の青春を祖国の平和のために捧げた。

戦後、妹さんが知覧特攻平和観音堂に参拝され、初めて兄の最後の地を踏んで感激し、新たな悲しみの中にも安心されていた。また、同じ隊の、京谷英治少尉(特操二期)は実に礼儀正しい人で、出撃前まで整備の方々に最敬礼をして愛機の整備を感謝していた。これら特攻に散った友の一人一人を想う時すでに彼らは、「生もなく死もなくすでに我もなし 泣かざらめやもますらをの道」の心境。祖国日本の平和を信じて、莞爾として雲流るる遙か沖繩湾頭に征きて還らざる壮途につかれた。私が昨日、今日の如くにして忘れることのできない思い出の中にこの

ようにして残っている印象である、これは筆舌で伝えることも再現することできない。

戦後旧知覧飛行場跡の特攻平和観音堂で慰霊祭が毎年举行される度に出席して、多くの御遺族の方々に接することができた。三十数年を経た今日また我が子や、兄弟の最後の地を知らずにおられる方々が多い。一片の公報に

「南西諸島方面」と記されておること信じて。そのような御遺族の方々から、亡き特攻隊員の氏名、出撃日、部隊名簿をお聞きし、その出撃振りを知っている限りお伝えした。肉親の最後の様子が判って喜んでおられる。

想うに、特別操縦見習士官出身者は、大東亜戦争末期に戦争が必然的に産み出した青年士官であって、学究半ばで軍隊に入った者も、普通の兵隊ではなく、部下に命令し、部下の命を預かる指揮者いなど下級将校として責任者の立場に立たされた。戦闘を命ずる加害者?でもあった。自分に課せられた使命を無理に信じて、その生きがい、いな、死にがいを見出そうとした。それは、「祖国日本の危急を守る者は自分達青年しかいない。日本の運命は自分達のためにかかっている。愛する祖国の人々のために自分達は死んでいくのだ」。そう自分に言い聞かせ、常に死の恐怖

と闘いつつ自分を優れた軍人に、勇敢な戦士に育てていこうとした。

今でも臉を閉じると戦友の在りし日の元氣な姿が浮かぶ。特攻隊員の多くが、「後に続く」を信じて尊い身命を日本の平和、そして故郷に残した家族の平穩を祈りながら、愛機諸共散華していった。将に、鬼神も哭く壮烈無比な最後である。

昨今、我が国においては靖国神社法案成立反対はもろろん、これらの英霊に対する感謝の念が薄く、戦没者の顕彰、慰霊に対し一部不毛な抗争の動きのあることは残念でならない。日本の平和と存立を願いつつ尊い命を捧げた人達のあの頃の心は、今どこにいったしまったのであろうか。

生き残り
た我々は、
日本のため
に、英霊の
御心をもつ
ともつと大
切にしなけ
ればその責
任は遂げら
れないでは
なかるうか。



出撃前の特攻隊員

万物流転と不変のもの

田中 賢一

国史学の泰斗平泉澄先生に「万物流転」の書があった。私は若い頃心酔して読み戦地にも携行したが今は無い。

鴨長命の方丈記の書出しは

ゆく川の流れば絶えずして、しかもとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世のなかにある人と住家とまたかくのごとし。

玉敷の都の中に、棟を並べ甍を争へるたかき卑しき人のすまひは、代々を経てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年焼けて今年は造りあるは大家亡びて小家となる。住む人もこれにおなじ。所もかはらず人もおほかれど、いにしへ見し人は二三十人が中にわづかに一人二人なり。朝に死に夕に生るるならひただ水の泡にぞ似たりける。

正に万物流転を言い得て妙である。平家物語にも謳っている。

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらわす。おごれる

人も久からず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者もつひにはほろびぬ。ひとへに風の前の塵におなじ。

諸行無常とは仏教思想で万物流転と相通するものがある。もう一つ中国の古典詩を繙いてみれば

白頭を悲しむ翁に代わりての一節
洛陽の女兒顔を惜しむ
行々落花に逢って長嘆息す
今年花落ちて顔色改まり

明年花開いて復た誰か
已見る松柏の摧かれて薪と為るを
更に聞く桑田の変じて海と為るを
古人洛城の東に復る無く
今人還た落花の風に対す

年年歳歳花相似たり
歳歳年年人同じからず
言を寄す全盛の紅顔子
心に憐れれむべし半死の白頭翁
これ亦万物流転は和漢を問はない。
しかし、森羅万象悉く万物流転であろうか。平泉先生の戦後出された書物に「父祖の足跡」と題する六巻の本があり、その第二巻のはしがきに次の一文がある。

「おほよそ山は国界に属せりといへども、山を愛する人に属するなり。聖賢山に住む時、山之に属するが故に、樹木鬱茂なり、禽獸靈秀なり、これ聖賢の徳をこうふらしむるゆえ

撃墜した相手の遺族との ポストンでの会見記

岩下 邦雄

戦闘機搭乗員にとって初陣ほど緊張する場面はない。なぜなら多くの搭乗員が初陣で敢え無く命を落としているからであらう、私も初陣での戦闘の事は生涯忘れ得ぬものである。

昭和18年11月に大型機攻撃の為に採用された新鋭戦闘機雷電隊として横須賀基地で編成発足した第三〇一航空隊は、ラバウル進出直前の19年6月15日米軍がサイパン島攻略を開始した為、急遽雷電を空戦用の零戦に乗り換えて硫黄島に移動した。

此処を基地にして米機動部隊を攻撃して、サイパン守備隊を側面援護する任務であった。闘いは極めて激しくて、来襲した艦載機群と延べ七回の空戦を行い、僅か一ヶ月足らずで吾が搭乗員の八割を失ったが、敵機も約二十機を撃墜した。

私はこの三〇一航空隊の飛行隊分隊長として7月4日の夜明け前、暗闇のなか敵機の銃撃を受けながら離陸発進し、グラマンF6Fと交戦した。その時味方基地を攻撃している四機の米戦闘機を発見したので、急降下してその

四番機を射撃した。

零戦の二十ミリ機銃の威力は強力で、敵機の翼がバラバラとふっ飛び、白いマフラーで飛行眼鏡をかけた若いパイロットが驚いて私を振り向くのが見え、まともに海中に墜落した。

挿鉢山近くの海面であった。これを見た敵の三機は猛然と反撃して来て、私は風房を撃貫かれ、左翼に多数被弾したが、運良く発火を免れて無事帰還した。

これが私の初陣で、敵に向けて射撃したのもこれが初めてであったが、至近距離での攻撃であったから、敵パイロットの怯えたような表情がはっきり見えた。

私はその夜、隊員が寝静まったのを見計らって、一人で敵機が突入した海面近くの海岸に赴き、撃ち落した米パイロットの為黙祷を捧げた。

その後ヒリッピン、台湾、沖縄、内地上空と各地を転戦し、九死に一生を得て生き残ったが、私はこの硫黄島で最初に撃墜した米パイロットの顔が胸に焼き付いて、忘れる事がなかった。他言はしなかったが、いつか機会があったら彼の墓参りをして、冥福を祈りたいと思ひ続けてきた。

戦後五十五年も経った或る日、日本

なり、しるべし山は賢をこのむ実あり」とは、道元禪師の語であるが、今その山を歴史に置き換へれば、以て世の唯物偏向を戒めるに足るであろう。

歴史は、歴史を敬愛する人に属しその門を開き、その手を執る。之に反して、無視し軽視する者に対しては、当然その面を蓋ひ、その袂を分つ。先人の情感、意志、努力を尊敬し、その教訓を信愛し、その志業を継承せんとする者に対して、歴史は無限の喜と力を与える。

右の一文、山を歴史に置き換えて述べておられるが、山でも歴史でもよい。そこには万物流転の流転など微塵もない。山と山を愛する人、歴史と歴史を愛する人の間に流転などあり得ない。そこで私は歴史を愛国心と置き換えて思いめぐらしてみる。「戦友」という歌の中にある——お国の為だかまわずに おくれてくれなと目に涙——とあるあの心根、あの精神だけは真理であり不変である。その精神を喪失した現在の日本人、これこそ流転の最たるものである。

さて私どもが無寐忘れることが出来ないのは、特攻戦没者のことである。

その史実と精神は、勿論流転するものではないが、それを学ぼうとしない者や、国家民族を守る気の無い者には、史実は門を閉ざしてしまふ。

我々は特攻隊員の抱いていた大精神を、世に宣揚しようと思うが甚だ微力である。靖国神社や特攻観音で慰霊祭をやっても、参列した者だけがよいことをしたと、自己満足していたのでは特攻の史実と精神は流転してしまふ。

特攻の事だけではない。この会報には前半に終戦六十周年に因む記事数点を掲載しておいたが、国体護持の為、皇基無窮を念じ、命を捨てた人達がいたが、特攻隊員と何ら異なることはない。これこそ万古不易の精神である。今の政治家がよく政治生命をかけて、という言葉を口にするが、何としらじらしい言分か。本当に命をかけた人が身近かな歴史に大勢いたのだ。

この精神を民族の糧とするには、一にかかって教育にある。憲法と教育基本法の改正は焦眉の急なるに、政治の怠慢何と甚だしいことか。小泉首相は何だかの話の時に、米百俵の故事を持ち出したが、実行を伴わなければ画餅である。

平泉先生在世ならば何と言われるであらうか。

海軍を愛好する若者の会合で、戦争体験を話してくれと要請された時、ついでに私のこの願望を披露したところ、これがインターネットを通じて忽ち各地に伝わり、多くの知らない人がパイロット探しに参加する状況になった。フロリダに住んでいるある日本人はワシントンにある米公文書館に数回行って、戦闘詳報を調べてくれたりした。そうこうするうちに、広島のある女性が、米海軍協会の専務理事クリークマン退役大佐と連絡を付けてくれ、其の結果米側の遺族探しが軌道にのる事となった。

平成十五年の夏であった。娘一家がボストンに長く住んでいて、私共夫婦は屢この地を訪問しているが、この年は約三ヶ月滞在した。前述のクリークマン氏はこの機会に遺族と私の面会を実現させるべく、勢力的に捜査を進められ、マサチューセッツに住んでいるある遺族の弟が私の探しているパイロットらしいので、逢って欲しいとの要請が届いた。

連絡のよれば、大体私が撃墜した同じ時刻に硫黄島で方向不明になっていたと知らされた。娘達は万が一の事態を考慮して、遺族に会うのが心配な様子であったが、私の予ての念願でもあり、当のパイロットの遺族であるとは

確認できないが兎に角会って見ようと決断した。実は私も兄を南太平洋海戦で亡くしている。彼は航空母艦瑞鶴乗組みの爆撃搭乗員で、敵空母ホーネットを攻撃中被災して戦死した。自慢の息子を失った母は大変悲しみ、一度でも息子が戦死した南太平洋に行き、戦死した場所で祈りたいとつねづね話していたので、亡き人を悼むのは何れの国でも同じであらうから、その遺族の皆さんに会って、最後の状況を詳しく話して上げようと思ったからである。

私はクリークマン氏に対し、この会見は双方の私的な願望によるものであるから、ラジオやテレビなどで一般に公開される事は厳にお断りしたい。関係者だけで静かに英霊の冥福を祈る場にして貰いたいとお願ひしたところ、快く承知して下さった。かくて会見は6月20日。場所はボストン港にある米海軍基地ミュウジウムで行われる事になり、娘は英霊に捧げる花束を用意してくれた。当方は私共夫婦と娘と婿の四名。婿は英語が堪能なので、私に代わって用意した戦況報告を遺族に対してしてくれる手筈を整えた。指定された時刻に会場に赴き、此処で先方にお会ひした。戦死したパイロットはアルベルトパブロニシ海軍少尉で、当時

二十六才と知らされた。先方は九十二才のニシ少尉の姉と兄の代理テリーさんとニシ家の親族の七名で、兄さんは「自分は高齢でもあり、弟を撃墜したかも知れない相手国の搭乗員に会うのはあまりにショッキングなので、息子を代理に参加させる」との断りがあった。クリークマンさんは本件推進者であるから、立会人として列席された。テリーさんがニシ少尉がグラマン戦闘機の操縦席で微笑んでいる写真を持参されたので、私は花束をお供えした。先ず私とテリーさんが双方の家族を紹介した。その後婿が六十年前の硫黄島空戦についての私の詳細な説明を読み上げた。終わって遺族の質問に私が答えると言う形式で会談が行われたが、予期せぬ穏やかな雰囲気

で終始した。約二時間の会談が終わって、テリーさんが遺族を代表して挨拶された。発言の要旨は、「本日岩下さんに会って、ニシ少尉の闘いの模様について細かく話して頂いて、遺族一同は故人の事が一層身近に感じられるようになった。これは我々にとって大変貴重なプレゼントであり、感謝に耐えない。岩下さんは言わば敵地に乗り込んで、敵対したアメリカ人の戦死の状況を詳細に話したが、これは勇気が要る事であり、

我々は貴方の勇気に対し敬意を表するとともに、貴方を尊敬する。一同心よりお礼を申しあげます」との思いがない挨拶であった。私どもはニシ家の皆さんの素朴で公正な態度に感動した。今回の会見はささやかな出来事ではあったが、日米両国民の理解と親善とに役立てられたと思っている。

特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会

顧問 岩下 邦雄



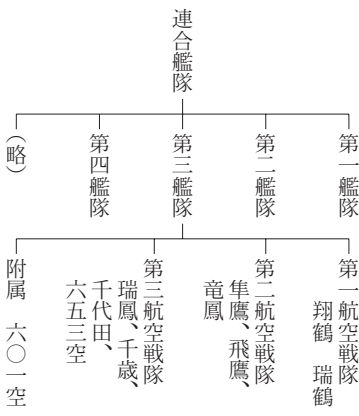
零式艦上戦闘機

第六〇一海軍航空隊攻撃第一飛行隊 戦記抄

六〇一海軍航空隊が特攻作戦に移行し、特攻にまた特攻にと何度も特攻作戦を実施した経過を記述する。小生は航空母艦翔鶴乗組の九九式艦上爆撃機整備の上整曹で先任下士官をしておった。

第六〇一海軍航空隊編成

昭和19年2月15日航空母艦と飛行機隊とは分離することになり、鹿屋海軍航空隊にて、六〇一海軍航空隊（略称六〇一空）として、母艦搭載の航空隊が編成され初代司令田中次郎中佐（海兵54期）が着任し空中総指揮官の配置が与えられた。この時は既に母艦の数も減り次の編成であった。



六〇一空保有機は零戦五二型八十一機、彗星艦上爆撃機一型（水冷）八十一機、天山艦上爆撃機五十四機で編成され、彗星艦隊は訓練の為シンガポール（当時昭南島）に進出したが、空母への着艦訓練が完了してないので岩国基地より空母翔鶴、瑞鶴に機重機で搭載し、シンガポール沖で発艦しセレーター軍港飛行場に着陸した。次いでセンバワン、テ

宮下八郎編

二代司令入佐俊家中佐（海兵52期）着任をされた。降爆訓練で引起しが遅れ地上に激突して戦死者が出た。不足した彗星艦爆の補充に名古屋愛知時計電機に引取りに出張し、鹿屋空一台湾高雄空一海南島一サイゴンを経由して空輸し、五月中旬まで猛訓練を続行した。

松山基地にて再建

再建のために、四国松山基地にて、人員の補充と飛行機の補充整備に、名古屋の愛知時計より彗星艦爆三三型、発動機は三菱金星六二型空冷式に機種が変更になり空輸して猛訓練を実施した。

母艦部隊より基地部隊へ

六〇一空は日本海軍最後の精鋭を集めた艦隊航空隊だったが、すでに乗るべき空母が無く基地航空部隊となり、陸上基地より攻撃することになった。

昭和20年2月12日第三航空艦隊司令

長官寺岡謹平中将より特攻作戦の準備が発令され「六〇一空は速やかに全力香取基地に移動せよ」との発令があり、彗星艦爆は攻撃第一飛行隊を編成して（略称K-1ケイワン）、千葉県香取基地へ移動、六〇一空司令に杉山利一大佐（海兵51期）が着任された。

敵機動艦隊関東地方初空襲

2月16日米機動艦隊の関東地方に初空襲があり、グラマンF6F約六〇機が香取基地を二〇耗で銃爆撃し、直ちに「対空戦闘」「合戦準備」「戦闘機出発」が発令され、零戦五機が次々と発進、隼のように飛び揚って行った。空襲が終わると直ちに索敵攻撃に新式の彗星艦爆六機が出撃した。

第一小隊

一番機（操縦）阿部宏一郎中尉
（偵察）長谷国夫上飛曹戦死

二番機（操）小山倉太一飛曹

（偵）工藤俊彦上飛曹 戦死

両機は午前9時40分基地を発進し犬吠崎から一六〇度の方向に索敵攻撃に向い、午前10時13分「敵機動部隊発見」、航空母艦の在否不明」と打電したまま遂に帰って来なかった。

第二小隊

一番機（操）竹中静夫上飛曹

（偵）早川豊彦上飛曹 戦死

二番機（操）田中武夫一飛曹

（偵）幸松政則上飛曹

両機は午前9時40分発進し犬吠崎から一八〇度の方向に索敵攻撃に向い午前10時20分敵艦上機の大編隊を発見し、そのなかからグラマンF6F六機が攻撃にきたので雲の中に避退してこれを避け雲間から米艦隊が輪型陣をつくり

マリアナ沖海戦

米軍のサイパン攻略部隊の攻撃により「ア号作戦」が発動され、六〇一空は新編成の第一機動艦隊司令長官小沢治三郎中将率いる新鋭空母大鳳（最近就役した大型）空母翔鶴、瑞鶴（二艦はハワイ攻撃以来印度洋セイロン島攻撃に珊瑚海海戦に南太平洋海戦に参戦

その上空を戦闘機がグルグル廻り哨戒しているのを発見した。だがこの時グラマンF6F二機の攻撃を受けたので爆弾を投下して空中戦闘を展開したが一番機は撃墜され未帰還となった。二番機は米艦隊の輪型陣の先端に大型艦船十隻が東へ向って航行しているのを発見し帰還した。

第三小隊

一番機(操) 中川紀夫飛曹長

(偵) 五井武雄上飛曹

二番機(操) 宝塚雄太郎上飛曹

(偵) 安武国雄上飛曹 戦死

両機は午前11時50分発進犬吠崎一九〇度の方向に索敵攻撃に向い、グラマンF6Fの攻撃を受けて二番機は未帰還となった。

硫黄島特攻戦

米国の機動艦隊は16日、17日の二日間関東地方に來襲して主として、飛行場を攻撃して硫黄島に集中し得る日本の飛行機を制圧した。

B29は昭和19年11月以来大編隊をもって大都市の攻撃を実施しているが戦闘機を伴わない行動には相当の被害があり、サイパンまで帰ることは困難となるので東京—サイパン間に中継飛行場を是非とも欲しいところである。はからずも15日の飛行機の偵察報告で敵の

大部隊が硫黄島二百哩を北上していることを報じている。以上を総合して米国は硫黄島を攻略する意図があることが十分察知される。いよいよ敵攻略部隊は硫黄島攻略作戦を実施すると判断したので、特攻作戦に取りかかった。

神風特別攻撃隊第二御楯隊

17日午後第三航空艦隊参謀から特攻隊員を決定して名簿を提出するように言ってきた。この時初めて特攻攻撃を全隊員に発表して志願者を募集した。

18日武田飛行長より搭乗員全員が特攻隊を志願し隊員名簿、即特攻隊員であると報告して来た。

2月19日午前10時寺岡三航艦司令長官が臨場して「神風特別攻撃隊第二御楯隊」と命名された。

2月20日いよいよ特攻攻撃決行の朝である、香取基地の天候は良いが寒風は肌を刺すほどである。整備員は夜を徹しての整備作業であった。

飛行場の指揮所に決別の盃の準備が整い、杉山司令の発声で天皇陛下万歳を三唱し、出撃命令が終ると大沢整備長の合図で整備員が一斉に飛行機を始動した。準備が整って順序よく次々と出発点に向う。内地から初めての特攻隊出撃を見送るために隊員は帽子を振って決死の戦友の出撃を見送った。次々

と出発点に向う、開け放たれた風房から別れの合図をして離陸して行く、特攻機は高度を取りながら飛行場を一周して目的地八丈島に向けて行く、隊員は機影が南の空遠く消えるまで見送ったが、香取—八丈島間の天候不良で、一時間後飛行機が引き返して来た。明くれば21日午前8時に発進、10時までに全機八丈島に着陸した。正午までに爆撃隊と援護戦闘機隊は八丈島を出発、雷撃隊は午後2時出発したが、一切無線電波を出さず一路決死の地硫黄島へ出撃。

第一攻撃部隊

(総指揮官村川大尉直卒)

(-) 爆撃機隊(彗星爆撃機四機)

一番機(操) 村川 弘大尉

(偵) 原田嘉太男飛曹長

二番機(操) 田中武夫一飛曹

(偵) 幸松正則上飛曹

三番機(操) 青木孝允上飛曹

(偵) 木下茂少尉

四番機(操) 小石政雄上飛曹

(偵) 戸倉勝二上飛曹

一六一五硫黄島の東三〇哩附近で敵航空母艦「ビスマルクシー」を発見、これに体当たり攻撃を決行内三機命中し十五分間にて沈没せしめた。

(-) 戦闘機隊(零式戦闘機四機)

一番機(操) 岩下泉蔵中尉指揮官

二番機(操) 志村雄作上飛曹

三番機(操) 長 与走二飛曹

四番機(操) 森川 博一飛曹

爆撃機隊を護衛してこれが突入を確めた後附近の戦闘機を極力撃墜して自爆した。但し岩下中尉は戦果確認の上父島に着陸して報告し、24日〇四一七攻撃再挙のため父島を離陸しようとして海中に突入して重傷を負った。

第二攻撃部隊

(-) 爆撃機隊(彗星爆撃機四機、

指揮官飯島中尉)

一番機(操) 大久保勲一飛曹

(偵) 飯島 晃中尉

三番機(操) 小松 武上飛曹

(偵) 石塚元彦上飛曹

四番機(操) 三宅重男一飛曹

(偵) 伊達正一一飛曹

一番機一六一三「突撃隊形造れ」の発信あり、一六一四「輸送船に体当たりす」一六二一「突撃に成功す」と電報を発信している。

二番機(操) 水畑辰雄二飛曹(偵)

下村千代吉上飛曹は故障のため遅れて八丈島を出発し一七〇〇頃硫黄島の東四〇哩附近にてグラマンF6F四機と交戦し自爆す。

(-) 戦闘機隊(零式戦闘機四機、

指揮官茨木中尉)

一番機(操) 茨木 速中尉

四番機 (操) 岡田金三三飛曹

右二機は爆撃隊(一、三、四番機)を掩護して進撃し之と同一行動により輸送船に体当り攻撃を敢行したものと認む。

二番機 (操) 松重幸人一飛曹

三番機 (操) 林 光男二飛曹

故障の為遅れて八丈島を出発した爆撃機二番機を掩護して進撃中グラマンF6Fと交戦、爆撃機自爆のため、爆弾を装備して再挙を計るうとして父島に着陸の際重松機は大破して父島に残留、林機は父島で爆装して再出発の際海中に突入して戦死した。

第三攻撃部隊

(一)爆撃機隊(彗星爆撃機四機、

指揮官小平少尉)

一番機 (操) 小平義男少尉

(偵) 新谷淳滋上飛曹

二番機 (操) 川崎 直飛長

(偵) 小林善男上飛曹

三番機 (操) 池田芳一一飛曹

(偵) 小山昭夫上飛曹

四番機 (操) 北爪四三三飛曹

(偵) 牧 光広上飛曹

右四機は零戦二機(田辺一飛曹、古市飛長)に掩護されて進撃父島北方にてグラマンF6F十機の攻撃を受けたが小山機と牧機は脱出して硫黄島に向いその後連絡なく体当り攻撃を敢行した

ものと認める。

小平機と小林機はその際被弾故障を生じ父島に着陸し、小平機は大破して父島に残留し、小林機は3月1日一六〇五父島を発進硫黄島に対し体当り攻撃を敢行した。

(二)戦闘機隊(零戦四機、
指揮官柳原少尉)

一番機 (操) 柳原康男少尉

二番機 (操) 田辺信行一飛曹

三番機 (操) 古市勝美飛長

四番機 (操) 古市勝美飛長

八丈島出発の際故障にて遅れ、第二攻撃隊戦闘機隊二、三番機と行動を共にし、一七〇〇硫黄島の九〇度四〇湮でグラマンF6F四機と空戦、父島に着陸の際戦死する。

二番機 (操) 田辺信行一飛曹

三番機 (操) 長先幸太郎一飛曹

四番機 (操) 古市勝美飛長

爆撃機隊を掩護して進撃中、父島北方でグラマンF6F十機と交戦、一機を撃墜し父島に不時着の際大破し父島に残留。

三番機 (操) 長先幸太郎一飛曹

八丈島を出発したが増槽燃料の吸引悪く八丈島に引返して残留した。

第四次攻撃部隊(天山艦上攻撃機四機、各機八〇〇斤爆弾携行、指揮官定森中尉)

一番機 (操) 木須 奨一飛曹

(偵) 定森 肇中尉

二番機 (操) 岡本秀一二飛曹

(電) 原口章雄一飛曹

八丈島着陸の際指揮官機は使用不能となり、四番機の栗之脇上飛曹を無理矢

(偵) 清水邦夫二飛曹

(電) 川原茂一二飛曹

三番機 (操) 中村吉太郎少尉

(偵) 小島三良上飛曹

(電) 叶 之人二飛曹

四番機 (操) 和田時次二飛曹

(偵) 信太広蔵二飛曹

(電) 鈴木辰蔵一飛曹

一四〇〇八丈島出発、一七五〇硫黄島附近に到達夕闇迫って敵戦闘機のいないところをねらって輸送船に体当り攻撃決行した。なお指揮官機は故障で一六五〇父島に不時着しようとして大破し攻撃に参加せず。

第五次攻撃部隊(天山艦攻四機、
指揮官桜庭中尉)

一番機 (操) 村井明夫上飛曹

(偵) 桜庭正雄中尉

二番機 (操) 窪田高市上飛曹

(偵) 中村伊十郎上飛曹

三番機 (操) 岩田俊雄上飛曹

(電) 竹中友男二飛曹

四番機 (操) 栗之脇直上飛曹

(偵) 吉田春夫上飛曹

八丈島着陸の際指揮官機は使用不能となり、四番機の栗之脇上飛曹を無理矢

理残留させ四番機で攻撃に出発した。

一三一五八丈島を三機で出発突撃に成功の電報あり空母「サラトガ」に攻撃決行して大破した模様である。

戦果

第二御楯特別攻撃隊の戦果を総合すると

空母(艦型不詳なるも情況より特空母(算大)一隻轟沈
空母(大型空母)一隻大破炎上撃沈
略確實
戦艦(艦型不詳)二隻轟沈
巡洋艦二隻炎上、二隻撃破
輸送船四隻以上轟沈
船種不詳一隻撃沈

(なお外に硫黄島より火柱十九本を認めたと)

戦果は絶大にして壮烈なる斗魂は全軍の士気を鼓舞したり、即ち硫黄島部隊指揮官市丸少将は機密電にて「友軍航空機の壮烈なる特攻を望見する等に依り士気益々昂揚、必勝を確信敢斗を誓いあり」と、又母島警備隊司令は機密電に於て「当隊員も二十一日一七五五特攻機の戦果の火柱轟音を見聞し士気旺盛敢斗しつあり」と報じあり。

百里原飛行基地にて部隊の再建

硫黄島特攻作戦に全力を投入したの

で部隊は虚脱状態に陥った。各飛行隊共僅かに再建の要員を残すのみであった。特攻隊員の身の廻り品を各家庭に送り届けたり次期作戦準備として飛行機の補充、整備と人員特に搭乗員の充実に近いので敵襲を受け易いので、茨城県百里原飛行基地に移ることになった。

攻撃第一飛行隊長は村川隊長が戦死したので後任として国安昇大尉が着任し百里原基地で猛訓練に従事した。

飛行機の補充整備は整備長大沢涉少佐が九州から北海道まで飛行機で飛び廻って軍需部の倉庫を探して飛行機機材を集めて処理したのと、生産工場から部隊に対する補給状況が漸次好転しつつあったので、各飛行隊の保有機は3月下旬には定数四十八機の約八〇％となり、しかもその九〇％が可動する状況となった。

3月下旬に入ると第三航空艦隊は九州に進出して、沖縄、九州方面に展開して作戦中の第五航空艦隊に協力することに決った。

攻撃第一飛行隊は全隊員も揃って、再建がどうやら緒についたところで、訓練半ばの搭乗員を死地に投ずるのは情においてしのびざるところだが、沖縄はこの戦争中の最後の一戦である。

海軍としては練習航空隊の教官はもち論学生、練習生まで挙げてこの決戦に投ずる悲壮な決意をしたので、第二陣の訓練部隊を百里原に残して大部分参加することになった。

沖繩航空作戦

彗星艦爆整備分隊の我々は石岡駅より軍用列車にて、鹿児島県国分基地に前進した。



零式艦上戦闘機

(つづく)

艦上爆撃機「彗星」



世田谷山観音寺の文化財紹介(3)

五、狛犬

表門を入ると、正面山門の手前に一對の狛犬像がある。向って右が牡、右足で毬を抑え、左が牝で左足で仔犬を抑えている。

国内では数少ない青銅製で、溶接部分がはつきり判る。清国第4代康熙帝の一六九一年に奉納されたもので、牝の背中に奉納者3人の名前が刻まれている。



六、山門

山門(仁王門)は、京都の六角堂に模して作られたその表門として建てていたものを、先代睦賢和尚が新津の資産家中野忠太郎氏から購入移築された際に、門は六角堂から分離して山門に転用されたものである。

向って右側に木造金剛力士(阿形・写真参照)、左側に同じく吽形の立像が納められている。平成10年、世田谷区教委が行った調査によると、12世紀後半頃の制作とほぼ特定されている。尚この力士像は中野氏の手に渡る前は、久原房之助氏の所蔵であったと云う。六角堂については後で取上げるが、本誌59号5頁の鳥瞰写真を参照されたい。山門の左手すぐ奥に建っている。



東京上空B29体当たり…落下傘降下生還

〔飛行244戦隊の帝都防衛と沖繩特攻支援を偲う〕

帝都防衛

陸軍特別操縦見習士官一期生 古波津 里英
現沖繩 翼友会々長 那覇市在住

昭和19年11月特操一期の同期井出少尉と共に明野陸軍飛行学校から飛行第244飛行隊赴任を命ぜられた。これをもって教育飛行隊を終り初めて実戦部隊に配属となり、勇躍校門を後にした。

東京の調布に基地をもつ飛行第244戦隊は3飛行中隊より成り私は第2飛行中隊(隊長竹田五郎大尉II55期)付となり帝都防衛通称近衛飛行隊の一員に加えられた。同月末新進気鋭の小林照彦大尉(53期、まもなく少佐に進級)が戦隊長として赴任され、いきいきとした雰囲気のみなびていた。

その頃南方の比島海域では彼我の攻防戦が激しく我が特攻万衆隊、靖国隊、海軍の神風特攻隊が次々と連合軍の艦船に体当たり攻撃を敢行していた。帝都にはマリアナ基地からB29が頻りに襲撃するようになった。11月中旬に大規模な3回、小規模による空襲が6回を数えた。B29は御前崎あたりから侵入し富士山に至り高度一万メートルで偏西風によって来襲するのが常道だった。これに対し我が3式戦闘隊(飛燕)の能

力は精々7、8千メートルが限度でこれ以上の高度ではとても戦闘など出来るものではない。

この状態は他の機種でもほぼ同様であった。窮余の策として飛行団長は各戦隊に対しB29体当たり専門の特攻隊編成を指令、これは震天制空隊と命名された。

この指令を受け我が244戦隊では四宮徹中尉(56期)が隊長に井上忠彦少尉(幹候九期)中野松美伍長(少飛)板垣政雄伍長(少飛)の4名でもって震天制空隊が編成された。出来るだけ軽くし、上昇能力をアップする為銃器、座席背部の鋼板、燃料タンクの防護ゴム等を取りはずした。

12月3日、B29 10梯団計約70機が来襲した。我が震天制空隊の四宮中尉は果敢な体当たりの後に片翼よく飛行場に帰還、中野伍長はB29に馬乗りになりプロペラでB29をかじって自らは田園に不時着生還、又板垣伍長も体当たり後落下傘降下し、全員生還した。闘魂まことに逞しく後日この3名は再び体当たりを敢行した。震天制空隊以外に

うちに壮烈な戦死を遂げた。彼は大学の理科系の出身で実に生真面目な戦友だった。同じ日に震天制空隊長高山正一少尉(57期で四宮中尉の後任)は体当たり生還した。1月27日高山少尉は再び体当たりを敢行、その大任を果して帝都上空に散華した。同少尉は口数の少ないはにかみやの好青年だった。同じ

日中野、板垣の両伍長は奇蹟の再度体当たり生還、更に小林戦隊長自身率先垂範B29に体当たりをして生還した。この

将にしてこの兵、まるで体当たり旋風となる。この間1月3日竹田五郎大尉の率いる浜松派遣隊は、中京防衛戦でB29 5機撃墜7機撃破我が方損害なしの戦果をあげ、東部軍司令官から名誉の感状を授与された。この頃の244戦隊は関東と中京の防空に大奮闘をした時

である。2月に入ると、敵は硫黄島攻略の支援作戦としてB29の他に小型機による攻撃を開始してきた。時に2月16日は早朝より房総沖の連合軍機動部隊より発進の艦載機1千機余が7回にわたり波状攻撃をかけてきた。これが午後4時まで続き、我が戦隊は数回も燃料弾薬を補給しては飛び上がるという大奮戦となった。戦果もあがったが群舞する敵戦闘機の中に突っ込み乱戦模様となり8名の戦死者を出した。この日の戦闘で私と沖繩一中の同窓、特

操一期の新垣安雄少尉が奮戦後散華した。堂々とした体格で、包容力のある男でほればれするような快男子だった。良い人間が先に逝くような気がする。その後大本営はB29に対する虎の子部隊が敵小型機による損耗を好まずしばらくは邀撃を差控えた。為に我々は脾肉の嘆をかこっていた。

3月2日母校大刀洗陸軍飛行学校の校長だった近藤兼利中将が我々の第10飛行師団長に着任され、親しく激励を受けた。加うるに率先垂範意気盛んな小林戦隊長、信望厚い竹田飛行隊長のもとに隊員一同志気いよいよ挙った。硫黄島(3月17日玉砕)を手中におさめた後、B29は小型機の支援を受けて

高度を下げて来襲するようになった。4月7日早朝、突如ピスト(控所)のスピーカーより「24センチインシュツドゥ、トップウタイタシカラカサハタカゲタハケ」(第2飛行隊は田無上空高度8千メートルで警戒せよの意味)。時を移さず竹田隊長を先頭にあいついで離陸、上昇しつつ飛行場上空で編隊を組んで田無上空に向った。ところが間もなく我が愛機の息切れ異常音に付き、編隊行動は無理だと判断して直に翼を左右に振り隊長に合図して離脱した。愛機をいたわりつつ高度5千メートルで単機飛行場附近を警戒すること

にした。しばらく索敵するうち川崎方面にB29の編隊を発見した。有利な態勢を作るために上昇しながら待機していると、幸いにもこちらへ直進してきた。接敵時約500メートルの高度差はある。B29には前下方か、直上攻撃しかない。後者は高度差が少なくして無理と判断、最も近い2番機に前下方から機銃攻撃をかけ乍らそのまま突っ込んだ。

知覧基地での沖繩特攻支援

右側に巨体をかすめて尾翼に衝突した。気がついた時我が愛機は右主翼を全く失って水平錐技みの状態に入っていた。落下する愛機よりの脱出を考えたが1度失敗、2度目に運よく成功し、落下傘も開いて大空を浮遊した。B29は飛行場の近く国領の畑に墜落していった。落下傘降下をしながら杉並の方向に目を転じたらB29の巨体がゆるやかに水平錐揉みに入っているのが見えた。2

回転半で林の中に接地し同時にバツと大きな火炎があがった。これは実は四六時中寝食を共にした特操同期の河野敬少尉の体当りによるものだった。その日の夕刻松坂伍長の戦死とあわせて悲報が入った。その晩は彼との約束だった「五ツ木の子守唄」を皆で歌って追悼した。先で待っていて呉れ、何れ俺もゆく。

4月15日はB29夜間に来襲、同じ飛行隊の市川忠一中尉は2機撃墜、1機撃破後体当り生還の大敢闘、その功により個人感状を授与された。柔らかな物腰の中に強力な精神力と抜群の技倆をもった士だった。4月末迄に我が24戦隊は体当り1回、総合戦果84機撃墜、94機撃破。しかし3、4と月を重ねる毎に敵機は倍増するばかりだった。

4月1日沖繩本島に上陸した連合軍と我が守備隊の攻防は激烈を極め、九州の第6航空軍、台湾の第8飛行師団及び海軍航空隊より次々と特攻攻撃が敢行されていた。

5月はじめに我が戦隊は3式戦から新鋭の5式戦に機種改変を終え、第6航空軍の隷下に入った。5月17日には薩摩半島の知覧飛行場に転進し、特攻隊の支援をすることになった。

戦隊転進の前、4月29日に四宮徹中尉(56期)は、井上少尉(幹候九期)、角谷少尉(特操一期)等と共に、5月11日には同じく24戦隊で編成された第55振武隊黒木国雄少尉(57期)、森清司少尉(特操一期)、鷲尾克己少尉(特操二期)等が沖繩に出撃散華して

5月17日以降は我が24戦隊が特攻隊直掩の任についた。

5月25日24戦隊編成の振武55隊佐伯修少尉(特操一期)、菊池誠少尉(特操二期)が出撃していった。日の丸の鉢巻きをキリッと締めた特攻隊員と続いて飛び立つ支援の我々が共に飛行場の端に並べられたテーブルを囲んで別れの酒盃を汲み乾して出撃するという日々が続いた。緊迫した壮途、そして1時間以内に間違いなく大義に殉じて若い生涯を終えていった。

その或る日三角兵舎群の中で高村統一郎少尉(特操一期)に再会した。大刀洗陸軍飛行学校限之庄教育隊で寝台を並べ6カ月間を過ごした最も親しい战友である。彼は特攻第112振武隊員として来ていた。6月の陽光明るい日、二人きりで兵舎を離れて畑の畦道を最後の散歩に出た。それから別々だった中国の彼は太原、私は南京の体験談、そしてお互いの生いたちを語りあった。

その日の夕方は一緒に入浴した。出撃を明日に控えている彼がいたわるように丹念に私の背中を流して呉れたとき、胸中を熱いものが流れた。温厚な人柄でハワイの二世ながら早稲田大学を卒え、志願して特別操縦見習士官となつた。翌6月3日は掩護戦隊の一員として彼を徳之島上空で見送ったが、戦友高村統一郎、沖繩海上敵艦に体当たりをして散華した。

6月6日は東京調布飛行場で同じ釜の飯を共にした高島俊三少尉(57期)を長とする第159振武隊、豊島光顕少尉(57期)を長とする第160振武隊が出撃した。その中には特操一期の私とは同期の盟友頼田克己、佐々木鉄雄の両少尉が含まれていた。東京調布では両名共24戦隊の震天制空隊員だった。その或る日河野敬少尉(実は間もなくB29に体当たりをして散華した)と私が呼ばれ「俺達がB29と心中したら貴様等二人が後を継いで震天制空隊に入って呉れ」とのことで、一緒に戦隊長に頼みに行ったことがある。お互いに信頼しきった戦友であった。その他松原少尉、新井少尉等特操二期の組と童顔の少年飛行兵13名、11機の大挙出動であった。

出発点に勢揃いをしてプロペラの轟音の中日の丸の鉢巻きを締めた佐々木、続いて頼田が手招きをするので機上に駆け登ったら固く手を握りしめ「後を頼む」と二人とも同じことを云った。これが最後の言葉だった。緊張の中に微笑みさえ浮かべていた。

往復の燃料が積めず支援の我々は途中で引返さねばならなかった。彼等の目標は私の生れ故郷沖繩の周辺にたむろしている敵の艦船だ。共に行けぬ切ない複雑な心境で帰途についた。敵艦隊は雲霞のように沖繩本島を包囲して坪当たりトン単位の砲弾が打ち込まれている。戦友よ許せ必ず成功を祈る。基

地飛行場へ着陸早々無線傍受室に飛び込んだ。やった！胸中突き上げるものがあって目頭が熱くなっていた。

この頃の知覧基地は連日のように敵小型機が来襲し、時にB24、B25が小型の爆弾を無数に落していった。地理的に沖繩に最も近い所であり、敵小型機は島づたいに超低空で侵入するのでリーダーも捕捉しかね、情報なしでいきなり襲って来るが多かった。敵小型機からのロケット弾は耳を裂く物凄く発射音を出すので空中勤務の我々にとって地上でこの音を聞くのは今にも犬死にさせられるようで甚だ厭な気持であった。

第6航空軍の本部は福岡にあって我々に対する邀撃命令は延々と中継電話（今日の様にダイヤル式直通電話はなく途中幾個所かの局を通じて中継されていた）によって知覧に届くので、戦隊の出勤は殆ど時機を失い犠牲の割に戦果は挙げなかった。業を煮やした戦隊長が、6月3日演習の名目で全戦隊を飛行場周辺上空で待機させていた。案の定敵小型機が超低空で侵入してきた。好機逸せず忽ち7機を撃墜した。中でも生田伸少尉（57期）は自ら撃破した敵小型機が万世の砂浜に不時着し、操縦者が海に向かって逃げよう（海上へ逃げれば敵は潜水艦か飛行艇が救助に

来た）とするのをみて威嚇射撃により再び浜辺に追い上げ捕虜にした。その敵パイロットの求めて生田少尉が対面に腕時計をプレゼントされた。ところでこの戦闘は命令違反とのことで戦隊長は謹慎を云い渡された。その直後戦果が上聞に達し陛下より御嘉賞のお言葉をいただいた、形勢は逆転し、恩賜のお酒に添えて本部から日本酒と肴が届けられ戦隊長の謹慎は沙汰やみとなった。

5月8日、ドイツ降伏後連合軍はその兵力を沖繩の戦場にまわして来た。そのため敵勢は一層増加するばかり。加うるに兵器の質と量に格段の優勢をほこる連合軍は容赦なく大攻撃をかけた。6月13日遂に海軍守備隊は小緑にて玉砕、6月23日最高指揮官の牛島満中将の自決で実質的に沖繩戦は終わった。沖繩玉砕の報に故郷の実家を思い、親しかった人々の最後を想像し深く悲しみに沈んだ。しかし島ぐるみ日本国防の防衛に尽したのだ。悲しんでばかりは居られない。一層全力を尽して国防に殉ずる決心を新たにされた。知覧転進中に我がとっふう隊（第2飛行隊）だけでも兄弟同然に過ぎてきた浅野二郎曹長、山下巍軍曹及び未だ成年にも達しない飛行兵が戦死した。

終戦 八日市飛行場

最後の本土決戦（決号作戦と称した）に備えて7月15日に琵琶湖のほとり八日市の飛行場に転進して待機させられた。警戒警報空襲警報が出て邀撃命令は一向に出る様子がない。阪神、東京、帝都の空が気になる毎日であった。7月25日飛行場周辺で演習中に敵グラマンの編隊が侵入してきた。直ちにこれを迎撃してその過半数12機を撃墜した。このことが再び上聞に達し陛下の御嘉詞をいただいた。この戦いで小原伝中尉（56期）と知覧での変った武勇伝をもつ生田伸少尉（57期）が散華した。その後は師団参謀に詰めきりで監視されて手も足も出さずじまいだった。

このことで飛行場に集まりラジオに耳を傾けていた。雑音で充分に聞きとれないが正しく玉音。陛下のお声で「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び……」信じ難いが終戦のようだ。急遽八日市の本隊へ帰ったがどの顔も皆呆然としていた。大きな目標を失い放心状態になっている。死所を得て散華した戦友が羨しく思われた。天皇陛下の御命令で戦争は終わった。

8月6日に広島に原爆（当初はメガトン級巨大爆弾と云われた）、8月9日長崎に原爆が投下され、同じく9日の早朝ソ連参戦との報が入った。日本が敗けるとは考えたくないが我々の最後が近づいたことは予想された。

敗戦後30有余年、日本は立派に立ち上がった。エコノミック・アニマルと云われ地球上限なくはばたき、経済大国となって世界一平和で幸せな発展を遂げている。英霊のひたむきな護国の闘魂正に後世の今日に生きると云えよう。

わが戦隊は日本空軍最後の特攻隊となるだろうと戦隊長は近い将来を語った。8月8日私は斎藤昌武少尉（特操一期）及び下士官3名と共にロケット弾の講習を受け和歌山県の佐野の飛行場に派遣された。まとまった講義と演習がなされず何となく1週間が経って8月15日となった。重大放送がある

昭和54年5月知覧の特攻観音に参拝させてもらった。滑走路の跡は大きな道路となり、飛行場は一面に緑豊かな畑に変っていた。南の空に特攻諸士を思い、飛行場の端で散った紅顔の兵長、東の方山の頂上で火の玉となった山下軍曹等昨日のように思い出された。特攻遺品館に入り、遺品と遺書、それに出撃前の写真に思い出深い特攻隊員の姿をみて止めどもない自分の涙を味わった。私自身でB29に体当りをしたことがある。然しそれは咄嗟の出来事で衝動とも云える。戦友の高村、佐々木、



三式戦による邀撃 海法秀一画

頼田、佐伯、森、その他の特攻諸士は死の宣告と云える特攻指名のときから出動の日までの長い日時をどのような気持で過しただろうか。最後の出撃時には笑みを浮べて握手を求めた。その姿から清純そのものをみた。今は問う術もないまま蒼い沖繩の海に諸士の御霊は永遠に鎮まっている。B29又は敵艦船への体当り特攻で散った勇士、その一部は陸軍士官学校の出身者で大半は大学、高等専門学校を卒えた特別操縦見習士官の出身及び未だ紅顔の少年飛行兵であった。これらの英霊及び空戦に斃れた戦友、志半ばにして散った総ての御霊に衷心より御冥福を祈る。

(特操一期生史より)

提言

特幹一期生 深井 正昭

平成12年10月元陸軍航空の戦闘機戦隊に所属した先輩の資料を基にして『群馬県陸海軍特攻関係戦没者遺芳録』並びに同戦没者の墓誌、遺書及び遺詠等を収録した付属資料を編著し、ご遺族を始め関係方面に贈呈した。その後

陸海軍の水上、水中特別攻撃隊戦没者の脱落が判明し、また初版における誤記やミスプリントの修正を行って、ご英霊九十七名(陸軍五十一名、海軍四十六名)の遺芳録を再版して、関係者に差し上げ更に四十七各都道府県立図書館等に各二部づつ贈呈した。

甚だ勉強不足であったが、昨年に至って沖繩戦において戦没されたご英霊は沖繩県護国神社に合祀されていることを知り、五十七名の沖繩戦特攻戦没隊員の合祀について照会したところ、陸軍二名、海軍十八名計二十名のご英霊が未合祀であることが判明した。同神社では靖国神社と連絡を取った後、未合祀であることを確認して、同社の規程によって同社春の例大祭前日に追加合祀を行う事にしたと回答があった。着はしたが、「姓」「名」が誤記されたまま合祀されているご英霊もあり、書

面を整えて修正を依頼する。

更に左記、四名のご英霊については、靖国神社のご祭神名簿と相違しているとして大沼少佐は「大尉」、菅井少尉は「上等飛行兵曹」、岩下少佐は「大尉」、小堀大尉は「中尉」とのことであり、公的書類がないと階級の変更は不可能とのことである。

大沼宗五郎 少佐

(昭和二十年四月七日戦死 奄美大島東方海面 戦闘第八一二飛行隊 予学十三期)

菅井 彌十 少尉

(昭和二十年四月十一日戦死 喜界島南方 第五銀河隊 甲飛予科練十期)

岩下 英三 少佐

(昭和二十年四月十二日戦死 南西諸島方面 第三神雷桜花隊 予学十期)

小堀 秀雄 大尉

(昭和二十年五月四日戦死 南西諸島方面 第五神剣隊 予学十三期)

早速ご遺族に連絡を取って見たが、既に戦後六十年を経過しており書類の保存所有は絶望であった。ご遺族の中にはそれほどややこしいのであれば、階級は間違っただままでも結構だとの答も返ってくる。幸い岩下家においては、当時の『任海軍少佐』公文書を保管さ

れていて、コピーが届けられた。

靖国神社と沖繩県護国神社に『任海軍少佐』の文書を送って階級の訂正は完了したが、他の三家については、公的な書面の無い限り、永久に階級は間違っただままの合祀である。

祈念協会においては、理事長の交替により、新会員の加入促進を精力的に実行して大幅な増強となったことは誠に同慶の至りであり、会長はじめ理事長以下、増強運動に携わった関係者に深く敬意を表する次第。

是非その精力を以って、貴協会で行された「特別攻撃隊」に搭載されておられる特攻隊戦没者について、靖国神社に対しご祭神調書の交付を要請し、照合して誤りを訂正して頂きたいと、心から願望し提言申し上げる次第である。

莫大な時間と労力の必要とする地道な作業ではあるが、今実行しなければ永遠にこのまま埋没してしまうではなからうか。と思い一筆申し上げます。

更に沖繩県建立の「平和の礎」についても前記五十七名中、海軍の五名のご英霊が未刻銘であったので群馬県庁担当課に申し入れたことを付記する。

(平成十七年四月三日記)

陸軍海上挺進戦隊育ての親

齊藤義雄さん

皆本 義博

海上挺進戦隊育ての親齊藤義雄氏は、平成17年5月2日、96歳の長寿で逝去された。

齊藤氏は、山口県にて出生、昭和7年陸軍士官学校を卒業（44期）・12月工兵将校として任官、以来終戦まで在勤されたが、広島第5師団工兵聯隊勤務が主で、そのため船舶工兵業務で、上陸作戦・大河の渡河支援等に精通し、また陸軍工兵学校でも同様教育を担当した。

昭和18年9月29日、船舶兵種が創設され、そこで船舶司令部（広島宇品）付となり、19年7月中旬、広島湾内無人の大カクヤ島（弁天島）で、巷と隔絶離駐し、18名の要員将校を束ねて海上挺進攻撃研究班を編成し、挺進攻撃戦法の研究に専念した。

略々その成果が得られ、天皇陛下の天覧をいただく特別攻撃の映画の撮影を終え、香川県小豆島の富士紡績を接収した特別幹部候補生隊に移動し、特幹生を主体とし、隣の豊島の無人の海岸で、海上挺進戦隊第一次要員の訓練を実施した。

その後、出師準備のため広島県江田島の北岸幸の浦に開設された第十教育隊に移り、第二次要員の訓練にあたった。

その間、9月上旬から中旬にかけて、第1戦隊から第10戦隊が動員を完結し、沖繩・比島に向け出発し、齊藤隊長はすべての戦隊の全隊員を激励し見送った。10月松山作二中佐のあとを受け第十教育隊長に就任し、10月上旬から下旬にかけて、比島・台湾・沖繩に向け出発した第11戦隊から第30戦隊の出發を激励した。

齊藤少佐の特攻隊員の教育訓練での精勵振りは、昭和20年1月25日船舶司令官佐伯文郎中将から授与された賞詞に明白である。

その後、引続き本土に展開予定の第31戦隊から第40戦隊の要員の教育訓練に従事した。20年8月6日の広島への原爆投下に際しては、特幹第3期生を率いて急拠救援活動にあたり、被災市民から深謝された。

齊藤隊長によって育成され出陣した戦隊は30個、三二〇名でこの中から戦死一七四三柱（特攻々撃一八八柱、陸上戦斗戦死一二六六柱）に及んでいる。

生来極めて誠実飾り気のない人柄で、栄達を求めず功を他に譲り、部下の勲

功を上げられる典型的な隊長で、多くの者に今日迄慕われている。

朝夕毎日、浄土真宗の門徒である隊長は、正信偈をとなくて戦死者の慰霊を続けていた。多くの人を海上挺進関係でなくしたこと誠に申し訳ないと、いつも語っていた。

葬儀は、本人の遺志に従がい身内のみで実施されたが、大カクマ島研究室で一緒であり唯一の健在者の私には列席すべく申継ぎがあり参列した。葬儀の途中で、広島原爆被爆者で当時現認証明書を隊長から署名してもらった近傍に住む三人の方が聞きつけて来場し、会場の外で焼香して下さった。

私も、49日の法要と併せ偈ぶ会を菩提寺で催した。世田谷特攻観音寺太田賢照住職、原爆被爆の方および特幹若潮会から、遠く広島からもはせ参じ、多くの若潮会員で心のこもった偈ぶ会が行われた。

素晴らしい「軍人」田村繁雄を偈ぶ 海上挺進第三戦隊戦友会

会長 皆本 義博

田村繁雄君は、陸士57期で、卒業と同時に工兵科から船舶兵に転科した。同期で船舶に転科したのは、第一次65名（戦車45・工兵20）第二次15名（歩7・戦車2・野砲1・重砲2・工兵3）計80名で、その殆どが海上挺進戦隊の中隊長要員であった。

田村君は山口県生まれの日本古来の工兵将校を思わせる人で、誠実寡黙、何ごともゆるがせにしない着実で研究熱心な士で、上官、部下の信を集めていた。

彼は、広島県江田島幸の浦の船舶教育隊で海上挺進要員の教育訓練に励み、第44戦隊の中隊長要員に任ぜられていた。広島原爆投下による大災害においては、部下を指揮し救援活動に奔走したが、20年10月、愛する特攻艇を焼却し部隊を解散した。

戦後は広島市に居を構え、業務のかたわら海上挺進戦隊の千六百三十六名の戦死者、また訓練中の殉職者数十名の慰霊業務に生涯を捧げて来た。

昭和42年2月、海上挺進戦隊顕彰碑が江田島幸の浦に建立され、四年ごとに大祭とその中間四年ごと小祭を営んで来たが、そのすべては田村君のご努



力によったものでした。

平成15年10月22日に、第十回でかつ最後の慰霊大祭を行ない、その前日広島のホテルで総会をひらき、全国から57名が参集し、今後のことを如何にするかを議したが、田村君の提案で、現在の会の手持金から江田島町の浄土真宗教法寺に、永代供養料五百萬円を托しお願ひすることとし、またふるさと交流館(◎)の模型等を展示)へも寄進し、残金は幸の浦地区の方々と協議し、慰霊法要をつづけることに決した。

慰霊祭は、町長、区長等の来賓を得、遺族、戦友百五名が参列し厳肅かつ盛大に実施され、遺族・家族・戦友の想いは切なるものがあり、涙の中に終了した。

ただ、お寺さんと門徒の方々が、心配なさんな、町のある限り献花や法要は断やさないとの言葉に、心から感動し、田村君の偉大さをしみじみと感じた。

慰霊業務の最後を整えて、昨年十二月三日大往生した田村君は、まさに素晴らしい軍人であった。



香取航空基地慰霊祭に参列して

理事 廣嶋 文武

平成17年4月17日。千葉県旭市緑地公園は、晴天雲一つなく、日の丸と軍艦旗がひるがえる中、香取航空基地慰霊碑前で、いとも厳肅に神式で執り行われ、参列者一同感慨を一層深く、また新たにしたり式典を終わりました。

当日は旭市長伊藤忠良氏、干潟町長菅谷喜作氏、八日市場市議石毛好郎氏等当地由縁の方々の臨席の下、遺族48名、旧軍関係者25名と多くの参加者で極めて盛大な式典でありました。

旧香取海軍航空隊並びに基地関係戦没者慰霊碑建設については、昭和50年12月、源田実氏を会長に、副会長に紺屋喜代信氏外5名、設立・建設には並々ならぬご苦労があり、昭和51年慰霊碑の除幕式にこぎつけ、毎年かかさず慰霊を継続されていたとのことです。偶々本年が、戦後60年に当り、当時関係者を全国の遺族と具に調査して今日を迎えられたとのことであります。

因に香取航空基地関係ある部隊戦没者は、香取航空隊、六二航戦司令部、おとり部隊、とら部隊、鳩部隊、一三一空、二〇三空、二一〇空、三二二

空、六〇一空、六〇二空、七〇一空、七五二空、一〇二二空、一〇二二空、一〇八一空、K一、K三、K五、K一〇二、K一〇三、K一〇五、K二五二、K二五二、K二五四、K二五六、S三〇四、S三〇八、S三二〇、S四〇三、S八〇四、S八一二、S八五一、S九〇一、T一一、でありました。

又香取基地周辺在住の民間人で銃爆撃による戦没者も合祀され、九九四柱が慰霊碑の中で安置されているとのことです。

式典後参加者の多くはマイクロボスで、曾って長さ千五百m幅百米の滑走路二本、十文字に交差していた現存の一本を巡廻し(現在日清紡自動車タイヤ走行試験場)直会に参加し、旧交を温め、往時を偲び、時間の経つのも忘れての一日でありました。

私事で恐縮ですが、兄廣嶋忠夫は、鹿児島予科練を終え、国分で飛行訓練をすませ、昭和20年2月から香取航空基地から3通のハガキを確認して手元にあります。父には

「萬葉の櫻として咲き香る日を持って一生懸命やります。又部隊が変更されました」と認め同年3月10日頃百里原航空基地に移動し、5月には鹿児島第2国分基地に進出し、再び百里原基地に戻り、8月9日第四御楯隊員として、

金華山沖に愛機彗星とともに散華したのであります。当時満19才10ヶ月の一飛曹でありました。

何はともあれ、靖国神社にお参りし、遊就館で、特攻の勇士の像に頭を垂れ、多くの戦友の寫真にお会いして平和な今日に感謝せずにはいられません。



第30回 香取基地戦没者慰霊祭 平成17年4月17日

特攻の元祖

鳥居強右衛門

三河の国豊川の上流にある長篠城は戦国時代甲州の武田勢と三河の徳川勢との接撃部にあった。この地ははじめ武田に属していたが、信玄の没後徳川が奪い、家康は奥平信昌にこの城を守らせていた。

天正三年勝頼は長篠城の奪回を企図し五月十一日から城攻めにかかった。城は二方が川に囲まれ地形を利用し、堅固に構築されており、信昌はよく戦ったが外部との連絡は全く絶え、援兵が来るのかどうかわからない状況にあった。そこで岡崎の家康のもとに鳥居強右衛門を派遣することになった。

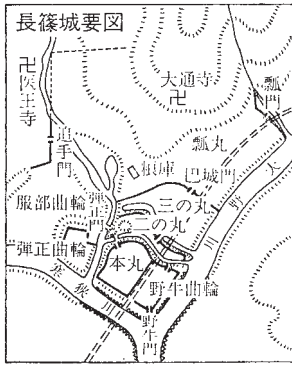
十四日夜陰に乗り強右衛門は川を泳いで渡り、脱出できた合図に雁峰峠で烽火を揚げて城兵を喜ばせた。そして翌日は岡崎にいたり家康に報告し、救援を願い出た。家康は先年三方原で甲州勢に手痛い敗北を喫していたので、織田信長の増援を求めており、折しも信長は岐阜から三千の精兵を率いて岡崎に到着しており、信長にも目通りできた。

信長はすぐ出陣するので同行せよと言ったが、強右衛門は早く吉報を城内

に伝えようと走り帰り約束通り雁峰峠で三度烽火を揚げた。かねてから怪しいと勘付いていた甲州勢に、彼が城門の対岸まで来たとき捕り抑えられてしまった。取調べに対し強右衛門は事

実をありのまま答えると、武田方は強右衛門を利用しようと思いい、夜が明けから柵の所まで行き、救援は来ないので開城した方がよいと告げるよう命じた。

十七日朝武田の兵に伴はれ城門の近くまで行った強右衛門は「徳川織田の軍勢が救援に来るから頑張り」と叫んだ。武田方は当然怒り城の対岸城内から見えるところで磔に処した。当然死ぬとわかっていて公のために行うのを特攻と言う。



憲法改正について

現在中国や韓国から軽侮内政干渉をまねいている最大の原因は、我が国の憲法にある。

現行憲法はGHQの役人が一夜で作ったものであることは、周知のことであるが、その根底には日本の弱体化を促すたくらみがあった。第九条が世界通念から著しく乖離していることは論を俟たないが、そのまえに前文でのべていることは、全くの世迷いごとと言わざるを得ない。

「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決心した」と。

全くの他力本願と言おうか、念仏を称えている間に国が減ぼされる憲法である。

それから数行後には更に次のような驚くべき表現がある。

「われわれは、いづれの国家も、自国のこのみに専念して他国を無視してはならないのであって、云々」これは日本国の憲法であって、他国を規制するものではない。中共政府をして、ますます組し易しと思わせるだけであ

る。中共や韓国内政干渉の根底にはこのとぼけた憲法があるからだ。

北鮮のミサイルが飛んできて、この憲法が防いでくれると、社会党や共産党は本当に思っているのか。

竹島を占領してしまった韓国、日本の領海を侵犯する中国、それを排除することが出来ぬ我が国、憲法は彼らを守るためにあるようなものだ。

この憲法を推し頂いた昭和二十一年は、占領下であって、生殺与奪の権は占領軍が握っていたのだから、政府の当事者を非とはしない。しかし独立を回復した後もこれを奉戴し、四月三日を憲法記念日などとし、宣伝しているようでは始まらぬ。

最近漸く憲法改正が軌道に乗ってきたが、今日まで放置した政治の怠慢甚しと言わざるを得ない。しかし、民主の国である。東京裁判史観に洗脳されてしまった国民の間に、最近まで憲法改正の気運が盛り上がらなかったのも事実である。そう考えると、中国や韓国に馬鹿にされ、内政干渉をまねいた責任は、我々国民にあると言える。一日も早くまともな憲法を制定し、対外的にも国権を維持できるようにしなければならぬ。政府当事者の奮起を望む。

特攻絵葉書の説明

この絵葉書は各種特攻を象徴的に表したもので、手軽に発信し特攻隊を理解する端緒となることを狙って作成したものである。限られた紙面で印象強く訴える為本文は詩歌調とし、僅かに解説を加えたが、基礎知識のない者には十分に理解してもらえないか疑わしい。従ってこの絵葉書を手渡す機会があったならば、最小限次のようなことは話してもらいたい。

《航空特攻》

航空特攻には三種類があった。①爆弾を抱いて敵艦船に体当たりするもの。②敵大型機を体当たりにより撃墜しようとするもの。③敵航空基地を生還を期することなく航空攻撃を加えるもの。

①について、計画的にこの戦法を取ったのは、比島作戦の時からである。嚆矢は海軍の大西中将率いる第一航空艦隊から選出した第一神風特攻隊(敷島・大和・朝日・山桜の四隊、爆装した零戦全部で二四機より成る)で、19年10月25日から数回に亘りレイテ島近海の敵艦隊に大打撃を与えた。陸軍は内地で編成した富岳、万朶の二隊(前者は4式重、後者は99双軽、両隊共一二機)が始めで、陸海軍とも次々と特攻隊を繰出した。沖繩作戦では特攻が航空作戦の主体となった。

比島作戦で特攻戦死者は海軍四〇一柱、陸軍二八三柱

沖繩作戦では海軍一五八二柱、陸軍九四八柱

②について、防空専任部隊は第十飛行師団(関東)、第十一飛行師団(中部)、第十二飛行師団(西部)

の三個師団で、体当たり専任者を指定したが、それより前に体当たり撃墜し戦死した者もあった。また明野飛行師団や常陸飛行師団でも要撃戦闘に出て体当たりした者もあった。海軍の大村航空隊にも体当たり撃墜し戦死した者がいる。

③について、サイパンのB-29基地を爆撃に出て未帰還となった者が陸海軍とも少なくないが、これは特攻の中に入っていない。特攻として認められているのは第一御楯特別攻撃隊だけで、零戦一二機で在地のB-29を銃撃し、全機未帰還となった。

《水上特攻》

陸海軍ともに小型高速艇の体当たりにより敵艦の撃沈をはかった。陸軍は船舶特別幹部候補生として少年を募集し、適齢未満の者が競って志願し要員を満たした。海軍は主として予科練として採用した者の中から志願者を募り充足した。

海軍唯一の震洋特攻艇は、艇首に二五〇疋を爆装した木造合板製で、自動車エンジンをつけ、長さ五米、幅一・七米、排水量一・三噸、速力20ノット、乗員一名で、当初は艇主爆装のみであったが、二〇年一月からは12耗噴進砲(ロサ弾)二基を装備、またその後の五型では、エンジン二基、長さ六・五米、幅一・八米、排水量二・二噸、速力27ノット、乗員二名で新たに13耗機銃一挺と一部無線電話を装備した。

陸軍では特攻艇は長さ五・六米、幅一・八米ベニヤ板製の半滑走型で、秘匿名を◎と稱し排水量一・五噸、速力20ノット、乗員一名(戦隊長・中隊長艇は二名)、後尾に二五〇疋爆雷を装備し、このほか

の装備及び通信連絡手段はなかった。

部隊の展開は、海軍は小笠原。比島・南西諸島・台湾・海南島・済州島ついで国内各地、陸軍では海協定により、比島・台湾・沖繩ついで九州を予定した。作戦発動では陸海いづれも部隊指揮官の独断運用を禁じ、最高指揮官統制とした。

部隊の戦果は、陸軍では比島リンガエン及びバタングス、沖繩では本島展開の戦隊が、海軍では、比島コレヒドール、沖繩では金武湾展開の部隊が、それぞれ困難な状況を突破して特攻攻撃を敢行し多大の戦果をあげた。

《水中特攻》

回天は搭乗員一人が操縦して敵艦の艦底へ肉弾体当たり攻撃を行い、頭部の一・五五トンの炸薬で一発轟沈を果たす兵器である。潜水艦の甲板に搭載されて、当初は前進基地に停泊中の空母、戦艦を目標に攻撃したが、後には洋上を航行中の艦船を攻撃し、制海権、制空権を失ったのちも広く太平洋上で活動を続け、終戦の時まで敵軍に脅威を与え続けた。

また陸上で待機し、敵部隊が接近すれば発進して迎え撃つ基地回天隊も編成され、沖繩、八丈島、次いで九州、四国の海岸を中心に展開していった。停泊艦攻撃に参加した回天は5隊、搭載潜水艦18隻、回天78基であって、航行艦攻撃は4隊、搭載潜水艦13隻、回天68基であった。陸上基地回天隊は13隊、回天96基が進出した。

回天搭乗員は海軍兵学校、機関学校、兵科予備士官、予科練出身下士官などの多数の志願者から選抜され、計一三七五名。うち戦没者は一〇六柱であつた。

た。

回天一型は約四二〇基が生産され、実戦投入は延約一三〇基、基地回天隊に展開したものの約一〇〇基であった。回天二型、四型、十型も開発されたが使用に至らなかった。

水中特攻兵器には、開戦時の真珠湾攻撃に参加した特殊潜航艇（甲標的甲型）がのち各地に出撃したほか改良を経て搭乗員5名の蛟龍（甲標的丁型）となり、また搭乗員2名の海龍が開発され、ともに大量に生産されて本土防衛の配備に就いた。

《空挺特攻》

始めから友軍と提携や撤退の見込みがなく、敵中に降着する空挺作戦は特攻作戦であり、レイテ空挺作戦でタクロバンやドラグに向かった部隊はこれであるが、第四航空軍で事務処理を怠ったため特攻として記録されていない。空挺特攻として後世に名をとどめているのは、義烈空挺隊だけである。

この部隊は挺進第一聯隊の奥山中隊と空輸に任じる第三独立飛行隊を併せたものである。19年12月サイパンに強行着陸し、飛行場とB-29を破壊しようとしたが、飛行隊の訓練に手間取ったり、中継飛行場の硫黄島が使えなくなったりして、取り止めになった。その後も特攻隊として第六航空軍に所属して訓練を積んでいたが、翌20年4月沖繩作戦が開始されるや、戦史にその名をとどめることになった。飛行機の故障や航法の未熟のため途中四機が不時着したが、それ以外一八名全員戦死した。

空挺同志会の

「空」の墓前祭

—それは絶対に絶える事は無い—
高野山境内には「空」と一字刻んだ墓がある。挺進戦友会が昭和三十一年に建てた墓で、石室には一万余の陸軍挺進部隊戦死者の名簿が納められている。はじめは大阪に本拠を置く挺進戦友会が管理し、毎年祭典を行っていたが、中心人物の死去に伴い、習志野に本拠を置く空挺同志会に移した。この会は昔の戦友、元自衛隊空挺隊員、現職空挺隊員、三本柱の団体である。空挺同志会が管理するようになってから、会員の逝去者で遺族の申し出により分骨を納めるようになった。

今年の墓前祭は九月十八日に行われたが、参列者は約三百人、昔の戦友は十名足らずで、主催者以下参列者の大半は戦後の空挺関係者だった。合祀者は八柱だった。

「空」の墓に捧ぐ

- 一、亭々そびゆる杉小立 歴史を語る 塔の群 法燈絶えぬ 聖域に 魂鎮まりて 幾年か
- 二、空の神兵と謳われし 世界に冠たる精兵の 天駆けりゆく戦場も 遠き昔の 語りぐさ
- 三、唐瀬の原に練武して 生死誓いし 戦友の 君は護国の神となり 我は浮世に永らえぬ
- 四、祖国の山野変らねど 人の心はうつろいて 巷に物は 溢れども 心乏しき世となりぬ
- 五、お国の為に身を捨てし 英霊祀る 靖国の 宮を護持せぬ国となり 我ら微力を深く恥ず
- 六、老兵やがて消ゆるとも この奥津城の縁にて 心結びし 若人に 祖国の行手託すべし
- 七、泉下に鎮まる同志らに 八つの柱を今日加え 迎える 数多英霊と 物語るらん 落下傘
- 八、読経の声は浸み渡り み魂に告ぐる一言は やがて我往く霊界に つもる話を 携えて



自衛隊空挺団長



恒例市街行進

航空特別幹部候補生と特攻隊員について

深井 正昭
備、特殊艇の

り、船舶兵の中に船舶工兵、通信、整備、特殊艇の分科があるの

て「一六六人」と記載されているが、総集編を再点検して集計したところ「一八三人」であり内訳は「操縦一七八人」「無線五人」である。

また「六月以降編成した特攻隊に出ている突入隊員は1名のみであるが、特業は機上無線である。出身欄が空欄の者もいるので、左記に特幹1期の突入隊員を列記する。

1 近藤知康 兵長 飛行第62戦隊

昭和二〇、四、一七戦死 航法(柏第四航空教育隊―特進准尉)

2 永野和男 伍長 飛行第62戦隊

昭和二〇、五、二五戦死 航法(八日市第八航空教育隊―特進少尉)

3 湯村 泰 伍長 誠第七一飛行隊

昭和二〇、五、二四戦死 機上無線

4 土山茂夫 伍長 飛行第5戦隊

昭和二〇、五、二九戦死 機上無線

(航空通信尾上教育隊―特進少尉)

5 石井 博 伍長 第二五五神鷲隊

昭和二〇、八、九戦死 機上通信

(航空通信長岡教育隊―特進少尉)

6 藤田重喜 伍長 第二〇一神鷲隊

昭和二〇、八、一三戦死 機上通信

(航空通信長岡教育隊―特進少尉)

以上の六名が現在確認されている特幹一期生出身の突入特攻隊員である。

平成十五年三月二十日発行の特別攻撃隊四版(財)・特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会編著)において空欄が埋められ誤記が訂正されており、関係者の努力にお礼申し上げます。

特に『特幹1期航空特攻戦死者の鎮

第64号に掲載された待機陸軍航空特攻隊の記事の中で特別幹部候補生に関する採用制度、特攻隊員数並びに突入隊員等について同号26頁に記載されている文言が、事実と若干相違するの

で一筆認めてみた。

①特別幹部候補生は大東亜戦争も末期に近く消耗品そのものの、短期下士官養成制度で、正しくは『陸軍現役下士官補充及服役臨時特例』として昭和十八年十二月十四日・勅令第九百二十二号の公布によって誕生した制度である。

昭和十九年四月一期生採用の志願者心得によると「大正十三年四月二日より昭和二年四月一日までに出生の者」とあり、身長一、五〇米以上の身体健全な者(妻帯者等除く)で学歴は問われていない。

検査の内容は身体検査、口頭試問及び

学科試験であり、学科は概ね中等学校第三学年第二学期程度で算数と作文。

採用する兵種は飛行、船舶、通信、

兵技、航法等であったが、四月採用は飛行兵と船舶兵の二兵種のみで、飛行兵

の中には操縦、通信、整備の分科があ

②特別幹部候補生の待機隊員数につ

で、志願票にそれぞれ志望兵種と希望分科を記入して提出。試験場は当時の各師団管轄下の主要都市で、例えば宇都宮師管では宇都宮、水戸、高崎、土浦、足利、渋川の六都市であった。身体検査と口頭試問は昭和十九年二月上旬に実施。学科試験は同年二月十六日に全試験場において一斉に実施されたのである。但し、中等学校長の推薦する者については学科試験が免除されている。

右の要領によって採用検査が実施され、採用予定者として同年三月中旬迄に入隊(入校)先が本人に通知され、入校後、再度身体検査(更に機上勤務者は適性検査を実施)を行って合格者として正式に入校(入隊)を許可された。

したがって志願者の多くは中等学校の在学生乃至は卒業者ではあったが、高等小学校の卒業者であっても志願合格して入校しているの『中学三、四、五年の在校生から採用した』とする限定した表現は誤りである。

③26頁下段末尾に「突入特攻隊の中で特幹出身者は1名だけ……」と記載されている。総集編の突入攻撃隊一覧において「特幹1期」と明確に活字化さ

れている突入隊員は1名のみであるが、特業は機上無線である。出身欄が空欄の者もいるので、左記に特幹1期の突入隊員を列記する。

1 近藤知康 兵長 飛行第62戦隊

昭和二〇、四、一七戦死 航法(柏第四航空教育隊―特進准尉)

2 永野和男 伍長 飛行第62戦隊

昭和二〇、五、二五戦死 航法(八日市第八航空教育隊―特進少尉)

3 湯村 泰 伍長 誠第七一飛行隊

昭和二〇、五、二四戦死 機上無線

4 土山茂夫 伍長 飛行第5戦隊

昭和二〇、五、二九戦死 機上無線

(航空通信尾上教育隊―特進少尉)

5 石井 博 伍長 第二五五神鷲隊

昭和二〇、八、九戦死 機上通信

(航空通信長岡教育隊―特進少尉)

6 藤田重喜 伍長 第二〇一神鷲隊

昭和二〇、八、一三戦死 機上通信

(航空通信長岡教育隊―特進少尉)

以上の六名が現在確認されている特幹一期生出身の突入特攻隊員である。

平成十五年三月二十日発行の特別攻撃隊四版(財)・特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会編著)において空欄が埋められ誤記が訂正されており、関係者の努力にお礼申し上げます。

特に『特幹1期航空特攻戦死者の鎮

魂賦』として平成十一年二月航空碑奉賛同人会発行の「鎮魂第五号」に六隊員の軍歴、出撃経過並びに戦死状況等の記録を要約し集大成して投稿発表された、特幹一期、柏四教出身 野村巨氏（北海道静内町在住）の労に對し、この紙面をお借りして衷心より感謝致す次第。

なお、前記 坂 候補生の特攻隊要員としての転属に当たり、前途の武運を念じて長岡教育隊（教育隊長内藤二三男中佐）の全部隊を挙げて、昭和二〇年二月八日に盛大な壮行会が行われたことを付記する。



陸軍航空通信学校
長岡教育隊の碑

小泉首相の言「心ならずも戦場に赴き亡くなられた方への哀悼の誠を捧げ——」とは御祭神を冒瀆すること甚だしい

靖国神社参拝について中国から文句を言われると、このように言うが、戦死者の中には、心ならずも戦場に赴かれた方があったことを否定はしない。しかし、お国の為、親兄弟を守る為、進んで命を投げ出した特攻隊員は何千といた。特攻隊員ならずとも、歓呼の聲に送られて国を出た兵士の心情を、心ならずも戦場に赴きと、言っているのか。戦後に育った首相にはその気持はわからないのか。

米軍はイラクで多くの兵士を亡っている。あの人達心ならずも戦場に赴いたとは聞いていない。我が国でも「東洋平和の為ならば、何んで命が惜しかろう」と心底から謳った時代があった。総理大臣は自衛隊の最高統率者だ。一朝事ある時、自衛隊員は一命を賭して戦わねばならぬ。そのとき、お前達は心ならずも戦場にゆけと、最高統率者が言うのか。小泉首相をしてこんな心を抱かせた戦後教育の恐ろしさに、戦慄を覚える。

進んで戦場に赴いた事例は無数あるが、その若干を紹介する。

大石政則少尉は東京帝国大学法学部二年在学中に学徒動員で海軍に入り、第十四期飛行予備学生となり任官、志願して特攻隊員となり、八幡神忠隊の一員となった。二十年四月二十八日97艦攻に搭乗し串良を発進、那覇近海の敵艦に突入散華した。彼が母親に宛てた遺書の一節、

「二三〇発進、沖繩周辺の敵輸送船に對し痛快なる突入を決行します。仮令途中で墜とされることがあっても、戦果はなくとも、二十代の若武者が次から次へと特攻攻撃を連続し、ますらをの命をつみ重ねつみ重ねして、大和島根を守りぬくことができれば幸いです。ありませんか」

この遺書のどこに心ならずもの気持があるのか。

もう一つ掲げてみよう。

佐藤新平曹長は仙台乗員養成所出身第七十九振武隊、二十年四月十六日知蘭発進、沖繩西方洋上で散華
「留魂録」と題する日記を遺した。

その一節、
三月二十七日

待望の日は遂に來た。特別攻撃隊の一員として悠久の大義に生く。日本男児として、又、空中戦士として、之に過ぐる喜びは無し。

有難き御世に生れ、そして育てられし広恩、必死、必中、唯これを以て報いんのみ。

思えば大空に志し、翼の生活に入り、早六歳、昨年より特別攻撃隊の熱望三度にして、漸く希望容れらる。神我を見捨て給わず。

六歳に互り、練り鍛えし腕に十二分に自信あり。

父上母上様もお喜び下さい。軍人としての修養は只立派な死場所を得るにあります。最後まで操縦桿を握って死ねる有難い死場所を得ることが出来、新平幸福感で一杯です。

後に続くを信ずと言って征った特攻烈士に對し、現在の我々として如何になすべきか。それはこの史実と精神を広く、末永く、伝えること以外にはない。我が協会は慰靈祭をやり、会報を発行したりしているが、それは約四千の会員限りとならざるを得ない。従って会員を増加することが喫緊事である。現会員全員が新たに一人勧誘入会させれば、たちまち会員は二倍になる。どうか皆さんの奮起をお願いする。

大西滝治郎中将が 航空特攻を決意するまで

戦史
叢書

大本營海軍部・聯合艦隊(6)抜

福留中将は10月22日夕刻、第二航空艦隊の主力を率いてマニラに進出した。このとき第一航空艦隊司令長官は、大西滝治郎中将となっていた。大西中将のマニラ着任は、基地航空部隊が神風特別攻撃隊を編成する決定的な動機となった。いま少しここで、本件に触れておかなければならない。

した。しかし既述のとおり海軍部では当時、「震洋」「回天」「櫻花」の使用計画を促進していたものの、航空機の使用計画を促進してはなかった。及川総長は大西中将に対し、「命令で体当たりをやることはないように」との見解を伝えた。同中将は源田實中佐に対しても自己の考えを述べ、同中佐は中將の体当たり決行の決意を明白に知ったという。

大西中将は10月9日東京を出発し、

さきのダバオ誤報事件やセブ事件との関連もあり、海軍中央部は当時軍需省航空兵器総局総務局長であった大西中将を、第一航空艦隊司令長官の含みで、19年10月5日付で南西方面艦隊司令部附とした。同中将は総務局長のときすでに、「もう体当たりでなければいけない」と周囲の者に話しており、

10日鹿屋基地に着いたところで、米機動部隊の沖縄空襲に遭遇した。そこで上海を経由して11日に高雄に到着したが、豊田大將が比島巡視からの帰途新竹基地にあるのを知ると、同日ただちに新竹に飛んで豊田大將を訪問した。臺灣は既述のとおり翌12日から14日まで米機動部隊の攻撃を受け、中將は豊田大將一行と共につぶさにわが航空邀撃戦の状況を注視していた。新竹上空におけるわが零式戦闘機と米F6Fの空中戦闘を見守りつつ、中將は、豊田大將に同行中の聯合艦隊航空乙參謀多田篤次少佐に対し、「これでは体当たり以外に方法がないではないか」と話したという。また中將は豊田大將にも、自己の考えを述べ「とてもいままでの

第一航空艦隊への転出が決定したとき、「オレは比島に行って必ずやるから、お前たちもあとからこい」と決意を漏らし、同局の総務課員杉山利一中佐は、「大西中将みずから真先に体当たりするだろう」と直感したという。

大西中将は東京を出発するに先立ち、軍令部総長官邸で及川総長に対し、航空機による体当たり攻撃の決意を上申

やり方ではいけない。戦争初期のような練度の者ならよいが、なかには単独飛行がやっとうという搭乗員が沢山いる。こういう者が雷爆撃をやってもただ被害が多いだけで、成果はあげられない。体当たり以外に方法はないと思う。しかし上級者の強制命令でやれと言うことはできぬ。そういう空気にならないければ実行できない」と述懐している。中將は16日新竹を発し、17日にマニラの第一航空艦隊司令部に到着した。

他の隊も自然これに続くであろう。航空部隊がこれを決行すれば、水上部隊もまた其の気持ちになるであろう。海軍全部がこの意気でゆけば、陸軍もつづいて来るであろう」などとこもこも語り、結局、必死必中の体当たり戦法以外には国を救う方法はないという結論に到達した。

翌18日、捷一号作戦は発動された。

決戦は迫り比島の航空兵力は少ない。

基地航空部隊の当面の任務は、敵空母の甲板を撃破してその発着艦能力を奪い、水上部隊の突入を成功させることである。大西中将は、現司令長官の寺岡謹平中将に体当たりの決断を述べ、「普通の戦法では間に合わない」「戦争に勝つためには心を鬼にせざるを得ない」「必死の志願をしたものは、姓名をあらかじめ大本營に報告して、彼らの心構えを厳粛にし、心を落ち着かせる必要がある」と

大西中将は特攻隊編成後21日、南西方面艦隊司令部に到り、敵空母の甲板を撃破する時間的余裕をうるため、第一遊撃部隊の突入時機を延期するよう、三川中将に協議したが、各艦隊は基準日を25日として行動しつづあり、延期はもろろん困難であった。

「司令を介せず直接彼ら若鷲たち

中將はまた、22日にマニラに進出した福留中将に対しても、特別攻撃法を採用するよう説得した。しかし第二航空艦隊が特攻採用に踏み切ったのは、第一航空艦隊の成功(25日)を見たのちとなる。

「いや司令を通じた方が後々のため

大西中将は前述のように寺岡中将に対して、特攻隊員の姓名をあらかじめ大本營に報告する件を語ったが、中將

「まず戦闘機隊の勇士で編成すれば、

「よかろう」

「よかろう」

「よかろう」

は東京出発前に本件についてすでに、軍令部第一課の源田實中佐と協議していた。中将が臺灣にある13日に、源田中佐は、

神風隊攻撃ノ発表ハ全軍ノ士気昂揚並ニ国民戦意ノ振作ニ至大ノ関係アル処 各隊攻撃実施ノ都度純忠ノ至誠ニ報ヒ攻撃隊名(敷島隊、朝日隊等)ヲモ件セ適当ノ時機ニ発表ノコトニ取計ヒ度処 貴見至急承知致度との電文を起案し(発信者 大本營海軍参謀部第一部長、着信者 第一航空艦隊司令長官、受報者 南西方面艦隊司令長官)発信の準備を進めていた。

神風特別攻撃隊の活躍

25日の第四の戦闘は、レイテ湾東方洋上における神風特別攻撃隊の活躍である。

大西中将指揮下の第一航空艦隊の特別攻撃隊の一隊は、この日〇六三〇ダバオを発進し、スリガオ東方四〇哩付近で敵機動部隊を攻撃し、「正規空母一隻」の撃破を報じた。(現実にはこの部隊は、護送空母群指揮官T・スプラーグ少将の直率する第一群を攻撃し、護送空母サンチーと、同じくスワンニーに突入、被害を与えた。わが直掩機は、一機だけの突入を確認したことになる)

さらに大きい戦果は、關行雄大尉の指揮する敷島隊の戦果であった。この隊はクラーク基地を早朝発進し、比島東方を南下してレイテ湾口近くで米空母群の攻撃に成功した。海軍部は三川中将から、

神風隊ノ攻撃 一〇四五「スルアン」ノ三〇度三〇哩ニ於テ中型空母四隻ヲ攻撃 空母一轟沈(二機命中) 空母一火災停止効果大(一機命中) 駆逐一轟沈(一機命中)

との報告(一六〇五番電)を受けて襟を正した。それまでの戦果報告はすべて、「爆弾命中」「魚雷命中」であった。

それが「一機命中」「二機命中」となり、その言葉の持つ響きに、海軍部は異様な衝動を受けた。(この隊が突入したのは、C・スプラーグ少将の指揮する護送空母群の第三群であった。すなわちこの空母群は、栗田中将との遭遇戦でようやく危険を逃れてレイテ方面へ避退中、続いて敷島隊に攻撃されたわけである。この攻撃で護送空母セント・ローは沈没し、同じくキクトン・ベイ、ホワイト・ブレインズ、カリニオン・ベイの三隻が撃破された。)

及川軍令部総長は翌日、この戦果を奏上した。海軍部はまだ神風特別攻撃隊については、これまで何も奏上して

いなかった。天皇も衝撃を受けられ、海軍部は本攻撃について「御説明資料」を作成し、侍従武官府に提出した(10月28日)。このなかで海軍部は、

神風特攻隊ハ現戦局打開ノ為在比島海軍航空部隊ヲ以テ編成致シマシタ特別攻撃隊デ御座イマス 本攻撃隊ハ計画的ニ敵航空母艦ニ体当リヲ敢行シ其ノ機能ヲ封殺スルノヲ目的ト致シテ居リマシテ 其ノ編制ハ二五〇疋爆弾装備ノ戦闘機二(三機ヲ以テ攻撃隊トシ 之ニ略同数ノ戦闘機ヲ直掩隊トシテ付シ掩護並ニ戦果確認ヲ実施セシメテ居リマス……

本特攻隊ガ帝国海軍従来ノ特別攻撃隊又ハ決死隊ト異リマス点ハ 計画的ニ艦ニ突入致シマス関係上生還ノ算絶無ナル点デ御座イマス

本計画ハ最初第一航空艦隊ノ戦闘機ノミニテ編成致シテ居リマシタガ現在デハ各隊各機種ニ及ボシツツアル模様デ御座イマス

と申し述べた。

福留中将指揮下の第二航空艦隊の兵力は25日、二次にわたりサマール東方洋上の敵機動部隊攻撃に向かった(第一次五十余機、第二次七十余機)。しかし

かすずべて、敵を発見するに至らなかった(敵の高速空母群は目標海域よりもより北方に、護送空母群はより南方に

いた)。これは海軍部を、失望させるものであった。

大西中将は特攻機が突入した場合、その敵空母に与える効果について、最初の間不安をもっていた。25日の敷島隊の戦果は、大西中将に自信を与えた。当日の第二航空艦隊の攻撃の不振と神風特別攻撃隊の戦果は、福留中将が大西中将の説得に応じ、それ以後特別攻撃実施に踏み切る動機となった。こうして前記の「御説明資料」の最後の項のようになるのである。



10月26日、日本海軍航空部隊の急降下爆撃と特攻機の突入を受ける米護衛空母「スワンニー」。

特攻会報に寄せて

志波 武次郎

特攻慰霊協会の会員となって私は多くのことを学ぶことができた。その一つは特攻隊の戦闘の実態を明確詳細に知ることが出来、深い感銘を覚えたことである。その二つは特攻隊は大東亜戦争に於て広くかつ高い視点から考察され、その戦略の位置付けを深く考えさせられるものがあつたことである。

その三つは大東亜戦争における空・海・陸の戦闘状況を考察する場合、過去の戦争でも日本軍は特攻魂をもって戦つたことは申すまでもないが、特に今次戦争では多くの局面で特攻作戦がより鮮明に印象付けられたことである。

私は中尉時代は重爆撃機の操縦者として重慶・成都・蘭州など支那奥地攻撃作戦に参加した。また地上軍作戦協力は漢口など武漢三鎮攻略の揚子江廻り作戦や北支方面の作戦に協力した。

私は編隊長機機の操縦を担当する機会が多く、奥地作戦は遠距離の為戦闘機隊の援護を受けられない云わば裸のままの攻撃行であり、敵戦闘機の波状攻撃を受け、作戦の度に何機かが撃墜された。さらに当時の九七式重爆撃は被弾による火災が発生し易く、また速度

は二百四十軒、高度は六〇〇〇米が精一杯であつた。従つて高射砲の標的ともなつた。敵のB29の如き装備と数百機の大波状攻撃とは比較にならない。

それでも支那大陸の敵飛行場及び戦略施設の破壊は、国土防衛の至上命題であり損害を顧みず攻撃を反覆した。帰投の望みのないこのような作戦は特攻魂に通ずるものではないのか。このような作戦は海上戦地上戦を問わず、たとえば玉碎作戦、艦隊の突入作戦など、特攻隊の名称を付けずとも特攻魂の発露である。今次大東亜戦争は愛国愛民の大和魂を持つ国民が一つになり、最後まで特攻魂をもって戦つたものである聖戦と思う。

戦争後半頃私は大本宮作戦課参謀を拝命した。当時既に本土防衛作戦準備が進められていたと思う。私は職務の一つとして殆んど毎朝参謀本部作戦室に参謀本部・陸軍省など統帥部の幹部が集つた席上で戦況を説明した。また参謀総長・次長に随時戦況を報告、そして総長が天皇陛下に戦況を奏上する際は随行して控室で待機した。総長がどのように説明されたかはお話がなく知り得なかつたが、陛下の「よく戦っている」とのお言葉が毎回あつたこと、そしてそのことを現地軍に伝達するよう指示され私はお言葉のままを打電し

た。総長次長に私が戦況報告する際には、しばしば何か旨い方策はないのかと下問された。しかし私はそれにお答えする立場では全く無い。私は空中爆弾が熱源に誘導される「ケア弾」なるものが研究されていると聞いていたが、実現したかどうかは知らない。ただその時から私の頭の中に現在のミサイルのようなものがあつたらなあーとの夢を持っていて。今日特攻の英霊に手を合わせる度に、昔のこの夢が胸の中に熱く甦ってくるのである。

特攻隊員の霊魂は今安らかに靖国神社に眠つておられる。当特攻協会は毎年靖国神社と世田谷観音において鎮魂の祭典を催されているが、日本人の神佛一如と云う、霊魂に対する世界にはとんど例のない、民族の感性と云うものに基くと私は考える。昔の通常家庭には神棚と佛壇が併置され慰霊をして来たのを見ても、このことが理解できるのではなからうか。

今日この頃新たに国立の無宗教の慰霊施設を建設しようとする動きがあるが、英霊の休まれる場所ではあるまい。さて十一月に発行される特攻会報をもって終戦六十周年に関するものは、一応締め括りをされることであるが、この会報こそ大東亜戦争の生きた戦闘記録であり、戦略史として価値の

高いことを考えると、大変惜まれ残念な気持がする。永年にわたり編集者を中心とする関係委員の方々に對し、深甚の敬意と謝意を表するものであります。

ついではこの機会にこれまでの会報を要約集大成した「特攻」を編著し、広く国民に頒布し、特攻の魂が現代人に深く銘記されるならば、英霊の加護により承諾必謹に徹し復興した日本の今日、特に若者を中心とした精神喪失焦燥、世俗の頹廢と憂うべき現状に對し大きな警鐘を与えるものと信じる次第である。

御検討いただければ幸せに存じます。

去る九月三十日、台湾人等が提訴した「台湾靖国訴訟」の判決が大阪高裁であつた。大谷裁判長は原告の損害賠償の請求は却けたが、傍論で靖国神社本殿で祭神と直ちに向きあつて拝礼する行為は憲法違反だと述べた。国側が勝訴したのだから上告はできない。

それがためか十月十七日に小泉首相は、平服のまま拝殿の前で賽銭を投げ込み礼拝し引き上げた。総理大臣に相応しからぬ態度に御祭神は御不満だつたらう。お国の為戦死した英霊に手厚く拝礼することは憲法以前の常識で、それを弁えない裁判官を法匪という。

靖国慰霊祭のビデオを観て

九州邪馬溪住人元陸士57期生

久保 一臣 82才

小林広司様

事務局長註

前略 此の度は記念のビデオ「第二十六回特攻隊合同慰霊祭」お送り下され確取。沁みじみと拝観させて頂き有難う御座居ました。此の記録、正に私が参会参拝させていただいたと同じ気分での74分間で、臨場感あり、参会者の中に知人も一々二人発見し得て誠に参殿中の人となる気持で観ることが出来、緊張致しました。

久保一臣氏のビデオ製作者小林広司氏への礼状、遠隔地在在の会員の方々へ、毎年春に営まれている靖国神社での慰霊祭の実況を、百聞は一見に如かずの、又未加入の知人・友人への協会のPRの恰好の手段になると考え、久保氏の御快諾を得て、本誌に掲載することに致しました。尚ビデオに関しては、64号(45頁)でお知らせしました。

特攻第64号訂正

29頁 陸軍海上挺進戦隊

展開地・隊長名(表)

(訂正箇所)

○第15戦隊隊長小串修↓脩へ

○第23戦隊中隊長石月忠夫↓服部善三郎へ

会員訃報

謹んで哀悼の意をささげます

- 青森 鈴木正五郎 (17・8)
- 茨城 菅井 薫 (17・8)
- 埼玉 菅 實 (17・8)
- 東京 鈴木 三郎 (17・7)
- 神奈川 井上 直敏 (17・5)
- 愛知 杉浦 茂文 (17・8)
- 大阪 中島 邦彦 (17・8)
- 兵庫 大山 三男 (17・8)
- 奈良 河野 隆志 (17・8)
- 広島 越間 節 (17・8)
- 大分 中嶋憲一郎 (17・8)
- 沖縄 大山 正夫 (17・8)

新入会員名簿

(平成17年4月1日～9月30日)

- 秋田 永山裕恒 ○茨城 隅 正雄、
- 長谷川智久 ○埼玉 高田槌造、中島
- 幸雄、山中造太郎 ○千葉 大手良之
- 東京 井上千丈、尾田忠利、小暮周
- 吾、(財)全慰協、立石昌止、中溝昭子、
- 平松照久、満留芳廣、山田七生 ○神
- 奈川 落合孝、神尾弥一、座間昭三、
- 鈴木真由美、廣江正九三 ○長野 柳
- 澤喜三郎 ○静岡 志村千恵子 ○愛
- 知 浅野忠伯 ○滋賀 西村孝三 ○奈
- 良 美濃田三郎 ○徳島 山本勤也
- 福岡 村上義孝 ○鹿児島 野添博志

大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

(慰霊協) 正式に発足

特攻63号で既にお知らせしてありますが、去る7月7日、正式認可が所管庁の厚労省かり下りて、8月10日に、三笠宮崇仁親王殿下の台臨を仰いで、関係諸団体の代表240名が靖国神社に昇殿参拝を致しました。

終って靖国会館で総会を開きました。席上瀬島会長は、挨拶の中で認可が下りるのが、予定より遅れた理由を説明されました。

この事は、世田谷観音年次法要での祭文中に会長が取上げておられますが、体の奥深くに出来た病巣の除去は簡単とは考えられません。世論の高まりに依って、その騒動を抑え込むのが最も効果的ではないでしょうか。

当協会は、早速全慰協の賛助団体として加入致しました。

特攻平和観音堂の改修工事

2年越しの改修工事は、9月23日の年次法要の直前に完成致しました。年次法要に参加されなかった方々は、住職の挨拶と写真によって晴れ姿を御承知下さい。

2次に亘る御寄進で、壹千万円以上の浄財をお納め下さった会員の方々に改めて深甚の謝意を表します。

まずは台風14号一過の今日遅ればせ乍ら御礼を兼ねて走筆申し上げます。今後とも有意義なる記録挑戦に御健闘下さい。

敬具

平成十七年九月七日



改修箇所

- 一、正面階段(新設)
- 二、正面トビラ
- 三、回廊手すり
- 四、回廊床
- 五、壁面白かべ
- 六、壁面戸板 (外及び内)
- 七、基礎(腐蝕の部分)

特攻平和観音堂改修工事
完成に当たっての御挨拶

世田谷山観音寺

住職 太田 賢照

特攻平和観音堂の改修に際しましては、皆様方からは、二度に亘って多額の御寄進を賜り、お蔭様で予期以上の工事が出来たこと、誠に有難く心から厚く御礼を申し上げます。

解体を始めて、根太等の目に見えない基礎部分の老朽化が、予想以上に進んでいたことが判明、二年の歳月を要しましたが、充分な補強が出来ました。廻り廊下の手摺りも、隣の本堂に合わせて欄干を付けたら、との棟梁の進言があり、それも可能となりました。正面の扉も面目を一新致しました。昇殿階段はコンクリート造りとして、段差を低くし傾斜を緩くして、御高齢の方々の御負担が少なくなる様に配慮致しました。

非改修部分も塵を拂い、磨きをかけましたので、すっかり面目を一新致しました。おついでの際には是非お立寄り戴きたく御案内申し上げます。何卒これからも末永く皆様の特攻平和観音堂として、格別のお引立てを賜りたくお願い申し上げます。

終りに臨み、会員皆様方の御健勝と御多幸を心からお祈り申し上げます。

特攻平和観音堂

第二次改修費寄進者芳名録

(敬称略)

自17・7・1〜9・30

- 一、寄進額 貳拾四萬六千円
- 累計 六百壹拾六萬壹千參百円
- 一、寄進者数 五十三名
- 累計 一千四百五十五名
- 一、第一次及び第二次寄進額合計 壹千五拾貳萬七千參百円

栃木県 木村義朗、兵頭春夫、和田 恭三

埼玉県 新井重雄、近藤 与、嶋田 節子、日高 誠、深井みよ、本多定彦、本間修一

千葉県 山口 武

東京都 秋山穂積、岡田淳巳、木村 元正、小堀桂一郎、定松 操、佐藤重由、汐澤 隆、千田洋之助、野中一夫、林 聖二、細居俊司、和田 實

神奈川県 白川浩司、徳田孝二、長坂 祥夫、中野太郎、星野 久、山村哲也

富山県 西嶋與正

石川県 辻本正也

長野県 小林和夫

岐阜県 横山早巳

大阪府 上木利正、川村温夫、高田

浩、都築 進、渡辺 栄

兵庫県 中川一男

奈良県 伊藤 喬、北山禎彦

山口県 藤井日正

高知県 市川 昇

福岡県 上田 恵、大石嘉道、矢野 孝男

長崎県 山口慧心

熊本県 荒木 孝、大村精一、袴田 和泉、尾藤健二

宮崎県 船木 哲

鹿児島県 鶴村 勇

尋ね人

昨年の3月30日、靖国神社慰霊祭後の、総会・懇親会の席上で、山本会長に「無念の戦死と見られる特攻隊員(154人)」を手渡された方は、事務局まで御連絡下さい。

フィリピン慰霊旅行

旅行参加申込者は9月末日で28名に達しました(他に一旦申込んで取消した方が4名)。マバラカット・コレヒドール・モンテルパのAコースが6人、更にセブ・レイテを廻るBコースが21名になりました。台風に遭遇しないことを祈るのみであります。